
俺の（私の）りあるおにごっこ

アイズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の（私の）りあるおにごっこ

【Nコード】

N2249K

【作者名】

アイズ

【あらすじ】

これは六道立花とアリサ・バニングスの人生を賭けた鬼ごっこ。

プロローグ(前書き)

こちらのサイトでの処女作です。

ブローグ

はじめまして今回こちらで作品を書かせていただきますアイズです。友人に薦められて書く作品はキャラが少し壊れるかもしれませんが。また少しこちらの都合で設定を変えることがあります。

それでもよろしい方は駄文ですが読んでくださると幸いです

みんな久しぶり。アリサ・バニングスよ。これからみんなにみてもらうのはなのはやフェイト、はやて達とは全く関係のないお話し。

あ、全く関係ないと言ったら嘘になるかしら。

まあいいわ。

これは魔法少女リリカルなのはじゃなくて私とある男の子の体験談、そして現在進行形の物語。

題して【普通少女アリサ・バニングスと無手の少年】

。物語語りの始まりはなのは達側から言う第97管理外世界『地球』

アメリカの一流企業が開いたパーティー会場から始まるわ。

今思えばアレは運命ね。まさかこの私があんな風になるなんて…。

さて、前置きはここまで！書き手が下手くそなせいでつたない文章になるかもしれないけどそれでもいいって奴は読んでくれると幸いだわ。

それじゃ本編で会いましょう！！

「誰か！誰か来て！！」

誰もいない空間に響く私の声。必死に助けを求めるが誰も来ない。顔は涙で歪み悲痛の表情で染まっている。

床にへたり込んでいる私の側には一人の少年。彼の手はへし折れたであろう柱に下敷きになっていた。

「なんで誰も来ないのよ！！お願い……誰でもいいから……」

誰か助けて！！

《日本首都 東京》

午後8時過ぎ。日は当に沈み日本の首都東京は光の都と化しているこの時間。

また光の都とは裏腹に東京湾は闇で包まれている。そんな闇浮かぶ一つの光。それは光り輝く豪華客船。

色とりどりの光で飾られたその船の上では盛大なパーティーが催さ

れていた。十数

あるテーブルの上には手に着けるのも惜しいぐらいの素晴らしい料理が所せましと並べられており一流の演奏家による音楽が更に雰囲気盛り立てる。

そんな中私、アリサ・バニングスは一人椅子に腰掛けていた。

「……………またあの夢」

どうやら私はいつの間にか寝ていたらしい。肩に掛けられた肩掛けは鮫島が付けてくれたモノだろう。

今日はアメリカにある一流企業のパーティーがここ日本で開かれるとのことで私もお父様の付き添いで出席したのだ。

「……………」

だけど正直言つて暇である。各著名人や重役の方々にご挨拶を済ませた後は暇なのだ。たまに話しかけてくるのだがそのお相手をした後はやっぱり暇である。

今日は親友であるすずかの実家月村は出席しないから更に暇である。

「はあ……。これなら家で勉強していた方が良かったかしら」

中学二年になつて親友達が魔法少女の仕事で忙しくて私も父の後を継ぐのに勉強で忙しくて。

そういえば最近年頃の女の子らしいことをしていない。お父様に好きな男の子はいないのかと聞かれ『いない』と返事したときの安堵したようなお父様の態度がムカついたのはいい思い出だ。

「それにしても暇ねえ……」

思わず愚痴り周囲に見えないように小さく欠伸。そんな時、目の前で奇妙な光景が目に入った。

「なにあれ？」

床を見つめてただ突っ立っている私と同一年位の少年。視線の先には財布。どうやらあれは少年の持ち物らしい。けど何故拾わない？するとどこからともなくメイドが現れ慌てて財布を拾うと彼のポケットに入れた。そしてへこへこ頭を下げるとその少年と共にどこかに行ってしまった。はて、なんだったのだろうか？

「アリサ！こっちに来なさい！！」

首を傾げているとお父様に呼ばれた。どうやらまたご挨拶にいかなければならぬらしい。軽く身なりを整えると待たせてはいけないと父の所へ早足で歩く。

「お待ちせしましたお父様」

「来たか。アリサ、こちら六道グループ会長、六道司さんだ。」

その紹介を受け私に緊張が走る。

目の前にいる女性は世界で十指にはいる大企業のトップである。まだ30代後半で大企業のトップを勤める手腕から【若き女帝】と言われている。けどどうみても20代前半よね？綺麗な黒髪だし、お肌スベスベだし。

けどまさかこんな場所でこんなVIPにお目にかかるとは思わなかったわ。

私は直ぐに礼儀正しく礼をする。

「お初にお目にかかります。アリサ・バニングスと申します。以後お見知り置きを……」

「はじめまして六道司といいます。礼儀正しいいい子ですねバニングスさん」

「ありがとうございます。アリサ、実はだな六道さんの御子息が聖祥に編入するそうだ。なにかあったら助けてあげなさい」

「はい。お父様」

「そういえば御子息の姿が見えませんが」

お父様が周囲を見渡し六道さんの御子息の姿を探す。対する六道も自分の身を守る為に近くに置いておいたSPに自分の子を探してくるように指示をだそうとしたとき。

「ごめん母さん。ちょっと人混みに酔ってて隅で休んでた」

彼女のそばに歩み寄る一人の少年。その少年は先程の彼。母親と同じ黒髪と黒い瞳がとても綺麗で顔立ちも中性的。第一印象が女の子とも取れる少年だった。

「立花。こちらバニングスさん。ご挨拶を」

「了解。六道司の一人息子で六道グループ本社代表統括顧問を勤めています。六道立花で」

最後まで言い終える寸前に彼の言葉が止まった。次第に汗が滝水のように流れ出す。大人二人は彼の硬直に首を傾げる。そして私が口を開いた。

みつけた

俺の名前は六道立花^{ロクドウリツカ}。この物語の主人公だ。
さっきバニングスがなんか自分の体験談プラス現在進行形のお話し
だとか言っていたがそれは間違ってる！！
これは俺の悲惨な日々を書き殴ったモノであってアイツの脳内シン
デレラストーリーじゃない！！
とりあえず色々と壊れているが良かったら見てやってくれ。
俺とアイツの人生を賭けた鬼ごっこを。

題して『六道立花の惨劇』

「母さん。俺帰っていいか？」

夜の東京の空に飛ぶヘリの中で俺は足を組み隣に座る女性に言う。
気だるさを口調へと盛大に表して己の意思表示をする。

「ダメ。今回のパーティーにはお得意様も参加するんだから本社の社長であり統括顧問のアナタは絶対参加よ。」

それを速攻で斬り伏せたのは隣に座る女性。世界十指に入る大企業【六道グループ】のトップ六道司、俺の母だ。

「挨拶回りと顔合わせが済んだら料理でも食べてればいいわ。名前は忘れたけどパフォーマンスで日本の人気歌手を呼んでるそうよ？」

「興味ない。それよりも明日の会議に出る案件に目を通したいんだけどさ？あと書類も上げないと」

俺は世界各地にある支社の中でも日本にある本社を任されていて社長兼日本内での統括顧問という肩書きを持つ。

ほぼ毎日多忙で目まぐるしい日々を送っているのだ。
正直、パーティーなんぞに出てる隙があったら本社に戻って溜まってる仕事に手を付けたい。

「そんなこと言わない。他の代表の御子息の方々もいらつしやると思うからその子達とお話してもしてたら？それともアレかしら。あの話しはナシにしてもらいたい？」

「……卑怯だ」

俺は今までアメリカの大学に通っていた。飛び級し昨年で主席卒業した。そこで母さんが卒業祝いに本社を任せてくれたのとなにか望みがないか聞いてきたのだ。そこで俺が述べたのは『日本で暮らしたい』というもの。

日本では義務教育制度があるから年齢的に中学を卒業するまで学校に通わないといけないがたった二年なのでこれは目を瞑ってもいい。日本は俺の生まれた国だしそれに

アイツがいる可能性の一番高いアメリカから逃げれるなら。

「やっと終わった………」

母さんの指示通り一通りの挨拶を終わらせて一人パーティー会場を歩く。

ついさっきまで他のご令嬢の相手をしたせいも異様に疲れた。しきりに絡んでくる子が子なら親も親だ。必死に自分の娘の顔を覚えさせようとこんなガキに向けて世辞を吐いてきやがる。
うぜえ、の一言だ。

「さっさと母さん見つけてへりで帰るか…あっ」

呆けた声と共にスーツのポケットから落ちた財布。俺はそれを見て苦悶の表情を見せる。

「しまったな…。そこらへんの人に拾わせるのもな…」

こういう時に限ってアイツはどこにいったんだか。

「申し訳ありません坊ちやま!!」

そうしている内に慌てて駆け寄ってきた金髪ショートメイド。彼女はサリ・エドワード。我が家の新人メイドで年も二つ上ということから俺の侍女を勤めている。掃除、炊事、洗濯をそつなくこなし更に武芸も立つ一種の完璧人間なのだが何かしら抜けている所があったりする。

「ちょうどいいやサリさん。財布拾ってくれるかな？上着の内ポケットに入れてくれると助かる」

「はい！かしこまりました!!」

せわしない動きで財布を拾い上げ『失礼します』と一言断ってからそれを上着の内ポケットに入れる。

「サンキユ。ところでまた迷子か？」

「申し訳ありません。つい先ほどまで機関室にいらして」

おお、今回はまた凄い場所に迷い込んだな。内心で苦笑しつつ頭を下げる彼女にそれを止めさせる。

「それじゃ、母さんを探すか。はぐれないように俺の半径1・5メートルからでるなよ?」

「ハイ!」

そして俺達は歩き出す。

この後、俺は最悪の再開を果たすことになった。

足が震える。背筋に悪寒が走る。汗が滝のように震えだす。視界が揺らぐ。意識が飛びそうになる。

はじめ母さんが言ったバニングスの一言を訊いて嫌な予感がしたがそれは見事的中してしまった。

目の前にいるコイツは……。

「六道立花っていうのねアナタ。OK、覚えてたわ」

この女は俺の正面に來ると真剣な表情で自己紹介する。

「お久しぶり。もう知っているかもしれないけどアリサ・バニングスよ。そしてお父様」

次に硬直して動けない俺の二の腕に腕をからませ抱きつく。あたかも私はアナタの彼女ですというオーラを作り出し自分の父親に向かつて。

「こちら私の命の恩人で婚約者、フィアンセの立花です」

なんてことをぬかしやがった。

石化するコイツと俺の親。今の一言で我に返った俺は

「誰がフィアンセだバニングス！！手を離せ！！」

と叫びつつ腕を振りほどこうとする。だがほどけない。むしろ抱きつく力が強くなっている。

「立花が助けた女の子ってアナタだったのね」

「ハイ。立花がいなかったら今頃私は…」

「立花君…。君のおかげでアリサはこうして今も元気でやっている。父親として一言言わせてくれ。ありがとう。そして娘はやらん」

「こらソコ！二人してなにシリアス入ってる！？次にバニングス父！別に礼は必要ありません結果がこうなっているだけです！！そしてなに言ってるんですか！？」

「そうよパパ！！私達の恋愛に口を出さないで！！」

「お前は黙れ！」

そのまま腕を引き抜くようにスーツの上着を脱ぎ去りバニングス娘から離れる。

瞬間俺達の親の顔が青くなる。特にバニングス父の顔は猛毒に犯されたかのようだ。今は春だが俺はスーツのジャケットの下には半袖を少し長くしたカッターを着ている。

そして親の顔が青くなった理由も知っている。

それもそつだ。俺の四肢の内二つ両腕、二の腕から下がらないだから。

ブローグ（後書き）

なるべく早く更新するよう努力します

【第一幕】一話『やってきた私の婚約者』（前書き）

編入初日の朝、これが俺の朝の日常

最愛の人編入当日、私の心は晴れ模様

これから始まる。

俺の

私の

人生をかけた鬼ごっこ

【第一幕】一話『やってきた私の婚約者』

「坊ちやま……。坊ちやま。朝でございますよ」

朝の6時30分。とある一室に女性の声が小さく響く。

その声を起こされ俺はゆっくりと目を開けた。

「…………おはようサリさん」

「おはようございます立花坊ちやま」

横になっている俺を覗き込んでいるのは俺の専属メイドのサリさん。

ここは俺の屋敷。

本家とは別に鳴海に立てられた俺の屋敷である。

俺の部屋は12畳一間の洋室。家具は大型テレビとコンポ、ダブルベッド、ソファで落ち着いた若者イメージな部屋だ。

そんなことよりも今朝は確か目覚ましをかけておいた筈だが？

「昨夜遅くのお帰りでしたので誠に勝手ながら目覚ましを止めさせていただきました。いつもより30分ほど遅くの御起床になります」

本来なら朝起きて直ぐ仕事の為に書斎に籠もるのだが昨夜頑張ったおかげで今朝はその必要もない。

俺のスケジュール、作業進度を頭に入れている彼女が気を利かせてくれたらしい。

「あの……。余計なことをしてしまったでしょうか？」

寝ぼけた俺の表情を見てサリさんがオロオロとした。寝起き、あ

まり機嫌のよくない俺。表情が険しくなってる所を彼女が勘違いしたようだ。

「いや、そんなことないよ。ありがとう。」

「はい!!」

礼を言うと途端に笑顔になった彼女はそのまま俺の着替えを行う。両手のない俺は彼女に着替えを手伝ってもらうのだ。

けど、流石に恥ずかしいのでズボン等は自分で履く。最初の頃はかなり四苦八苦しただが今では10秒程で履けるようになった。また食事の時は両腕に仕込んだ機械に取り付ける専用の『仕込みフォーク付義手：《命名》隠れフォーク君』、『仕込みナイフ&スプーン付義手：《命名》隠れナイフ君&スプーンちゃん』を使う。あ、ちなみに俺は左利きだ。

これはウチの開発グループの作品で筋肉の動きを電子信号で伝達させ人間の肘、手首の動きが可能。また、手首から先は手を模したマジックハンド、その手のひらからフォークやナイフ、スプーンがでてくるというもの。医療目的で開発されそれを俺は使っている。メイドがいるから必要ないだろと思われるが俺自身、あまり彼女の手は煩わせたくない。できる限り自分でやるのが心情である。

さて朝食を済ませて、食後のコーヒーを飲みつつその日のスケジュールを確認。

時間になったらサリさんと一緒に送迎の車に乗り込んで登校する。バニングスと同じ学校になってかなり頭を悩ました俺。母さんに言っただけで学校を変えて貰おうとしたが拒否された。

仕方なしにクラスだけでも別々になるよう根回しをしておいたので一日中アイツと同じ空間にいることはない。それを考えるとほんの少し、ほんの少しだけ気がラクになった。

はあ……。けどこれから二年アイツと同じ学校だと思つとやっぱり憂鬱だ。

「おはようなのは、フェイト、はやて、すずか」

朝、私アリサ・バニングスは教室の入り口をくぐり抜けると親友四人に挨拶する。

ここは聖祥大学付属中学校。

大学までエスカレーター式の私立校であり私の学び舎だ。

「珍しいね。アリサちゃんが一人で登校だなんて」

「昨日社交パーティーがあつて帰ってきたのが夜遅くなのよなのは。それで今朝は少し遅めの登校というわけ」

現在、8時15分。予鈴が20分なのでいつもとはかなり遅い登校だ。

「パーティーか。ええなあ、ウチも一度でええから参加してみたいわ」

はやてがうらやましそうに言う。パーティーと言っても正直暇で挨拶回りが済んだら料理を食べるかぼけつとしているしかやることはない。

まあ、昨日は嬉しい事があつたので良しとするが。

「あ、みんな知ってる？今日転校生がくるんだって」

フェイトの一言に私はかすかに反応する。私はしっている。

「ウチも噂でなら知つとるで。アメリカからの帰国子女なんやろ？」

「へ〜。どんな子なんだろ」

話を聞いてるうちにどんどん顔がにやけてくる。

私はその人物を知ってるのだ。

そうしているうちに担任が教室に入ってきたので各自席に座る。

そして始まるHR。

「え〜、今日は皆さんに嬉しいお知らせがあります。」

「ハイ！転校生ですよね！？」

バツと手を上げるはやて。

「フフ、八神さんは情報が早いわね。正確にはアメリカからの編入生です。まあ、詳しいことは後にしましょう。それじゃ六道君入ってきてー！」

先生に呼ばれて教室の前の扉がゆっくりと開く。

そこにはフェイトと同じ金髪を短く切りそろえたメイドの姿があった。

いきなり現れたメイドに教室が少し騒がしくなる。アレが転校生？六道君って言うだけど女の子？などといろんなセリフが飛び交う。そんな事を気にする素振りを見せないメイドは教室に入り入り口の

脇に立つと軽く頭を下げる。

それに合わせて入ってくる一人の少年。

彼はメイドの前を通り抜けて私達の前に立った。

「はじめまして。今日からここ、聖祥大学付属中で皆さんと一緒に勉強することになりました六道立花です。いろいろと皆さんにご迷惑をおかけするかとおもいますがよろしくお願いします」

その人物は私のフィアンセ（違う！）六道立花だ。

【第一幕】一話『やってきた私の婚約者』（後書き）

駄文ですみません。

【第一幕】二話『なんでお前がいるんだよ!?!』(前書き)

私の愛する一人が目の前にいる。

俺の天敵が目の前にいる。

これはもしかして運命？

絶対にこれは仕組まれた陰謀

【第一幕】二話『なんでお前がいるんだよ!?!』

『 六道君入ってきて!?! 』

担任の山陰千里やまかげちさとさんに呼ばれた。

俺は別に緊張などするような性格ではないので大丈夫なのだが。
問題は目の前にいる女性にある。

「坊ちやまに恥をかかせる訳にはいかない。坊ちやまの今後は私にかかっている。坊ちやまの第一印象は私次第。坊ちやま……………」

なんかブツブツと呪詛を紡いでいるメイド。
黙って見ているとかなり怖い。

「サリさん」

「ひゃい!?!」

あまりに不気味なので落ちつかせようと声をかけたらいきなり驚かれた。

その声にすこしばかり苦笑する。

「そんなに気負いせずともサリさんはいつも通りにしていればいいよ。」

「かしこまりました坊ちやま。」

返事がてらに一礼した彼女はすぐに六道家の従者としての顔になる。
そして扉を開け先導して教室に入っていた。

「さて、俺もすっかりしないとな」

残された俺は軽く気を引き締めると教室の入り口をくぐり抜ける。入り口の傍らで礼の姿勢をとっている自分の従者を横目に教室の前方中央、教卓の側に立つ担任の所まで歩み寄ると今日からクラスメートになる学生の方に向き直った。

「はじめまして。今日からここ、聖祥大学付属中で皆さんと一緒に勉強することになりました六道立花です。いろいろと皆さんにご迷惑をおかけするかとおもいますがよろしくお願いします」

俺の自己紹介に合わせて後ろの方ではサリさんが黒板に『六道立花』と書く。

書き終えた後に俺の横、少し後ろ気味に立つと彼女も礼をする。

「はじめまして。恐れながら六道家一子、立花様の専属メイドを勤めさせていただいております。サリ・エドワードと申します。立花様は事情により両手がございません。身の回りのお世話をさせていただきます。ただ、為に私も皆様とご一緒させていただくこととなります。未熟者でございますがよろしくお願いいたします」

挨拶の後拍手に包まれる教室。

よかった、ちゃんと挨拶ができたようだ。軽く安堵していると生徒達から質問が飛び交う。

これは予想していたので問題ない。

しかし、次の一言には同様に隠せなかった。

「立花~~~~!!」

彼らの声を遥かに上回る音量。瞬間、クラスは沈黙に包まれた。も

ちろん俺もだ。

その声の主に向かって生徒全員が首を向ける。効果音がつくなら錆びた機械の駆動音。一人一人ならまだしも30人を超える人数がその音を立てたならさなか古い機械工事の音になるかもしれない。

けどそんなことはどうでもいい!!

なんでお前がいるんだよ!?

「まっつたよ。立花」

バニングス!!!

俺の視線の先には俺を狙うあの女。

なぜアイツがここにいる!?

昨夜悪夢のパーティーが終わってこの学校の理事に話をつけた筈だ!!

「あら、六道君はバニングスさんとお知り合い?よかったわね。知り合いがクラスにいて」

担任のセリフに俺はバツと彼女を見る。今まで気付かなかったが彼女の視線は焦点が定まっていない。まさかと思いバニングスを見る。

「」

コイツだ!!犯人はコイツだ!!

ちゃんとやることやっといたよって顔するな!ウィンクするな!!

てめえ、一体なにしゃがった!?

「先生クラスを変えてください」

担任にむかって深く頭を下げる。

俺の口から出たのはこのクラス一名除いて全員に喧嘩を売ったようなセリフ。

クラスを敵に回してでも俺はアイツから逃げたかった。

「六道君……私のクラス……気に入ってくれなかった？」

その一言に担任は途端に涙ぐむ。

それを見たら普通は焦るだろう。

だが俺は違う。

彼女は泣いてなどいない。ウソ泣きだ。

彼女を泣かしたと思われクラスからの視線が痛い。

「ぐ……。わかり、ました。これからよろしくお願い、します」

奥歯で苦虫を噛み潰したように了承する。くそ、逃げられない。

「うん、よろしくね。それじゃ席はバニングスさんの横が開いてるわね」

そう言って指差したのは一番窓側の真ん中の席。

おそらくこれもバニングスが仕組んだ事。俺は奥歯を噛み締めながらサリさんと一緒にその席に移った。

「おはよう立花。アナタと一緒にのクラス、一緒に空間、一緒に時間を過ごせる事になって私嬉しい」

席に座ると同時にバニングスが素晴らしい笑顔をこちらに向けてきた。

普通ならこの笑顔にときめき、下手すれば惚れてしまうだろう。だが俺にはそれが悪魔の微笑みに見えて仕方がない。

そんな彼女に一言。

「最悪だ」

「いやん。最高だなんて」

誰もそんなこと言ってねえよ!!

殺気立つ俺、オロオロしているサリさん、朱に染まる頬を両手で抑えているバニングス（バカ）、なにやら石化しているクラスメート。そんな俺達をスルーして既に笑顔になっている担任は今日の連絡事項を淡々と述べるとHRの終わりを告げると教室の扉をあけて出ていく。その間に俺はサリさんにアイコンタクトを送っておく。

そして、先生がドアを閉じたと同時に俺は席を立ち全力で駆け出した。

第一回・りあるおにじっこのスタートだ

【第一幕】『二話』なんでお前がいるんだよ!?!』 (後書き)

短いですが勘弁してください

【第一幕】三話『第1回リアル鬼ごっこ』（前書き）

天敵を前に逃げ惑う俺

愛する人をひたすら追いかける私

なんでお前は追ってくる？

なんであなたは逃げるの？

【第一幕】三話『第1回リアル鬼ごっこ』

第1回リアル鬼ごっこ in 聖祥大学付属中学校

【リアル追われ役】

六道家一子・六道立花

【リアル鬼役】

バニングス家一子・アリサ・バニングス

勝利条件

授業開始までの10分間逃げ続ける

敗北条件

リアル鬼役による捕獲

「サリさん……！」

「ハッ！！」

担任の山陰千里が教室の戸を閉めると同時に俺は席を立ち駆け出す。サリさんはそれよりも上回る縮地まがいのスピードで教室の入り口まで移動すると事前にアイコンタクトで示した指示通りそのドアを開け放つ

「悪いサリさん10分で戻る！！」

「御武運を坊ちやま！！」

侍女の声援を背に新しい学び舎の廊下を全力で走る。

廊下にいる生徒達は見慣れない学生が走っていることに疑問の表情を見せるが俺には関係ない
なぜなら

「待ちなさい立花！！」

コイツが追いかけてきているからだ！！

俺の5メートルきつかり後ろを物凄いスピードで追走するバニングス。

女なのに男の俺についてくるコイツに内心驚愕モノだ。

そこらへんの教室に入るなりして巻きたい所だが俺には手がない。
あるのはこの足。

「なんで私から逃げるの？あ、そうかこれは鬼ごっこなのね。
立花も子供ねけど、そんな立花も好きだから付き合っただけ。
私が勝ったら立花をもらおうね」

「アホなこといつてんじゃねえ！！つゝか人を景品にすんな！！くんな！！！」

後ろに向かって叫びつつ二階に降りる。目に入ったのは開け放たれた窓。

一瞬だけ迷ったが覚悟を決めた俺はそこから飛び出した。

「うおおおおおおおっ！！！！」

迫る地面。飛んでる時正直俺は何バカなことしてるんだらうと思っ

た。けどアイツに捕まる訳にはいかない。捕まったら最後俺の人生が終わるとおもったから。

地に足がついた瞬間膝を曲げ勢いを殺す。そのまま回り回りで着地した。

けど足がめちゃくちゃ痛い。足元は芝生そして勢い殺してこの痛さ。筋トレや護身術の一環として受け身の練習しといてよかったと心から思った。

「流石にアイツまで飛び降りてこないよな？」

俺はゆっくりと自分が飛び出した二階の窓に目をやる。瞬間、思わず目眩がした。

「待ちなさ〜〜い」

あろうことかあのバカは躊躇もなしに窓から鳶は出して来やがった。物凄くいい笑顔で滑空するバカ。空中での姿勢もめちゃくちゃ。下が芝生とはいえあのまま落ちたら腰骨折って下半身不随、最悪死ぬ

ぞ!?

「バカかお前は!?!」

とつさに俺は駆け出す。

天敵のアイツのことなんて正直どうでもいいが目の前で血みどろの骸になられては目覚めが悪すぎる。

地上到達まで2メートルの所で俺はバニングスに飛びつく。肘から下がないので挟むようにし左腕で頭を抑え俺が下になるようにする。そしてそのまま植え込みの中に突っ込んだ。

「いつてえ……」

所々痛む身体に苦悶の声を出す。

我ながら不自由な身体で無茶したものだ。とりあえずバニングスが無事か目を開けて確認。

「……………」

彼女は頬を朱に染めてぼくっとこちらをみている。

何事かとおもいきやコイツが口にした次のセリフに俺は激怒した。

「また助けてくれた……。立花、大す「馬鹿やろう!?!」」

能天気なコイツに俺は激を飛ばす。

「何が好きだ!?!今、お前がなにしたのかわかってんのか!?!下手してたら死んでんだぞ!?!」

「1」、「ごめんなさい……………」

顔を伏せて小さな声で謝罪する。
俺はため息をつくところを押しのけようとする。
が、離れない

もう一度押す。

離れない。

いつの間にか首に腕が回されている。

額と背中に冷や汗が伝う。

「ごめんなさい。けど……」

アリサ・バニングスはゆっくりと顔を上げた。

「鬼ごっこ私の勝ちよね？」

そこには素晴らしい（俺には悪魔の）笑みをつかべる。

「お前まだそんなこと「それじゃ報酬をもらっわね」

俺の言葉を遮りバニングスは顔をゆっくりと近づけてくる。
その唇が俺を捉えようとした時。

「コラアアアアアアア！！！！」

チャイムと共に先生の怒声が辺りに響いた。

【第一幕】三話『第1回リアル鬼ごっこ』（後書き）

短い……

【第一幕】四話『お昼』（前書き）

第一回リアル鬼ごっこが終了した。

結果としてアレは私の勝ち

いや、俺の勝ちだ。

そして時はお昼。

【第一幕】四話『お昼』

あのあと俺とバニングスは理事室へ連行。理事長を含む10人がかりでの説教を昼まで受けるハメになった。

仕方がないといえば仕方がない。生徒二人が自殺まがいの事をやってのけたのだ。大事な生徒になにかあつては自分たちの首が危うい。

ところでバニングス。怯えたフリを装って俺の腕に抱きつくな。

四限目の中頃、私アリサ・バニングスは理事長室を出た。

立花はまだ教師10人でお説教を受けている。私と比べ立花は身体障害者でなにより六道グループの御曹司であり日本にある本社の社長なのだ。校外ならまだしも校内で彼の身になにかあつたら社会問題になりかねない。

それ故に彼はまだお説教を受けている。

また、私が先に出てこれたのは彼が適当に理由をつけて庇ってくれたから（実際は抱きつくお前から一秒でも早く解放されるためだ）。やっぱり立花は優しい。両手がないという障害を抱えているのに身を挺して助けてくれた。

次第に頬が緩んでくる。恋する乙女が存在なんて世の中が言う妄言だと思つてた。実際なつてみるととても心地がよい。

鼻歌を歌いながら教室へと歩いていく。そういえばそろそろお昼だ。立花と一緒に食べたいが私が誘つては照れてどこかに行つてしまう。はて、どうしたモノか。

そんな事を考えながら授業中の自分の教室に入る。
先生に軽く謝罪を入れて席につきふと立花の席とは反対側の席に座
る親友の一人に目をやる。
そしてそこで閃いた。

ニヤリ

この時私が浮かべた面妖な笑みは見る者を魅力（恐怖のどん底に突
き落とす）する笑顔だった。
ついでに私が見つめる金髪の子の全身に逆立つような悪寒が走
ったのは私にとって本当にどうでもいい別の話し。

昼休み俺はやつと説教から解放された。
今は教室でサリさんと一緒にいる。

「お疲れ様でした坊ちやま。お昼はどちらでお召し上がりになりますか？」

サリさんの手には昼飯を入れたバスケットそしてアタッシュケース。朝、登校する際に持ってきたモノ。

「別にここで構わない。ちょうどバニングスもないしな。昼飯ぐらいゆつくりしたい」

今、俺の隣にはバニングスの姿はない。

それに周りの生徒達も俺に近付こうとしない。サリさんが気を利かせてくれたのだろうか？

そんな事を考えてるうちにサリさんは昼飯の準備に取りかかろうとバスケットを机に置く。

「ロクドウ君……ちょっといいかな？」

そんなとき俺に声がかかった。

声をかけた人は美しい金髪の女の子。俺はへえ、と心の中で関心する。

上流階級の令嬢にも純粹にかわいいと思える子は少ない。

この子は間違いなくそうだった子と肩を並べれるな

「なになな？えつと……」

「あ、私フェイト・T・ハラオウンです。」

「ハラオウン様はこちらのクラスの生徒。坊ちやまのクラスメートです」

ふむ、そうか。午前中は説教を受けていてクラスメートの顔を覚える時間がなかった。

「よろしくハラオウンさん、六道立花だ。」

「立花様の侍女、サリ・エドワードと申します」

「それで要件はなになな？」

「うん。あの……一緒に昼食を食べない？転校してきてからまだ友達とかいないでしょ？」

その言葉にクラス中が騒然となる。男が大半を占めていることからして彼女はこのクラスのアイドル的人物なのだろう。

ということはここで誘いを受けるとクラスの男子を敵に回すということか

何気にサリさんの彼女を見る視線も痛い。

「悪い、俺はここで食べるよ。別に一人ってわけでもないしな」

「い、い、ごめんなさい。いきなり誘ったりして……。馴れ馴れしかったよね？」

いきなり涙ぐむハラオウンさん。同時に更に厳しくなる男共の視線。一体どう返事すればいいんだよ？

「いや、悪いのはこっちだ。せつかくのお誘いだ断ったら失礼だったな。やっぱりお言葉に甘えさせてもらおうよ」

そう述べた後涙ぐんだ表情とは一変明るい笑顔となる。

そしてさらに視線がキツくなる男共。ついでにサリさんの視線もキツクナルがここはもう無視。

俺達は彼女の案内の下、屋上へと足を運んだ。

そして一言。

「謀ったなハラオウン……」

その一言と共に

「いざいざしゃい立花」

俺はバニングスに捕獲された。

「紹介するわね。この子達は私の親友で…」

「高町なのはです」

「八神はやてや」

「改めて、フェイト・T・ハラオウンです」

「月村すずかです」

俺に向かって自己紹介する四人。これはまた美人揃いなことで。

正直このメンツと飯を食べるとなると気まずい。
ん？そういえば最後の子月村と言ったか？

「失礼。月村さんはもしかや月村忍さんの身内で？」

「うん。私は忍お姉ちゃんの妹だよ。」

どつりで面影があつた訳だ。

俺はサリさんに軽く目配せをする。

俺はその場で背筋を正し、サリさんはその横で綺麗に正座する。

「六道グループ本社代表、統括顧問の六道立花です。姉君には私共も大変お世話になっています。」

それに合わせてサリが最初、月村に名刺を渡す。続いて残り三人にも名刺を渡す。

「以後お見知り置きを。姉君、忍様にもよろしくお願いします」

「あ、これはご丁寧に。月村すずかと申します」

それに慌てて正座する月村。そして丁寧に例をする。

固まる高町、八神。？のハラオウン。

いきなり親友のたったご令嬢モードに驚いているのだ。

「すずか。代表って？」

「あのねフェイトちゃん代表ってことは社長さんなわけで」

「六道グループは日本でトップ1、2を争う大企業や」

顔がひきつっている高町、八神。

「あ、なのは、はやて」

「六道グループは世界十指に入る企業なんだよ。私とアリサちゃん
とことより更の上」

更に付け加えた月村とバニングス。
それにかなりギクシャクとする高町、八神、そして追加されたハラ
オウン。

「とはいってもこの学校にいる時はただの学生だ。普段どつりで
接してくれるとありがたい」

その言葉に四人共快く了承してくれた。
それはホントに助かる。学生の時ではできるだけ学生らしくしたいか
らな。

「それはさておきバニングス」

「なに？」

サリさんの反対側、俺の右隣で首を傾げながら見上げてくる。

「いつまで人の腕に抱きついてるつもりだ？」

「旦那様に甘えるのは奥さんの特権じゃない」

「誰が旦那様だ!!」

そこから口喧嘩に発展。まあ口喧嘩といっても怒鳴っているのは俺
でバニングスは笑顔でソレをスルー。
クソ…。とんでもない女に目を付けられた。

「うわぁ……。コレサリさんが全部作ったんですか？」

私達の目の前に広げられたおせちばりの重箱。

彩りはもちろん栄養バランスも良く、そんなにカロリーの高くないメニュー達。

「ハイ。こちらは全て私が手掛けさせていただいています。」

照れながらバスケットから小皿を取り出すメイド。

立花の専属の侍女の彼女。流石六道家のメイドと言うべきか。

「俺の食事はほぼ全て彼女に用意してもらってるんだ。掃除、炊事、洗濯、なんでもこなすからどこに嫁に出しても恥ずかしくないぞ。」

「アンタはサリさんの父親かいな」

楽しく談笑する立花&親友達。ふと私は自分のお弁当に視線を落とす。

中学になって始めた料理。ここ最近は腕も上がってきたので自分でお弁当を作っているのだがあのメイドの料理と違ってバランスも偏っているし見栄えも一般的。

「しかし、私もまだまだです。六道家のメイド長は私とは比べものになりません」

「メイド長？」

「マスターヨー○張りの婆さんだ。ひい祖父ちゃんの代から存在する六道家唯一の不思議生物」

私の耳には楽しそうな会話は耳に入っていない。自分の視線にはお箸で摘んだ卵焼き。

おもむろに持ち上げてそれを見つめた後。

「ねえ、立花」

「ん？」

「あ〜ん」

「「ブツ!」」「」

私の行動に思わず吹いてしまう親友三人。微笑ましそうに見るフェイト。

「……………なんのつもりだ？」

「私の愛の味見」

「お前の愛はいらん。料理のだったらここに置け」

そういつてあぐらをかいている自分の足のの上にある小皿を顎で指す。

「リックってどうやって物をたべてるの？」

フェイトが首を傾げながら聞いた。まあもつともな質問である。けどそういうことを躊躇無しに聞くというのはどうかと思うわよ？現に他の三人気まずい顔してるし。

「ちゃんと自分で食べてるぞ。流石に食事まで食べさせてもらうつてのは俺のプライドが許さん。」

「坊ちゃま、お手を……。」「

メイドが側に置いていたアタッシュケースから取り出したのは左手。それを自分の主人の左腕に差し込むと五回程回す。その作業を見ていて最初に口を開いたのはなのは。

「それって義手？」「

「その通りでございます高町様。六道グループ医療開発チームの作品『隠れフォーク君』です」「

セットされた義手『隠れフォーク君』はあたかも本物の腕のように立花の意志の下動きだす。

「指先のような複雑な動きはできないがコップを掴むことぐらいはできる。そして……」

私の差し出す卵焼きに向かってその左手が翳される。次の瞬間手のひらから勢い良く飛び出したフォークによって卵焼きは串刺しにされてしまった。

「この通りフォークが仕込んであるから食事に困る事はない」「

「なんやその暗器ばりの義手！？めっちゃ怖いやんかー！」「

「ちなみに右手の『ナイフ君&スプーンちゃん』もある。仕込みの

チヨイスも可能、自分に合ったタイプをオーダーメイドできる。軽
量で連続稼働2時間、家庭のコンセントで充電できる優れものだ。
お申し込みは六道グループ本社医療開発課まで」

「社長直々のプレゼン！？」

楽しい会話は私の耳に入っていない。

視線の先には串刺しにされた卵焼き。

「ねえ立花。」

「なんだ」

「卵焼きの感想聞かせて？」

「……………」

バニングスに言われ俺は串刺しにされた卵焼きをゆつくりと口に運
ぶ。

卵の風味が口に広がり塩と胡椒が邪魔をせず素材の味を引き立たせ
る。

「まあ…普通に美味しいが？」

「隠し味は私の愛。仕上げに念じてみました」

「んなもん感じねえよ！仕上げの【念】ってなんだよ！？」

思わずツッコミを入れる。

隠し味の【愛】は予想してたが念ってなんだ！？

ここで俺を含めるバニングス以外の全員がちょっとその光景を想像してみた。

朝のバニングス亭。

騒がしい厨房せわしなく働くコック達。その中に混じって自分の弁当を作っている少女、アリサ・バニングス。

今はちょうど最後のおかずである卵焼きを焼いている所。

料理を始めた頃は形も味も酷かった卵焼き。料理長の指導の下今では料理長に合格点を貰える程に成長した。

卵をとき熱したフライパンに流し込む。

この時の彼女は笑顔で今日自分の料理を食べさせようと思っている男の子の事を考えている。

美味しいと言ってくれるだろうか。もし喜んでくれたらまた作って

あげよう。

そんなこんなでできた卵焼きを一口サイズに切ってお弁当に入れる。
そして【仕上げ】にそのお弁当に手を翳して

他の女より私。年増より私。ガキより私。あなたは私の旦那。私は
あなたの妻。もうあなたしか見えない。もうあなたは私しか見えな
い。もう私はあなた無しでは生きられない。もうあなたは私無しで
は生きられない。私はあなたのモノ。あなたは私のモノ。私はアナ
タの側から離れない。あなたは私から……

逃げられない

「
?
?
?」

「
「
「
怖
つ
!
!
「
「
「

【第一幕】四話『お昼』（後書き）

すみません。携帯が止まって更新できませんでした

【第一幕】五話『下校』（前書き）

めちやくちや短いです。

けどこれにて一幕終了

【第一幕】五話『下校』

昼食の後午後の授業をナイーヴな気持ちで終えた俺はサリさんと共に校門前で迎いの車を待っている。

日本の学校に編入した初日。俺の天敵であるアリサ・バニングスとの再開。

馬鹿みたいな1日を終えた俺の身体には重たい疲労がのしかかっている。

家に帰ったらさっさと寝てしまいたいが俺の1日はこれで終わらない。

書齋に籠もり書類に目を通し、指摘事項を本社の各部署に通達するなどだ。

「……………」

門に背を預け空を見上げる。

バニングス達とは教室で別れた。今頃はもう帰路に着いていることだろう。

茜色に染まる空。サリさんは物思いにふける俺の邪魔にならないように傍らで静かに立つ。

そんな時、俺達に歩み寄る人物がいた。

「迎えまだなの？」

バニングスだった。

彼女の姿に思わず飛び退く。しかし彼女は昼間とは違って抱きつこうともせずただ俺の側に立つだけだった。

……………なにか悪いモノでも喰ったか？

「アリスお嬢様。坊ちゃんはこの後夜遅くまでお仕事がございます。体力を使う行動はお避けください」

「別に終始抱きついたりはしないわよ。昼間の行動は周りへの示し。『立花には私がいる』ってのね。今は私達だけだからそこまで過剰な行動は取らないわよ」

そう言っただけで肩が触れるか触れないかまでの位置で俺の横に並ぶ。というかアレは確信犯だったんだな。

それを聞いた俺は深いため息をつくのだった。

「学校どうだったかしら。私が言うのもなんだけど結構いい所ですよ？」

「悪い所じゃないな。アメリカの大学よりもよっぽど過ごしやすい。お前がいなけりゃな」

編入初日、学校にいる時間の半分を説教で埋められたしな。

「立花と会ったのは小学3年以来かしら？」

「ああ、アメリカの時以来だな」

コイツと会ったのはあの時以来だ。

「……………手、痛む？」

「……………」

バニングスが視線を俺の腕に向けて小さく言う。けど俺は答えない。

彼女の声は今にも消えてしまいそんな程弱々しく、か細いモノだった。

嫌な沈黙の時間が流れていく。

そんな時間に耐えきれなくなつて俺は口を開いた。

「お前、先に帰つたんじゃないのか？」

「ちょっと図書室で調べものしてたのよ。」

「鮫島さん遅くなるんじゃないのか？」

「まあ、1時間ぐらいね」

「だったら……」「」

遠くに見える六道家の車を見ながら言った。

「乗ってくか？」

それを聞いたバニングスは笑顔になるといきなり俺に抱きついてきた。

「聞くまでもないでしょ。もちろん乗ってくわ」

「抱きつくな！やっぱりお前は鮫島さんをここで待ってる……！」

「いやよ。女の子を一人にする気？それでも名門六道家の男？」

一向に離れない俺たちの前に止まる一台の黒いリムジンと他黒いベ
ンツが二台。

サリさんがドアを開け俺はバンニングスに押し込まれるように一緒に
リムジンに乗った。

「フフ、坊ちゃんまとアリサ様は相変わらず仲がよろしいですね」

「当たり前でしょ？私は立花の妻よ？」

「誰が妻だ！？誰が！？」

もみくちゃんになる俺達を余所にサリさんはドアを閉める。彼女は別
の車に向かっていった。

「ねえ立花……………」
「めんなね」

「謝るな……………」
「これは……………」

結果だ。

【第二幕】一話『最初の思い出編・1』(前書き)

俺の(私の)りあるおにじいじ

4月も終わりに近づいてきた。

私達は今日もラブラブ

そう思ってるのはお前だけだから!?

【第二幕】 一話『最初の思い出編・1よ!』

聖祥大付属中に編入して1ヶ月。今は4月の終わり、暖かくなってきた春の到来を肌で感じとれる今日この頃。

「ハア……ハア……やっと撒いた」

俺はもはや日課となりつつあるバニングスとの追いかっこを終えて自分の教室に戻ってきた。

肩で荒い息をつきながら教室の入り口をくぐる。

心なしか日に日にアイツの足が速くなってきているのは気のせいだろうか？

筋トレでもしてるとか？

半袖のカッターシャツの袖で汗を拭いつつ席に向かってあるく。

「立花君お疲れ様」

話し掛けて来た月村さん。バニングスの親友の一人である。

物静かな雰囲気ですれまた美少女である。

「劳いの言葉サンキュ。しかしバニングスは以前からずっとあんなのか？」

「アリサちゃんは普段はもっとツンツンしてるよ。親友の私達としか全然はなさないし。」

要するにツンデレが俺限定にデレたと？

思わず背筋に悪寒が走った。

「冗談も程ほどにしてくれ」

「冗談じゃないんだけどなあ……」

どうやらホントらしい。

頭痛のする頭を存在しない手で抑えつつ席に向かう。直ぐ側で他の女生徒と会話をしていたサリさんが俺の姿に気付いたようで断りを入れ慌ててこちらに来た。

「もう少しくらい話しててもいいんだぞ？」

「も、申し訳ありません……」

小さくなる彼女に苦笑する。同時に鳴り響く授業開始のチャイム。教科担当の先生が教室に入ってくる。しかし、未だにバニングスが来ない。
なにかあったのだろうか？

「すみません。職員室にいついて遅れました」

そう思った矢先、教室の扉が開いてバニングスが入ってきた。教師に遅刻の理由を簡潔に述べ自分の席である俺の隣に座る。

「あゝあ、今回こそは捕まえれると思ったのに」

「それは残念だったな。このまま諦めてくれるとこちらとしては嬉しいのだが」

「ヤダ」

小声で話す俺達。只今の授業は数学。現在大学の内容を勉強、理解

しているバニングスはもちろんアメリカの大学を飛び級^{スキップ}し、昨年には出た俺には聞くまでもない授業であつて

「バニングス、六道。ここの問題を解いてみる」

「2 + 6 です」

「3 - 8 - 4。あ、先生そこ間違えてますよ？」

このように指名されても瞬時に回答できる。まあ、バニングスの方は話しながらもちやんとノートを取っているのだが。

ちなみに俺は別にノートを必要としない。テストなど授業で黒板に書かれた内容が出るのだから授業の内容さえ理解すれば問題ない。傍らでサリさんが小さく笑っているのを耳に椅子に座った俺はバニングスに再び話しかける。

「そういえばお前授業に遅れてたな。なにかあつたのか？」

「別にたいしたことじゃないわよ。一年の子のプロポーズを断つただけ」

いや、たいしたことないだろそれ。

俺としては是非ともその子のプロポーズを受けて欲しかった所なのだがな。

「とりあえず『私には将来を誓った六道立花っていう旦那様がいるから無理』って言うておいたから安心して」

「最近他のクラスの目線が更に痛くなつたのはお前のせいか……………」

この勢いでドンドン敵ができてきたらどうすんだよ。
俺はため息を漏らすと机に突っ伏すのだった。

「アリサちゃんと立花君は凄いな」

昼。私達はいつものように屋上でお昼を取っている。

立花は最初断っていたのだが私が積極的に引つ張っていったので最近は素直に私との食事に参加してくれるようになった。(あまりにしつこいから諦めたんだよ)

「なにが(だ)?」

なのはの言葉に私達は同時に首を傾げる。

「二人共お話ししてるのに先生の質問に答えれるし。アリサちゃんはちゃんとノート取ってるし」

「別にあの程度ならもう自分で勉強して理解してる内容よ」

「俺もアメリカの大学出てるからなアレぐらいなら問題ない。日本史とかはもう少し真面目にやるけどな」

立花はアメリカの大学を飛び級で卒業している。多分専攻は経営学、経済学とかだろう。私も父の会社を継ぐ為に将来的には大学でそう

いった勉強をするつもりだ。

「そういえば立花って社長さんなんだよね？」

ふとなにを思い立ったのかフェイトが首を傾げながら言った。

「業務の方はどうしてるの？ 昼間は普通に授業受けてるみたいだけど」

まあ、確かにそうだ。立花は世界十指にはいる六道グループ会長の一人息子で世界中にある支部の中でも本社を任されているのだその業務内容は半端ではないはず。

けどここは隠れ親バカな司さんの出番である。

「二年間だけ学校がある間、昼の業務は母さんが引き継いでくれるんだ。俺が目を通すべき案件は持ってきているパソコンに送られてくるし、大事な会議がある場合は学校を休む事になってる。まあ、会議と言っても母さんも出席するから俺はまだ見習い社長だな。まだまだ勉強する事が多すぎる。」

いや、見習いでも14の子に本社を任せるんだから司さんの肝の座りっぷりはすごいし。任される立花も相当なモノなんじゃないの？

「お義母様曰く『元々会長兼本社社長としてやってたから二年くらいどうってことないし、アンタも少しぐらい年頃の学生を満喫しなさい』らしいわよ。」

「そうなんだよなあ。母さんに『授業内容はとっくに勉強してるから昼間仕事をこっちに回してくれ』って言ったら笑顔で断られたんだよ……ってなんでお前が母さんとの会話内容を知ってるんだ？そ

れにお義母様ってなんだ？」

かなりひきつった
笑顔で私を見つめる（睨みつける）立花に私は左手で朱に染まる頬
を抑えつつ開いている右手で携帯の画面を見せる

【お義母様（六道司）】

『0 x 0 〇 x x 〇』

「……………司様の番号ですね。それもプライベート番号」

立花を挟んだ反対側からメイドが私の携帯を覗き込みながら言った。

「あ、ちよつと携帯借りてもいいか？」

「旦那様の頼みなら仕方ないわね。はい、どうぞ」

「……………サリさん頼む」

メイドが私の手から携帯を受け取る。専用のマイクとスピーカーを
取り出し私の携帯に繋げるとそのままその番号に電話を掛けた。

『……………』

しばしの間鳴り続けるコール音。
その間私達は一言も喋らない。
20秒程してやっと繋がった。

『は〜い〜 こんにちははどうしたのアリサちゃ〜このクソババアど
ういうつもりだ!?』誰がシワだらけのクソババアだこのクソガキ
!?!』

息子のクソババア呼ばわりにドスの効いた声でクソガキと返す。世
界屈指の企業を率いる若き女帝。

「んなことはどうでもいいんだよ!なんでバニングスがテメエの番
号しってたんだよ!」

『将来娘になるかもしれない子に番号を教えてなにが悪い!?それ
よりもさっきの言葉取り消せ!私はまだシワ一つないしババアじゃ
ない!?!』

「俺がいつ嫁を取るって言った!?それとテメエは3(ピー)歳だ
ろうが!俺にとっては十分ババアなんだよ!?!」

「!?!?!?!」

「!?!?!?!」

「!?!?!?!」

「なあなのはちゃん、フェイトちゃん、
すずかちゃん。親子って似るもんなんやね」

「「「うん」「」」

「それで、母さんはバニングスの事が気に入ったからプライベート
の番号を教えたんだな？」

10分後、仲のいい親子喧嘩を終えた立花とお義母様は私がお義母
様（違う！）の番号を手に入れた経緯を話している。
番号を手に入れたのはつい最近で一週間程前になる。
パパのお仕事に勉強がてら付き添いとして六道グループ本社に赴い
た時ちようどお義母様（だから違う！）、司さんと鉢合わせになっ

ただ。

彼女はちょうど社内の喫茶店で軽く休憩するつもりだったらしく。パパがお仕事をしている間良かったら企業を率いる者としてのノウハウを教えてくれると言ってくれたのだ。

こんな機会はめったにないので私は喜んでそのお誘いを受ける事に、会話が進むに連れていつの間にか司さんが私の事を気に入ってくれたようで携帯の番号とメールアドレスを交換する仲になってしまった。

しまいには『立花の事よろしくね』とまで言われたのだった。

「自分の立場分かってるのか？」

『もちろん分かってるわよ。これはアリサちゃんを信用しての事なんだから』

真剣な声がスピーカーから響く。それを聞いた立花はため息をつくと諦めたように言った。

「母さんがそう言うなら何もいわねえよ。けど俺のは勝手に教えるなよ？」

『もちろんよ。アリサちゃん、立花の番号が欲しいなら自分で手に入れるのよ？』

「ハイ、お義母様。」

スピーカーとマイク越しではあるが私はしっかりと頷く。そういえばもうそろそろお昼も終わる。私と立花かはお義母様（違うって言うてるだろ！！）に断りを入れて電話を切ろうとした時。

『あ、そうそう。ゴールデンウィークなんだけど立花は強制参加な
んだけどアリサちゃんやお友達の方々は開いてるかしら?』

【第二幕】一話『最初の思い出編・1よー!』(後書き)

うむ。駄文ですね。

感想お待ちしてます。

あと、メインの話しになるまでまだしばらくあるのでその間に書いてみてほしいシチュエーションがあったら感想板にどうぞ

【第二幕】二話『最初の悪夢編・2だ』（前書き）

遅くなりました。

【第二幕】二話『最初の悪夢編・2だ』

俺は森の中を一人歩いている。

静かだ。風の音が、鳥の囀りが、葉が擦れ合う音がとても心地がいい。

こんなに安らいだ気分になったのはいつ以来だろう。

あの日以来、がむしゃらに勉強して、経済を学んで、日本でアイツと再会して……。俺は平穩なんて言葉はわすれていたのかもしれない。

それに無いはずの両手がある。

立花

後ろから呼びかけられた。この声はアイツの声。けどこの口調はいつもと違い、落ち着いたモノを感じさせた。

俺はゆっくりと後ろを向く。

そこには

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめ
んなさい。ごめんなさいごめんなさい。ごめんなさい。ごめんな
さい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめ
んなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんな
さい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめ

血まみれのアイツがいた。

けど、アイツに纏わりつく血はアイツのモノではない。アレは俺の

血だ。

そしてアイツはひたすらに謝り続けている。

ゆっくりと視線を下ろし両の手を見た。そこには腕はなく。血がしたたり落ちている。そうだよな……。あるはずがないよな……。思わず苦笑する俺は彼女に言葉を投げた。

「泣くなよバニングス。前も言っただろ？コレは……………」

【結果】だって……。

「坊ちやま……。着きましたよ坊ちやま」

サリさを揺すられて俺は目を開けた。

ここはウチのベントツの中。

眠たい瞼を無理やりこじ開ける。

夢……。か。

嫌な夢を見たな。と思い、ふと横を見る。

「……そついえばコイツもウチの車に乗ってたな」

そこには小さな寝息をたてて俺の肩に頭を預けているバニングスの姿。

どつりであんな夢を見た訳だ。

俺は小さくため息を吐き、「バニングスを任せた」とサリさんに告げ開けられたドアから出て行った。

後ろの方で『キャッ!?』と小さく可愛いらしい悲鳴が聞こえたのは気にしない。

「今回はお招きいただきありがとうございます」

目の前でバニングスが母さんに頭を下げる。

「ありがとうございます」

周囲には彼女ともう一人月村さんの姿がある。高町さん、ハラオウンさん、八神さんの姿はない。

三人はゴールデンウィークの間は予定があるから来れないらしい。

「いいのよ気にしないで」

さて、今回はと言うと我が六道グループの運営する新設の高級リゾートに来ていた。場所は沖縄だ。

名目としては本社長と会長による5日間の現地視察。オープン前
のリゾートに宿泊、改善点などを上げるというもの。

宿泊は4名。会長こと六道司、母さんと本社長こと俺、六道立花に月村さん、バニングスである。

「仕事も兼ねてるけど5日間の滞在になるからゆっくりくつろいで
ね。後でアンケートを書いてもらうから」

「ハイ」

まあ、グループ外の人間の意見も重要だしな。こちらとしてはいい
データが取れるから5日間の無料宿泊など安いモノだ。

さて、早速ホテル本館の中に入っていった俺達。まず出迎えてきたのは煌びやかで豪華な内装とホテルの支配人、そして全従業員。

顔つきはともダンディーでまさにセバスチャン(?)俺達がロビーに入ると同時に全従業員から『いらっしやいませ!!』と歓迎の言葉を受ける。

「ようこそ。六道会長様、六道社長様、御一行様方。私が当ホテルの支配人を勤めさせていただきます。佐藤と申します」

「本社代表、統括顧問の六道立花です。これからしっかりと視察、改善提案をさせていただきます。そして5日間よろしく頼みます」

「よろしくお願いします」

最初の挨拶は日本本社代表である俺が言う。それに合わせて母さんの後ろで月村さん、バニングスに並び礼をした。

「貴方様が昨年の終わりに社長就任されました立花お坊ちゃまですか。本日から5日間よろしくお願いします。」

笑顔で握手する俺達。その光景を母さんは後ろの方で小さく笑みを浮かべながら見ている。

「時間的にもう昼食の時間ですので皆様方をレストランにご案内させていただきます。ではこちらへ」

素晴らしい笑顔を見せる佐藤は俺達を案内するために先導して歩き

出す。

「ねえ立花。」

その最中バニングスが俺の横に並んで話しかけてきた。

「私の第一印象だけどなかなかいいと思うわよ。」

「最初はな……。それよりバニングスも気になった事はバシバシと言ってくれて構わないからな」

「わかったわ」

頷く彼女を横目に頭の中を仕事モードに切り替える。

さて、やるか。

「はいっす」

私の横でさすが目が目を光らせて感嘆の声を上げている。

目の前に並べられているのは現地はもちろん日本全国から取り寄せられた食材で作られた料理。

私とすずかも高級料理を食べたりすることはあるがそれよりも2ランクも上といえる料理が目の前にある。流石六道グループだ。けど正直タダでこんな料理を食べていいのだろうかと思ってしまうている私。

「ねえアリサちゃん。アンケートだけでこんなにいいところに四泊もさせてもらっていいのかな？」

小声で話しかけてきたすずか。どうやら彼女も同じ事を思っていたらしい。

「いいんじゃないの？せつかくお義母様が誘ってくれたんだし楽しまなくっちゃ損よ。私としては立花のお仕事に貢献できるからNo problem。」

「そうだね。けどなのはちゃん達も来れたら良かったのにな」

今回なのは達三人はゴールデンウィーク中は時空管理局とかいう時空の官警の仕事があるので来れなかった。

その際はやてがかなりくやしそうにしていたので帰ったら盛大に自慢してやるわ。

「そうね。なのはとフェイトの為にいいお土産買っていきましょ。はやてにはそこら辺のシーサーでも持って帰ればいいし」

「それはかわいそうだよ。そこら辺のじゃなくてちゃんと買って帰らうよ」

いや、アンタもなかなか酷いわよ？シーサーをお土産にとって所を否定しないんだから。

ところで立花、さっきからなにパソコンを見てるの？

「皆様、大変お待たせいたしました。本日の昼食は沖縄の海で取れた新鮮な魚介類を使ったパスタ料理です。付け合わせの野菜料理も本土から取り寄せた有機野菜であり。今日の為に料理長が自ら厳選、調理されました。」

「あらあら。わざわざありがとう。私達の為に佐藤さんが指示を出したんでしょ？料理長とスタッフに後で御礼を言っておいて」

「いえいえ。六道グループの会長様と御子息、そしてご友人がいらつしやるのですからこれぐらい当然の事です。」

六道グループ会長であるお義母様に誉められて佐藤さんは得意げに胸を張り小さくお辞儀をする。

その姿は正にセバスチャン(?)。

「だそうよ立花」

「下げる」

立花の声が響いた。

途端に周囲の温度が下がった。沖縄にいるのに吹雪の中にいるような感覚になった。背筋に走る悪寒。佐藤さんを見ているその瞳は魅入られた者を畏縮させる。

「聞こえなかったのか？【下げる】と言っただ。」

「え、いや…、お、お気に召しませんでしたでしょうか？」

いきなり雰囲気と目つきの変った立花にうろたえる佐藤さん。私とすずかも彼のいきなりの変容に驚いている。

「立花？」

「アリサちゃん……」

頬杖をつき唇に人差し指を当てるジェスチャーで黙っているように言ってきたお義母様。その表情はとても楽しそうな子供の笑み。

「佐藤さん…。今日俺がここに来た理由はなんだ？」

「と、当ホテル。オープン前の現場視察です」

佐藤さんの額に脂汗が浮かぶ。

「この料理はメニューに載っているモノか？それともVIP用のメニューなのか？」

「本日……皆様の為にご用意、したメニューでございませす。」

「初期月の運営費はちゃんと配布した。施設管理費、人件費等の他ある程度の物価の上昇や予想外の事態にも対処できるだけの資金はあつた筈だ。」

メイドに指示し彼に向けて先程まで見ていたノートパソコンの画面を彼に向ける。

そこにはこのホテルが仕入れる食材の産地、農家、市場での相場などが表示されている。

「明らかにここに表示されていない食材とかがあるな。では聞かせてもらおう。ここに表示されていない食材の金は何処から出した？ 貴方のポケットマネーからか？」

「……運営費……から、です」

その一言に彼の眉間に青筋が浮かんだ。

「この運営に充てた金は他の人間が汗水流して稼いだ金だ。貴様それを俺達の機嫌取りになんぞに使つたという事を分かっているのか？」

「も、申し訳ありませんでした!!」

得意げだつた彼は深く頭を下げて詫びを入れる。

ここで私は改めて彼が社長なのだという事を理解した。

「だが、せつかくのもてなしはただ今は目を閉じておいてやる。次

はないと思えよ佐藤“支配人”」

「重々、肝に銘じておきます。六道、社長。」

気まずい昼食を終えた後私とすずか、お義母様はアイステイを飲みつつ会話に花を咲かせている。立花はというとレストランのスタッフとお仕事の話しをしている。

「立花君ちよつと怖かったね」

すずかの問いに私は内心頷く。

「アリスちゃんもすずかちゃんもこれで立花の事嫌いになったりしないだね。

義務教育で業務の半分以上を母親に任せているとはいえ立花は何百何千の社員を守らなければならないの。大きければ大きい程、人数が多ければ多い程、企業というのは景気、不景気の影響を受けやすいから。業績が悪化すれば最悪、大人数のリストラを決行しなければならぬ。そうすれば路頭に迷ってしまう人が家族が何千人も出てしまう。あの子はそうならないように必死に頑張ってるんだから私としてはアレを許す時点でまだまだ甘いんだけどね。」

それを聞いた後私は再び立花を見た。アレで甘いんだと、ではお義母様だつたらどうなっていたのだろうか。

けど私はこの程度で彼を嫌いになつたりしない。なんたって私は彼

の妻となる女なのだから。

「大丈夫です。」

「私達はコレぐらいでは立花君の事を軽蔑したりしません」

お義母様は胸を張って答える私達に満足げに頷くと自分の息子を呼び寄せる。

「お昼も住んだ事だし裏方の視察は私がやっておくから貴方は息抜きがてらアリサちゃんとすずかちゃんをエスコートして街にでも出てきなさい。」

その言葉を聞いてパツと明るくなる。視察で来ているのでつきり立花はずっとこのままお仕事をしているのだと思っていたからだ。

「街に出るなら母さんが行ってこいよ。俺の仕事の半分をやってるんだから母さんの方が息抜きは必要だろ？」

対する立花はもの凄く嫌そうな顔をしている。けどお義母様は彼にデコピンを見舞うと腰に手を当てて言った。

「ご令嬢方をエスコートするのも貴方の仕事の内よ。それに私が気づかないでも思ってる？サリ。立花の睡眠時間を教えなさい。」

「ハイ、立花様のご就寝は朝の4時、起床は朝7時。基本的眠時間はに3時間になっております。」

3時間！？

ほとんど仮眠みたいなモノじゃない！！

「ちなみに今朝は余裕もあり道中お休みになられたので睡眠時間は9時間、ゆっくりとお休みになられております。」

「サリさんよけいなこと喋るな！！」

メイドの密告により慌てだす我が旦那様。逃げよつとするがさすが私が抱きつきそれを阻止。

「普段忙しい私を少しでも楽にしてあげたいからこんなことしてたんでしょうけどそのおかげで息子が先に倒れたら元も子もないでしょ？最近是十分休ませてもらったから気にせず行ってらっしゃい」

綺麗な笑みで息子に笑いかける母親。
母思いな息子に感謝の言葉を投げる。

「だが断る！！」

「……………アリサちゃん、すずかちゃん」

「「ハイ!」」

「バカ息子連れてGO」

「 Yes , m a a m ! ! 」

【第二幕】二話『最初の悪夢編・2だ』（後書き）

感想お待ちしています

【第二幕】三話『最初の思い出編・3』(前書き)

やってきましたゴールデンウィーク。

私の思いは沖縄の太陽よりも熱く。

俺の心は氷河期より冷たい。

【第二幕】三話『最初の思い出編・3』

「ホラホラ立花これ綺麗？」

清々しい日差しの下立花君をホテルから連れ出し海辺の街を練り歩く。

海風が運ぶ塩の香りを堪能しつつ私達は地元の人が開いている装飾品などの店を覗いていた。

そこで私達が身に着けているのはハイビスカスの造花でできた髪飾り。私が白でアリサちゃんが色違いの赤色。

それぞれを髪に止めて彼に感想を求めている。

「……………」

けど彼は興味が無いらしくアリサちゃんを無視、お店の商品を見ているのですが。多分アレは周辺の調査かなんかだと思えます。

「ね〜立花。ちゃんと見て〜」

子犬のように甘えながら首に腕を回すように抱きつく親友。私の知っているアリサ・バニングスとは正反対。ツンドラと亜熱帯程の差がある。

私の知っている親友アリサ・バニングスは孤高のお嬢様な存在でちよつとわがままな所もたまに見受けられたりするが筋はしっかり通し、なんでもそつなくこなし、友達を思いやる優しいツンデレさん。それが今はあたかも枷を外したかのように女の子をやっている。

正直言って彼女の変貌ぶりにはかなり驚かされている。

「立花君アリサちゃんもかまってあげないとかわいそうだよ？」

「離せ！暑苦しい！嫁入り前の娘が身体を安売りするな！！」

「いや、私は立花の正式な正妻ですから」

「今すぐ精神科に行つてこい！！」

私の言葉はスルーですか？と内心でため息をつきつつ二人を見る。ここに立花君の専属侍女であるサリさんがいれば私も暇しなくないのだけど彼女はいない。立花君のお母さんである司さんに言われ彼女の補佐についているのだ。

代わりに目の前には一向に離れないアリサちゃん。彼女が抱きつく立花君は少し顔を赤くしながら振りほどこうともがいています。アリサちゃんも最近は出るところ出てきてますからね。

5月といえどここは沖縄。照りつける日差しの下必然的に私達も薄着な格好で密着すると感触がほぼダイレクトに伝わってくる。

さすがの立花君も周りの目もありかなり恥ずかしいのでしょうか。けどなんなのだろうか。

今私は不思議な感覚に捕らわれている。

モヤモヤとしたこの感情。

今はまだこの感覚の理由に気づかないまま私は二人を眺めている。

「わかった！かわいいからいい加減離れろ！胸が当たってるから！！」

観念したように立花君がアリサちゃんを誉める。やっとなら私がかまってもらえると思つた。

「立花が誉めてくれた」

が終わらなかつた。

さつきより強く抱きつく彼女。

出店のおじさんが『仲のいいカップルだね』とからかい『違います！！』と立花君が否定。すかさずアリサちゃんが発展形の肯定する。

「違いますよ！私達は夫婦です！！」

瞬間、彼女は背負い投げで一本取られた。

ドタバタした午後を過ごした俺達は

日が傾いてきた頃ホテルに戻ってきた。

歩いている間も絶えずバニングスは俺の腕に抱きついていてる。

何度も振り払おうとしたのだが異常な握力と腕力で全く離れない。

正直言つて痛い。

午後のドタバタもあつて俺は今げんなりとしているのだが正直ホテルに戻るのも嫌だつた。

「なんかみんな疲れた顔してない？」

正面から入った後言ったバニングスの第一声。

「う、うん。なんだかげんなりしてるね。気のせいかな？」

後の月村さんの第二声。

ちなみに気のせいではない。現にホテル内スタッフは皆精魂尽き果てたような顔をしているのだ。

それでもホテルに戻ってきた俺達に『おかえりなさいませ』

と挨拶に来るボーイには見上げた精神力だと賛辞を心の中で送る。なんせ母さんの視察と指導を受けたんだからな。

「お疲れ様です。私がない間の視察はいかがでしたか？」

「……………世界レベルを身に刻みました」

疲れた顔をかすかに見せつつも笑顔で俺達を部屋に案内する彼。ふむ、彼はこのまま頑張ればいずれ支配人になれるかな？

「立花君のお母さんの視察ってどんな感じなんですか？」

気になった月村さんがボーイさんに訪ねる。その際言ってもいいのだろうかと俺にアイコンタクトを送ってきたので『言っても構いませんよ』とジェスチャーで返してあげた。

「……………支配人のお言葉をお借りするならばあの指導風景はさながらこの業界の地獄絵図」

「「「……………」」」

それを聞いて黙り込む俺達。

あ、やっぱりそうだったか。

母さんの経済界での手腕はもちろんこういった運営での指示は的確だ。

一体どこでそんな事を学んだのかと聞いたら企業を立ち上げる時に親友から教えてもらったそうだ。

母さんが企業を立ち上げたのは21の時。最初は代行業だったらしいのだがそれがたった16年で世界10指にはいる企業となった。

その手腕をダイレクトに受けたこのホテルのスタッフ。

詳しい内容は俺自身もまだ見たことがない。一度見せてくれと頼んだ時は『トラウマを持ちたいなら別に構わないわよ?』と言われ本能的思わず断った記憶があるのを良く覚えている。

「立花のお母さんって何者なの?」

「経済界の若き女帝と言われてる女だがその実態は息子の俺にもわからん」

実際、母さんの実家にも行ったことがないんだよな

「今思えば母さんって何者だ?」

「アンタの母親意外の何者でもないでしょ?」

そんな事を考えていたらいつの間にか後ろに二人のボーイを引き連れて母さんが立っていた。

「全く人を不審者扱いして……。ほら、彼に部屋を案内してもらったらお風呂にいきましょ？その後夕食にするから」

「ハイ」

風呂か……。やっと少しはのんびりできるな……。

「わかった。それじゃ母さん、バニングス、月村さんまた後でな」

「O・K・また後でね立花」

「またね立花君」

やっとのんびりできる。

俺は風呂に入った後、夕食を取るといつもよりかなり早い10時に眠りについた。

【第二幕】三話『最初の思い出編・3』(後書き)

感想お待ちしています。

【第二幕】四話『最初の悪夢編・4だ』（前書き）

ちょっと修正しました

【第二幕】四話『最初の悪夢編・4だ』

7:00

「……………」

ゴールデンウィーク二日目。

我が六道グループが沖繩に新設した高級リゾートの一室。

今回はまだ一泊目なので一番低ランクの部屋にいる。

窓から差し込む光が俺の顔を照らす。昨日に次いで今朝も良く寝た。サリさんが俺を起こしに来るのは7:30。

後30分も少しゆっくりと寝よう。

うつすらと開けた目蓋をもう一度閉じる。そういえば寝る前にバニングスが奇襲でもかけてくるかと思ったが流石のバニングスもそこまでバカじゃなかったようだ。

寝る前にアイツが来たら朝まで絡まれていたことだろう。

そんな事を考えつつ寝返りをうつと…。

「……………ん？」

動かない。

「……………」

もう一度寝返りをうつと…とするがやはり動かない。

というより右腕に感覚がない。それに首筋になにか吐息のようなモノを感じる。

ここで俺は一度閉じた目蓋を再び開けた。そして自分の右側に視線を移す。

そこには金髪ショートがをリードマークとする少女がいた。Yシャツ姿の彼女は右腕を枕にして俺に寄り添うようにし規則正しい小さな寝息を立てている。

「なんだ…バニングスか…」

右腕に起こった違和感の原因はわかった。けどサリさんが来るまではまだ時間があるな。

俺は起こすまいと寝ぼけた思考のままズレたシーツを左腕に絡ませて少し寒そうにしている彼女の肩口まで引き上げてかけてやった。

「……………ん」

けどそのせいか彼女は微かに表情を歪める。そしてゆっくりと目蓋をあけるとこちらを見てきた。どうやら起こしてしまったようだ。

「……………悪い…お越ししまったな……………」

「大丈夫……………」

彼女は小さく笑みを見せると俺の首に腕を回して顔に近づいてきた。

「おはよう立花」

「おはよう」

ちよつとまで、なに俺は普通に挨拶をしている？
現状を整理しろ。ここは俺が泊まることになった部屋。もちろん昨
晩は一人で寝た筈だ。

なんでだ。

なんでお前がい

うわあああああああああああああああああああああああああ！？

朝、7：10。ワケのわからない叫び声、もとい悲鳴がホテルに響き渡った。

「立花様!?!」

「アリサちゃんいるの!?!」

少して俺の部屋に入ってきたサリさんと月村さん。彼女達は俺の部屋に入ると同時に呆然となる。無理もない

「助けて!サリさん助けて!!!」

今俺はバニングスに馬乗りになされた状態で彼女に唇を奪われそうになっっているのだから。

客観的に見るとちょっとシユールな絵である。

ちなみにコイツは寝ぼけていて完全に覚醒していない。

必死に腕を使って押し返してるが首に腕を回されていて全然離れない。

てかそこで見てないで助けてくれ!!

「立花君アリサちゃんになにしてるの〜〜!!!!!!」

先に我に返った月村さんが声を張り上げてこちらに駆け寄ってきた。そして俺の腕を掴むとそのまま振り回す。同時に宙に浮く俺達の身体。

「痛い痛い!!」

「アリサちゃんから離れてえええええ!!!!」

悲鳴のような声を上げながら俺をブンブンと振り回す月村さん。

同じく腕が引きちぎられそうな激痛に悲鳴を上げる俺。

そしてバニングスはというと俺の首にしがみつきながら未だに夢の中。

ホテルの一室で起きた小さな女の子が人二人を振り回すという怪奇現象。それは5分程続きやつの事で我に返ったサリさんによって助けられた。同時に俺はファーストキスを守る事ができたのだった。

青い空、焼けるような太陽、白い砂浜、宝石のように輝く海。
朝食の後、私達は海に出た。

目の前に広がるのは私達が泊まるリゾートホテルが管理するビーチで清掃が隅々まで行き届いておりゴミらしいゴミも見当たらずに広い。そして何より人がそれほど多くないのだ。

他のビーチなら人が一杯で楽しむ前に気が滅入るのだけど、ここはホテルが管理するビーチでホテル宿泊のお客意外がここで遊ぶには料金を払わなければならない。

よって海水浴シーズンにも関わらずここは他のビーチに比べて人が少ないのだ。

「立花！すずか！さっさとパラソルを立てて遊びましょ！！」

「うん！」

逸る気持ちを前に私とすずかはビーチへと駆け出す。
がそれは立花に呼び止められる事により阻止された。

「ちよつとまった。母さんと二人は着替えてこい。パラソルは立てとくから」

「なに言ってるの。立花一人じゃ大変でしょ？」

「大丈夫ですよアリサ様。私もいますから」

メイドがパラソルを手に彼の意見を肯定する。

まあ、彼女がいるなら仕方ないか。

「それじゃ荷物を頼むわね。」

「了解母さん」

お義母様は立花の左肩にクーラーボックスを掛け、右肩にシートと
か入った袋を掛ける。この時彼女はメイドに物を渡そうとはしな
かった。

「つ、司様！？お荷物は私が持ちます！」

それに慌てふためくメイド。

「別に気にしないでいいわよ。この子はメイドと言っても女の子に
重い物を持たせるのはあまり好きじゃないの」

「そういう事だ。細かい事が出来ないからこれぐらいはやらせても
らうわ」

そう言っただけ一人歩き出す彼。その後ろをパラソルを手に慌てて追
かけるメイド。

『それじゃメイドの意味がないじゃないですか！』と聞こえ
たのは気にしない。

「それじゃ私達も着替えましょうか」

「そうだね」

「更衣室はアツチよ。」

「ここら辺に立てるかな。サリさん頼めるか？」

バニングス達と別れた後、俺とサリさんは手頃な位置を見つけるとそこに荷物を下ろす。

すかさずパラソルを立ててその下にレジャーシートを敷く。

砂まみれになってはいけないモノはもちろんシートの上に…。

よし、こんな所か。

「俺はここに居るからサリさんも水着に着替えてきたらどうだ？」

一息ついた所で俺はサリさんに言った。

「え？わ、私はいいですよ！？皆様方にご奉仕しなければいけませんし！！！」

これに対して慌てる彼女。
俺としては普段忙しいから少しでも息抜きになってほしいというのがあるのだが。
彼女はそうもいかないらしい。

「それはわかるけど俺は水につかれないからさ。バニングスと月村さんを退屈させたらいけないだろ？名目としては仕事だけどサリさんもたまには息抜きしないとさ。」

「し、しかし……」

「ちなみに拒否権はないぞ？」

悪ガキのような笑みを見せつつ彼女を見る。

少しの間を置き彼女は諦めたようにため息をついた。

「かしこまりました。それでは私も着替えてまいりますのでお荷物の方をよろしくお願いいたしますね。」

「了解」

更衣室の方へ歩いていく彼女を見送った俺は横になる。

「さてと…寝るか」

「……………」

「ここは更衣室。そこで私は鬼の形相であるモノを見ている。」

「……………アリサちゃん？」

「お義母様…サイズは？」

「……………Eだけど」

それを聞いてガクツとうなだれる私。私が先程から頑見していたのはお義母様の胸。まだまだ小ぶりな自分のと比べてお母様は……………。

「おっきいですね……………」

立花の妻として彼に相応しい女になる自覚と自信はある。けどこれだけはどうしようもない。ふと自分の胸に視線を落とす。

「……………ちっさい」

「あ、アリサちゃん落ち着いて…。」

そして親友の胸に視線を向ける。

「……………」

その咳きにビクツと肩を震わせる。

そういえばすすかつて中学に入学したと同時に発育がよくなったわよね……………」。

すすかは中学二年にしてC。私はBに届くか届かないか。

「すすか…。私達って親友よね？」

ゆっくりと親友に近づく私。

「な、なに言ってるのアリサちゃん？あ、当たり前だよ？」

後ずさる親友。

お義母様は引きつった笑顔のまま私達を見ている。

「だったら……………ちようだい？」

「無理だから!？」

「私も無理だと思っわよ……………うん」

そんなことない。やろうと思えばできるはず。

「いや、無理だから!?!」

「なんでそんなこと言っの?」

私達親友でしょ？

一步、また一步と詰め寄る私。

そして後ずさる彼女。

そんな時、更衣室の一室から出てきた女性。私と同じショートカットの金髪が特徴の女性。

「あの…司様。立花様に言われ私も着替えさせていただいたのですがどうでしょうか？」

その人物はメイド、サリ・エドワード。

私は二つ年上である彼女の胸に視線を向ける。

……………D。

「お前もかああああああつ！！！？！？」

「へ？キヤアアアアアア！！！？！？」

【第二幕】四話『最初の悪夢編・4だ』（後書き）

感想お待ちしています

【第二幕】五話『最初の思い出編・5よ!』(前書き)

更新がおそくなってごめんなさい!!

【第二幕】五話『最初の思い出編・5よ!』

遠くで聞こえた悲鳴を耳に俺はシートの上で横になりつつ目を閉じている。

全く、なにしてんだか……。

そんな事を考えてとりあえずスルーという結論に達した俺は悲鳴には無関心を決め込み昼寝に勤しむ事にした。

……………

「熱い」

けどそれは直ぐに断念。

時期が時期の沖縄なだけめちゃくちゃ熱い。今、こうしているだけでかなりの汗をかいている。

うむ、クーラー病か？

ちなみに俺の現在の服装は下が海パン。上が薄手の半袖パーカー。

生地が生地でかなり風通しがいいのを着ているのだがむしろように熱い。

選択失敗したな。

仕方ないできたら焼きたくなかったが脱ぐかな……。

襟の左側を口でくわえて。左肩を袖口から引き抜く。

少しぎこちないように見えるがそこは勘弁してほしい。

「お待たせ立花」

ん、どうやら皆が来たようだ。

俺は左襟をくわえたまま声の方を見る。

そこには4人の女性。

先ずは母さん。

黒のベアバックで腰に長いスカーフを巻いている。年齢より若い容姿の母さんだがこの着こなしは大人の女性っぽい感じだ。

次にサリさん。

彼女は空色のビキニ。こういった経験があまりないのか顔を少し赤くした彼女。俺が言うのもなんだけどよく似合っていると思う。

月村さん

胸元に小さなリボンがついた白のワンピース。一見質素だがこれが彼女の落ち着いた雰囲気の際だたせている。

そしてバニングス

赤のストラップレスのビキニ。

まあ、うん……似合ってる。

ところで四人共なにこっちを擬視してるんだ？

サリさんぼけっとしてどうしたんだ？あとバニングス、目が怖い。

「我が息子ながら私の方に似て女の子っぽい顔つきなのは仕方ないとしてコレはアレね」

「男の子なのに女の子のような色気があるってどっぴいっことですか……」

何をぐだぐだいってるのかは知らないけどそんなに見ないでくれな
いかな？

正直言ってかなり怖いんだけど。

「ねえ立花……」

「なんだよ……」

「私のお嫁さんになってください」

「今すぐ帰れ!」

それにしてもさっきの立花はちょっと色っぽかったわね。
女の私でも思わず固まっちゃったぐらいだし。

うーん、お嬢さんじゃなくてお嫁さんってのもアリよね？

まあ、とりあえずこれは置いてさっそく海で遊びましょう!!--
テンションMAXな私。すずかもいつもよりテンションが高い。

なのに！！

「あ、俺はここにいるから楽しんでこいよ。サリさん二人の相手を頼む」

なんてKYなことを言っている我が旦那様。

せつかくの海なのに何考えてるのよ！！

みんなで来たんだからみんな楽しんでないとダメじゃない！！
途端に不機嫌な表情になる私。

それに気付いた立花は少し気まずそうな顔になる。

そして自分の腕を見る。

「義手取り付けの機械が濡れるという問題があるってな」

それを聞いて私は今、気付いた。

彼の腕についている義手取り付けの機械は特殊なモノであって腕に直線埋め込みであるモノだ。

それが濡れてしまつては機器に動作不良が生じてしまい。交換の為に手術を受けなければならぬ。

だから、安易に水に触れるという行為は彼にはできない。

それをすぐに悟つた私。同時に原因も悟つてしまう。

そしてその原因は

「……………サリさん。悪いけど椅子と何か防水対策になるモノを持って来てくれるかな」

「かしこまりました。椅子は水に濡れても大丈夫なモノで防水対策は私に一存させていただいても構いませんか？」

「ああ、構わない。」

「では失礼します」

メイドが一礼した後ももの凄いスピードでホテルの方に走っていった。そんな光景を見て私は呆けた顔になる。すると義母様は私の肩に手を乗せて笑顔を向けてきた。

「良かったわねアリサちゃん」

この時の私には何がなんだかわからなかった。

5分後、帰ってきたメイドの手にはゴムでできた妙なモノと椅子があつた。

彼女はまず椅子を海辺の波打ち際に置き波に流されないように脚を埋めて固定。

次にホテルの従業員に持ってこさせた新たなパラソルをその間に立てる。

「では立花様。お手を。」

彼女に言われ立花は両腕を差し出す。そこに取り付けられたのは今方持ってきた妙なゴム。

「これで多少の水ならば侵入は防げる筈です。しかし遊泳等をされると保証はできませんのでご了承くださいますし。」

「十分だよ。ありがとう」

自分の侍女に礼を述べた後彼は私の方を見て笑顔を見せる。

「さて、遊ぶか」

「ついでとってはなんですが。ホテルからビーチボールを借りてまいりました」

この時私は自分を恥じた。

立花は自分の腕が塗れてはいけないのに、みんなで遊びたい、という私の希望を叶えてくれたのだ。

本来なら私は我が儘を言っではいけない。言う資格がないのだ。思わず目の奥が熱くなる。けどここはバニングスのプライドにかけて涙は見せない。代わりにできる限りの笑顔で彼にこう言ってあげよう。

ありがとう

さて、簡易ながら防水対策も施したわけだし。ここは存分に楽しまなくてはいけない。
またせっかくサリさんがビーチボールを持ってきてくれたのでこれを使わない手はないだろう。
種目はもちろんビーチバレーだ。

コートは波打ち際。ネットは飛びにくい地面なので1メートルの高さに棒で糸を張る。

後は落としたら相手に得点というルール。

チーム分けだがこれはジャンケンで決める事にした。なお、俺はジャンケンが
できないので母さんに代行を勤めてもらうとして

チームは

バニングス、サリさんチーム

俺、月村さんチーム

【審判】母さん。

「意義アリ!!」

「却下。さて始めるぞ」

バニングスの反論を一言で否定しておれは月村さんと一緒にコートに入った。

「よろしくね立花君」

「こちらこそよろしく」

挨拶の後、俺は軽く準備運動をする。

身体を動かすのは久しぶりだな。さて、腕はなまってないだろうか。

「ファーストは私が受けるからセカンドをお願いしていいかな?どんな玉でもなんとかして返すから」

そんな時彼女が出してきた提案。

まあ、この手じゃレシーブするのも難しいのは確かだ。

「いや、ファーストは俺も取るよ。ブロックは無理だけどレシーブならなんとかなるからさ」

「……大丈夫なの?」

少し疑いぶかい目で見られるが俺はどっこ風吹く態度で返した。

「これでもバレーは得意なんだ」

【第二幕】五話『最初の思い出編・5よ!』（後書き）

一応伝説の剣がある程度終盤に近づいたら『りあるおにごっこ』登場、女帝こと六道司さんの学生時代のお話しを新作としてかこうかと考えてます。

こういったおはなしは皆さんは興味あったりしますか？
よろしかったらレビューや感想でお返事お願いします。

ちなみにファンタジーモノになるのかな？

【第二幕】六話『最初の悪夢編・6だ』（前書き）

遅くなり申し訳ありません。

【第二幕】六話『最初の悪夢編・6だ』

「助けてサリさん！母さん助けてええええ！！」

現在俺は悲鳴を上げている。

ただ悲鳴を上げているのではない。

首から下を砂の中に埋められた状態なのだ。

そして目の前には

「立花」

ものすごくいい笑顔のバニングスがいる。

さて、前話ではバレーボールで勝負するという話だったが、一体なんでこんな事になっているのかと言うと今から10分程時間を遡ることになる。

立花の提案で始めたのビーチバレー！。

チーム分けは私、メイド対立花、すずか。本当は立花と同じチームだった方が良かったんだけど彼自身に却下されてしまった。多分あれは照れ隠しなんだと思う（いや違う）。

けどまあ、コレはコレで面白いかもしれない。

すずかには運動関係で負け越している分、この機にリベンジするとして

立花には私の愛を受け取ってもらおうとしましょう!!

「いきます!!」

最初のサーブ権を手に入れた私達のチーム。
ファーストサーブはメイド。

あまりバレーボールの経験のないと言っていたメイド。初心者ならアンダーサーブを打つのだがこのボールはバレーボールではなくビーチボール。

実はオーバーで打った方がコントロールがよくてアンダーで打つとどうしてもコントロールがおかしくなってしまうのだ。

基本的に忠実に、丁寧に、しっかりと相手コートに届くように打つ。

それだけで軽量なビーチボールは空気抵抗により不規則な動きを見せる。

落下地点は立花の後方コーナー付近。

「私が取るね!!」

すかさずボール下へと滑り込んだすずか。流石我が親友。抜群の運動神経で完璧にサーブカットを決めるとパートナーである立花が繋ぎやすいようにパスを送る。

「トスは高め？低め？」

「高め！ネットから少し離して！！」

二打目を上げる直前。立花はトスの高さをリクエストする。

そしてすずかの要望に応えてボールの高さを高めになおかつ彼女が打ちやすく、更に助走を取りやすいようにピンポイントで二打目を繋げる。

肘から先の無い彼はそんな事など関係ないと言わんばかりに綺麗なトスを左腕のみで上げた。

流石私の旦那様

と歓声を上げたい所だが次の瞬間もの凄い光景を目にする事になった。

「やあつー！！」

気合い一発。

すずかが砂地、それも波打ち際という最悪の状況下で高く舞い上がった。

ウソ!? こんな足場でなんであんなに飛べるのよ!?

そして彼女の右手がボールを捉えた瞬間かん高い乾いた音がビーチに響く。

刹那、凄まじい回転とスピードを伴ったボールがこちらのコートに向けて放たれた。

強烈というか異常な程の縦回転、ドライブをかけられたボールはネット直前で急降下。

バレーボールではまず有り得ない起動でネットを超えた後に地面に突き刺さらんとする。

ここで私は自分の親友の凄さを目の当たりにして呆然とする。多分彼女はプロで大成するのではないだろうか?

てかあんなのプロでも打てないし取れる! わけないじゃない!!

「私にお任せを!」

けどそれを拾える人物がここにいた。

『第一回りあるおにごっこ』開催の時に見せた縮地まがいのスピードでボール下に滑り込んだ彼女。

右手、手首のスナップのみでこのボールの落下を阻止した。

ちなみに彼女がいた位置は後衛。前衛にいる私を一瞬で追い抜いたこのスタンドプレー。

その光景に私はもちろん立花も呆然としている。

大方自分のパートナーであるさすがにこんなにも凄いと思わなかつ

たのдарろう。

「アリサお嬢様お願いします!!」

メイドが上げたボールは私目掛けて凄いスピードで飛んでくる。

私かというと未だに呆然としたままでいるのでそのボールを顔で受ける形となった。幸いビーチボールなので怪我とかはなかったけどかなり痛い。

乾いた音を立てて上がったボールの行く先はネット付近、メイドの頭上2メートル。普通ならこのまま相手コートに戻る所だけどメイドは膝を沈ませる事により力を溜めて一気にそのボールへと飛びついた。

そして

「立花様！参ります!!」

バコンッ!!という有り得ない効果音の後、立花の顔面に叩き込まれた。

その衝撃で彼は直立のまま後方10メートル程縦に転がるようにして吹っ飛んでいくのでした。

「アハハハハハ」

ちなみにその光景を見ていてお腹を抱えながら義母様が笑いこけていたのは別のお話し。

目を開けると目の前は綺麗な空だった。
俺はサリさんのスパイクを顔面に受けた後意識を失ったらしい。
で今の俺の状態はというと

「なんでだよ」

砂地から顔だけを出した状態だった。

なんで俺は埋められてるんだ？

バレーは得意な方とぬかしておいて顔面にボールを喰らい気絶してる
という醜態を晒したというのは認める。
けどなんで埋められなくちゃなんねえんだ？

「あら、起きたの？」

体が動かない今、首だけを声のした方に向ける。
そこにはスイカを持った母さんがいた。

「なんで俺は埋められてんだ？クソ婆ア」

「面白そうだからに決まってるじゃない。あと次クソ婆ア言ったらコレで頭を叩き割るぞクソガキ」

ものすごく冷たい目で見られた俺はとりあえず『クソ婆ア』という単語は封印。

身動きできないこの状態で頭にスイカなんぞ叩きつけられたらかなりヤバイ状態になる自信があつたからだ。

そつえばバニングスの姿が見えない。

どこかにいったのだろうか？

「どうしたの？」

「いや、バニングスの姿が見えないな…て」

「ああ、アリサちゃんならホラ」

母さんが指差す方を見る。

瞬間、俺の時間が止まった。

じい〜つと俺を見ているバニングス。無表情だった彼女の口元が割けるように割れる。

そして一歩。

…ヒタッ

また一歩

…ヒタツ……ヒタツ…

と近づいて来る。

真夏の沖縄だというのに額や背筋から溢れる冷や汗。

…ヒタツ……ヒタツ

立って歩いていたバニングスは次に四つん這いになって近づいてくる。

ザッ…ザッ…

そして歩復前進となり俺までの距離が1メートルほどになった時。

「助けてサリさん！母さん助けてええええ！！！」

俺は悲鳴を上げた。

サリさんはオロオロとし母さんはハナから助ける気がない。
必死にもがくが全く体は動かない。

「立花」

コイツとの距離が詰まり彼女は右手を俺に伸ばす。
俺の顎を掴むと無理やり自分の方に向けて固定。

「りっ……か……」

そしてそのまま俺の顔に近づいてくる。

「好き……愛してる……」

「他人でお願いします！赤の他人で！！」

彼女の告白を全力で断るがそんな事など知ったことではないと言わ
んばかりにスルー！。

「……………」

「うわああああああっ！！！！」

【第二幕】六話『最初の悪夢編・6だ』（後書き）

最後の描写はアリサにすずかが横から蹴りをいれて蹴飛ばしたという事になってます。

とても親友のやることじゃないですね。

感想お待ちしてます

【第二幕】七話『最初の思い出編・7よー!』(前書き)

遅くなりました。

【第二幕】七話『最初の思い出編・7よ!』

目を開けるとそこは知らない部屋だった。

私は横になっている柔らかく寝心地のいいベッドから身体を起こし周囲を見渡す。

やたら内装の造りや家具が高価なモノからしてここはホテルのスイートなのだろう。

ここで宿泊初日に支配人が『日毎に部屋を変える』といていたのを思い出す。

最初は意味がわからなかったが、今では直ぐに理解できた。

まあいいわ。それよりも今の時間とは……。

「ウソ!夕方6時!？」

なんと今は夕方の6時だった。

今の今まで意識を失っていたのだ。

ここでちよつと私は意識を失った原因を探って見る事にする。

あの時、生首状態の立花を見た途端に頭の中が麻薬っぽい変なん感覚になって、それがとても心地よくて、それに身をまかせて……。

「……………思い出せないわね」

その時の事がよく思い出せない私。代わりに少し左脇腹が痛く感じるけど、まあいいか、と一人完結させて部屋を出た。

「立花の部屋はどこかしら？」

そして只今ホテル内にて愛する彼を探し徘徊中。

支配人やホテルマンに聞いても良かったがなんとなく自分の力で探してみようと思ったのだ。

気分的には某ホラー映画のゾンビ？

こんなかわいいゾンビに襲われるなら立花も本望でしょう

そんなこんなで鼻歌を歌いながら徘徊を続けているととある一室の入り口の前にメイドの姿を見つけた。

「あの人……誰？」

同時に視界に捉えたメイド、サリ・エドワードの隣にいる人物。そのはとも優しそうな顔つきのおばあちゃんだった。彼女の手には暑いお湯が入った桶とタオルがある。

「それでは坊ちゃんのことよろしくお願いします。」

「あいよ。りっちゃん、お風呂の時間だよ。今から入るからねえ」

ノックもせずただ一言だけ扉の向こうにいるであろう立花に入室の旨を伝えるとそのまま彼の部屋に入っていた。

「これはアリサお嬢様。お身体の方はもうよろしいのですか？」

「ねえ、今の誰よ」

私はメイドに今の人物だ誰なのかを聞く。和服姿のあの老婆は立花の事を“りっちゃん”と呼んでいた。

ということは六道家の身内、立花の祖母なのだろうか？

「今の方ですか？あの方は六道家の従者統括長を勤めております。

ハラムラモキ
原村四木です」

従者統括長。ようするにこのメイドを初めとする六道家全従者を統括するのがあの老婆だ。

「お風呂って言ってたけど立花の世話ってアンタの仕事じゃないの？」

「まあ、そうなのですが……。」

少し気まずい感じになるメイド。

どうしたのだろうかと首を傾げる。

「私、アリサお嬢様より2つ上として、皆様と同世代の女ですので」

「あ……。」

それを聞いて流石の私も察する。

「立花様も年齢が近い女に裸を見られるという事に抵抗があるので
すよ」

まあ、確かにそうよね……。
けど、そんな事より気になる事があった。

「とっころで話は変わるけど……」

急に周囲の温度が下がる。
異様な空気がこのフロアを包む。その中心にいる少女は顔を伏せて
メイドの側に詰め寄る。

「アンタは見てないわよね？」

「……………え？」

少女はメイドの頬に手を伸ばす。
メイドは動けない。動きたくても動けない。代わりに恐怖が彼女の
身体を駆け巡る。

「アンタ……………見てないわよね？」

少女から立ち上る黒いオーラ。
頬に添えていた手が首にへとまわる。

「ねえ……どうなの？」

「み、みてま…せん。」

その言葉を聞いた途端に周囲の雰囲気のもとに戻った。

「そ、なら良かった あゝ、お腹空いた。今日の晩御飯何かしら。
あ、確かビアガーデンがあったわよね？天気もいいみたいだし外で
の夕食つてのもいいわよね。」

「で、では私の方で司様に申請してみます。」

『それじゃよろしく頼むわね』と少女はその場を後にした。

「……………」

アリサお嬢様が立ち去られた後、私は恐怖から解放されてその場へあたり込んでしまった。

怖かったです。

まさか一瞬とはいえアリサお嬢様があんな殺気を放てるとは思いませんでした。

アメリカに滞在している時に立花様を狙った犯罪者でもあんな殺気は出せませんよ？

というか立花様とアリサお嬢様の過去ってなんなのでしょうか？

立花様と司様以外で知っている人はほんの一握り。

専属の侍女である私ですら知らない事情。

けど……

「なんででしょう。そんな事は関係無しにお似合いだと思えるのに同情してしまえるのですが」

それは多分私だけではないでしょう。

「ごめんなヨギバア。俺の為にわざわざ沖縄まで来て貰って」

俺は二日目に割り当てられた部屋でヨギバアに身体をお湯で濡らした熱いタオルで拭いてもらっている。

安易に水を浴びる事のできない俺は風呂代わりにこうして彼女に身体を拭いてもらっているのだ。

ここでこの人の事を紹介しよう。

この人は原村四木さん六道家の全従者を統括している人で母さんも頭が上がらない人物だ。ちなみに愛称をヨギバア。またの名をマスターヨーギ。

「なに言ってるんだい。これぐらいで謝ってるんじゃないよ。りっちゃんもっと大変な思いしてんじゃないか」

「別にこれぐらい大変だなんて思ってないよ」

別に俺は今の現状、この身体になんの不満もない。こういう身体に

なつてしまったというのも運命だと割り切っている。
だからなんの不満もない。

「今、せめて計画中の防水型の義手が早くできてくれだらいいんだ
けどねえ」

「技術部の人間はしつかりやってくれてる。今は待つしかないよ」
防水型義手の他に長寿命のバッテリー、指先の動きも再現できる最
新型の義手も計画されている。
どれも完成したら今の生活がかなり改善される。
けど技術部も人の子だ。俺一人の為に急がせる訳にはいかない。

今はこの生活を謳歌するさ。

「そつえばねりっちゃん。」

「なに？」

いきなり深刻な顔になったヨギバア。俺は何事かと首を傾げる。

「りっちゃんのお嫁さん候補はもう見つかったのかい？」

「はあ…、ヨギバアまでそのネタを出すか。親戚連中は俺がいつ嫁
を取るとか、自分所の娘の縁談の話しばかりでうるせえし。死んだ
親父が護衛した要人も自分の娘と付き合ってみないかという話しを
持ちかけてきやがる。ヨギバアも知ってるだろ？俺にはこういった

話しはまだ早いし興味ないってこと」

俺は親戚や他社、要人界との交流はあまり好きではない。

会う度に縁談の話しが出る。未亡人である母さんはそういった話しを上手くスルーしているが、俺はまだそういった術を身に付けていない。

親戚連中、他の一流企業の社長令嬢、財政界の要人の娘、終いには大統領の娘。

そういった人物達から申し込まれる縁談、見合い。

礼儀上、相手との顔合わせだけでもしないといけないが今の俺には興味がない。

あとと言うとバニングスのあの行動もウザいの一言だ。

「フェツ、フェツ、フェツ。確かにりつちゃんはこの老いぼれと違ってまだまだ人生これからだからねえ。焦る必要なんてないさね。けど気になる子ぐらいいはいるんじゃないのかい？」

「……いない」

「そうかいそうかい。……ハイ終わり。もう夕飯の時間だから早く司ちゃんの所へお行き」

身体を拭き終えた俺に服を着せる。

なにやら嬉しそうに後始末をしている彼女を横目に俺は部屋を一人出ていった。

「え、今晩はアリサお嬢様のリクエストにお答えしましてビアガーデンでのディナーとなります」

あの後私は支配人の案内の下、ホテル運営のビアガーデンに案内された。

ようするに私のリクエストをお義母様がOKしてくれたのだ。直ぐにお義母様を含む、立花、すずか、メイドの4人も来て始まる夕食の席。

最初立花は出されたメニューを鬼のように睨んでいたけど直ぐに問題が無い事の確認が取れたようで普通の表情に戻った。そんなこんなで始まる楽しい夕食！！なんだけど……

「アリサひゃん…なんで私を見てくれるの？ねえ、なんね？」

お義母様にお酒を飲まされて出来上がったすずかが私に抱きついてきているのよ。

しかもかなりお酒臭い。

お手伝いの為に少しだけ席を外したんだけど一体どれだけ飲ませたのよ。

立花は別の席で溜め息ついでるし。
お義母はメイドにもお酒のませようとしてるし。

「すずか！アంతなに未成年の上、飲めもしないお酒飲んでんのよ
！！」

「え〜？つかさんが美味しいよっていふからのんなの〜。」

はあ〜、と溜め息をつく私。

ホントならこの手は私が使うつもりだったのに。

「立花も見えてないで助けなさいよ！奥さんの貞操のピンチよ！？」

「いや、お前とは結婚してないから。それに月村さんがバニングスを欲しいなら喜んで身を引こう」

なんとも薄情な我が旦那様は一人『隠れフォーク君』で突き刺したエビを食べている。

「そう…。アリサちゃんがわらひをみてくれらいのはアレのせいなんだ…」

すずかが私を解放して千鳥足で立花の所へと歩き出す。

ウーロン茶を飲んでいる彼はすずかを見た瞬間その場から逃げだしてホテルの中へと逃げていった。

「おやおや。あんなに元気なりっちゃんを見たのは久方ぶりだねえ」

二人を追うべくして立ち上がった私。

それと同時に私に歩み寄ってきた一人の女性。

原村四木さんだ。

「はじめまして。六道家の従者統括長をやらせてもらっております。原村四木というモンです」

「え？は、はじめまして。アリサ・バニングスです」

四木さんは私の隣の席に腰を下ろすと少し話があると言ってきた。二人を追おうと思っていた私だが少し真剣な彼女を見て再び腰を下ろす。

「まずはこの老いぼれからお礼を言わせてください。立花坊ちやまがあんなに生き生きしているのを見たのはホントに久方ぶりです。これもアリサお嬢様のおかげだと私は考えております」

深く頭を下げる四木さん。

そんな彼女を見て私は慌てる。

「そ、そんな。頭なんて下げないでください。私は何もしてないし。むしろ立花の迷惑になっているんじゃないかと」

「いやいや、立花坊ちやまがあそこまで元気になったのはアリサお嬢様のおかげですわい」

それを聞いた後、私の心に針で刺したような痛みが走る。私はなにもしてない。むしろ奪ったのに。

「……アリサちゃんは気にしているのかい？」

私は顔を上げる。

そして息を呑む。この人は知っている。私の罪を知っている。手が震えだす。怖い。そう思った。

「アリサちゃんは悪くない。誰も恨んどりゃせんよ」

「けど……」

「りっちゃんのこと好きかい？」

そう聞かれ私は少しの沈黙の後、頷いた。そこには先ほどのような深刻な空気はない。

「他のモンは財産や名声目当てじゃから、アリサちゃんには期待できるかのう。」

四木さんは少し考え私にあるモノを差し出した。

「司ちゃんも試したヨギバア七つの秘策の一つじゃ。試してみるとええさ。男はまつんやない。どんな手使っても自分で捕まえるモンや」

その差し出されたモノをマジマジと見ている私をよそに四木さんはその場を後にしたのだった。

【第二幕】七話『最初の思い出編・7よ!』（後書き）

感想お待ちしております。

ちなみに次かその次で第二回リアル鬼ごっこ開催予定。

今回は誰と誰になるかな？

【第二幕】八話『最初の悪夢編・8だ』（前書き）

更新が遅くなつてすみません。

【第二幕】八話『最初の悪夢編・8だ』

「……………」

昨日に続いて俺は朝8：00に目を開けた。

昨日は酔っぱらった月村さんに追われたのですぐに部屋へと逃げ込んだ。

逃げ込んだのはいいのだが彼女は部屋の扉を思いっきり殴ったり蹴ったりしてきたのだ。

効果音をつけるなら

ドゴオオン！！……………バゴオオオン！！……………

アレは本気で怖かった。

というかアレは中二の女の子が出せる威力じゃない。

扉は軋むし、天井から誇りは落ちてくるし……………。

それが小一時間続いたのだ。

いつ扉が破られるかというホラー映画さながらの恐怖を身を持って体験した夜だった。

「さて……………。視察する内容も一通り済んだし、今日はどうするか？普通に観光でもする……………」

ここで俺は自分の異変に気付いた。

「……………なんで服を着てないんだ？」

この時の俺は裸だった。

いや、完全に全裸ではない。下着であるトランクスは履いていたけど、昨晚寝る時に着ていたはずの寝間着を今朝は着ていない。

……………なんでだ？

そんな時、誰かが部屋をノックした。

「おはようございます立花坊ちやま。」

「起きてる？立花」

この声はサリさんと母さんだ。

流石にトランクスのみは服装は不味いので、俺は普段着であるジーンズだけで、慌てて履くことにする。

「あー、どうぞ」

そして着替え終わった後、ベッドの上で胡座をかきながら二人の入室を許可した。

「失礼します」

カードキーであるドアの施錠が外される。扉が開き。家の身内である二人が入ってきた。

「おはようござい」

入室第一声。サリさんが言葉に詰まった。

「おはよう立花……って、なんで上半身裸なのよ。もしかして寝起き？」

もしかしなくても寝起きですよ母さん。

彼女の質問に欠伸をする事で是定する。

すると彼女はなにやらものすごく珍しいモノでも見たかのように俺に近づくとマジマジと観察しだした。

「アンタが7:30までに起きないのって珍しいわね。昨晚はなにしてたの？」

「アンタが酔わせた月村嬢の恐怖に怯えてた。」

後30分も同じ事されてたら扉が砕けてたな。

「あはは……。ごめんね立花君。」

苦笑しつつ、頭を押さえながらサリさんの後ろから出てきた月村さん。

その様子からして二日酔いのようだ。

俺は軽く溜め息をつくと彼女に対して頭を下げた。

「ごめんな月村さん。母さんが無理に飲ませたせいで」

「いいよ。いいよ。私の方こそ迷惑かけたみたいだから」

「どうやら。昨晚の事はあまり覚えていないらしい。」

「まだ、気分が悪そうな彼女を見てサリさんに椅子と水の用意をお願いしておく。」

そして場所が場所だが軽い談笑をする事になった。

「今日は観光するんでしょう？視察内容も大方消化したことだし」

「俺はそのつもりだったけど月村さんは大丈夫じゃないだろ？」

「大丈夫。あと2時間もすればいつも通りに動けるとおもつよ」

月村さんは意外に酒に対して免疫があるのかもしれないな。

「無理にとは言わないけど観光中、気分が悪くなったら言ってくれよ」

「うん。ありがとう」

小さく笑顔を見せ礼を述べた彼女はグラスに入っている水に口をつける。

「ところでバニングスはまだ寝てるのか？」

「そうみたいよ。サリがお越しに言った時はまだ返事がなかったらしいから、多分ね。」

仕方ない。後でサリさんに起こしてきてもらおうと彼女に頼もうとした時。バスルームの扉が勝手に開いた。

「流石六道グループ運営のホテルね。Aランクの部屋のお風呂もなかなかの作りじゃない」

「……」

そこから出てきたのはバニングス。
バスローブで身を包んでいるコイツは濡れた髪をタオルで拭いている。

その光景に俺達4人は完全に石となった。

「あー、ミス・バニングス。なんでそこから出てきてるんですか？」

やっとの事で口を開いた俺は疑問を彼女に問いかける。

何故かになっているが俺には分からない。あとと言うと文もおかしい。

「何ってお風呂に入ってたんじゃない。あと“ミス”・バニングスじゃなくて“ミセス”・六道ね。」

そして再び続く沈黙。

そんな事はお構いなしと言わんばかりに彼女は鼻歌を口ずさむ。

そして自分が座る椅子を適当に手繰り寄せて俺の隣に腰を落ち着かせると

「これからよろしくね。あ・な・た」

「ちょっとまって！誰が“あなた”だ！！」

たっぷり沈黙すること3分。
やっと正気に戻った俺は声を上げてコイツから飛び退く。

「てか、なんで俺の部屋にいるんだよ！？どうやって入った！？」

「立花君！アリサちゃんに何したの！？」

一気に酔いが覚めたであろう月村さん。
俺に跨り首を絞める。

「俺は何もしてねえ……く、苦しい……」

ホントに何も知らない。昨日は確かに一人で寝たはずなんだ。

「あ、アリサお嬢様。昨晚、何があったのですか」

「そ、それは私も気になるわね。なんかものすごく嫌な予感もするし」

ドン引きの我が母と侍女。

彼女達の問いにアリサは頬を押さえつつベッドを指差す。

指差す先には真っ白なシーツに浮かぶ小さな赤いシミ。

「義母様、ふつつか者ですがよろしくお願ひします。“あなた” 昨晩は激しかったわね」

それを見た。サリさんはあんどりと口を開けて呆然とする。

「り、立花様…そういうことだったんですね？私はお赤飯とご親戚の皆様にご一報を……」

「ストップ！サリさんストップ！！」

「そ、そんな……」

赤飯を炊きに部屋から出ようとするサリさん。

それを必死に止める俺。

絶望に暮れる月村さん。

「……これからはアリサ様を“お嬢様”とは呼べませんね。“奥様”とお呼びします。立花様も“旦那様”で」

「俺は何もしてネエ！！」

目を背けながらとんでもねえこと言ってんじゃねえ！！

俺は一人で寝たしさつきまで一回も起きてないんだぞ！？
てか、そのクソ婆ア！部屋漁ってないでなにか言え！！

「ドコが何もありませんか！ベッドのあのシミはなんですか！？
それにお部屋もどこか生臭いですし！立花様も六道家の男なら責任
を取りなさい！！」

「お前はその六道家の従者だろうが！バニングス家に仕える人間を
易々と渡すのかよ！？」

「それとコレとは話しが別です！次元世界が違うくらい別です！！
男は、女の初めてを奪った時点で責任を取るべきです！！」
「むしろ奪われたのは俺の方じゃねえのか！？」

「あ、私はいつでもお嫁入りするわよ？」
「テメエは黙ってる！？」

嘘だろ！？俺とバニングスが関係持ったなんて嘘だろ！？
俺は青ざめた表情でアイツを見る。
頼む嘘だと言ってくれ……

「だったら試してみる？」

俺の意志を悟ってかアイツはにこやかな笑みで言った。

コレが本当ならアイツは既に処女を無くしている。

けど、それを実証する術が今はない。

ほぼ錯乱状態の俺は正確な判断ができずに、彼女の出したその提案
に乗ろうと首を縦に振ろうとした。

「やっぱりあった！」

その時、母さんの声が部屋に響いた。
先程まで部屋を漁っていた母。

ベッドの死角から姿を見せた彼女の両手にはオモチャの扇風機と一緒に大皿が一枚、握られていた。
その皿の上には

「い、イカ？」

「……チツ」

北海道の名物、イカがあった。その数15匹。
バニングス。今、舌打ちしなかったか？

「つ、司さん。なんでイカが？」

「コレはね。ヨギバアの七つの秘策の一つ。『既成事實は作るんじやなくて作らせる』私の時とはパターンが違っけど間違いなくアレね。ちなみにそのシミはケチャップじゃない？」

月村さんの問いに母さんは答える。

ヨギバア七つの秘策の内の一つ『既成事實は作るのではなく作らせる』

これはケチャップとイカを使っただるくでもねえ秘策である。

使用法は今までのやりとりを見てくれればだいたいわかるだろう。

「……アリサちゃん。ヨギバアの秘策シリーズは、ホントろくでもないモノばかりだから止めておいた方がいいわよ？」

「うっ……」

額に手を当てて溜め息をつく母さん。

秘策が失敗した事により何故か拗ねているバニングス。月村さんとはいうとホッと安心している。

さて、俺はと言つと。

「ぶざけんな！ヨギバアアアアアア！」

この場にはいないマスターヨーギことヨギバアに向けて叫ぶのだった。

「ホラホラ、いつまでもそんな顔しない」

ホテルでの策略が失敗した後。私達4人は観光の為に街に出た。メイドは四木さんに話しがあるとの事でこの場にはいない。

また、シーズンという事もあり街は人ごみで溢れ返っている。

さて、私の婚約者（自称）立花はというと私の隣、すずかと挟まれるような形で歩いていんだけど、その表情はかなり不機嫌である。

私の親友もそんな彼に苦笑していて、義母様に機嫌を直すよう言わ

れているが一向に機嫌が直る気配はない。

流石の私もやりすぎたと思っただけでテンションは低めだ。

「立花…ごめん」

「……………」

謝っても彼は返事を返すどころかこちらに見向きもしてくれない。
流石の私もどうしようかと戸惑いだす。

「はあ…、いい加減にしなさい。二人が困ってるでしょ？」

「朝っぱらから最悪な目に会ったんだぞ？気分も悪くなるモンだろうが」

「アンタはいい方よ。私の時なんて真人さんと二人してはめられたんだから。その時は私の親友3人とそのお家を巻き込んだ大騒動になったのよ？」

真人さんとは多分義母様の旦那様、立花の義父様だろう。

そして義母様は義父様と一緒に四木さんにはめられたらしい。

けど今の私にはそれよりも立花の機嫌の悪さの方が死活問題だ。

このままでは彼に嫌われてしまう。そう思った矢先私は彼の前に出て頭を下げた。

「ごめんなさい！！」

街中で声を上げて頭を下げる私。周囲からの視線なんて関係ない。
私はただ謝るのみ。

けど彼は冷たい視線で私をはじめとする見下ろしている。そして一度目を閉じた後、私の横を通り抜ける。その際、

「今日と同じ事、二度とやるなよ……」

という一言を私に投げかけた。

その一言に明るくなる私。すぐさま彼の腕に抱きつく。

「いきなり抱きつくな!!」

「いいじゃない。せつかくのデートなんだし」

「デートじゃねえよ!!」

腕を振り解こうとする彼。

けど私は離さない。そんなやりとりをしている時。義母様が私達に話しかけた。

「お取り込み中ごめんなさいね。」

「何だよ母さん……」

「どうかしましたか？」

「すずかちゃんの姿が見えないんだけど……」

.....
え
?

【第二幕】八話『最初の悪夢編・8だ』（後書き）

原村四木ことヨギバア。またの名をマスターヨーギ。

六道家の従者を統括するこのしわくちや婆の七つの秘策『既成事実
は作るものではない作らせるものだ』

……ろくでもねえな。

感想お待ちします。

【第二幕】九話『最初の思い出編・9です』（前書き）

久しぶりに早めの更新ができました。

今回はさすが視点多めです。

【第二幕】九話『最初の思い出編・9です』

「ちよ、義母様！？すずかの姿が見えないってどういう事ですか！？」

母さんの言葉にバニングスは俺の腕を離し周囲を見渡す。

俺も同じく possible の姿を探すが見えるのは自分達とは関係のない人ばかり。

「ついさっきまではここにいたはずなんだけど、いつの間にかはぐれちゃったのかしら？」

「まさか……誘拐？」

親友がいきなり消えて冷静な判断ができない彼女は顔を青くする。

「いや、それはないな……」

それに比べ、比較的冷静な俺は彼女の考えを直ぐに否定する。

確かに俺達のような大企業の令嬢や御曹司的立場の子供は身の代金目当ての犯罪者からすれば格好の交渉道具である。

けど、こんな人通りの多く、車の入ってこれない場所での誘拐は考えにくい。

月村さんも立場上、誘拐に対する知識があるはずだから見知らぬ人間についていくはずがない。

その事を彼女に伝えると少しは気が楽になったのかホッと安堵のため息を漏らした。

しかし、まだ親友の安否が気になるようでその様子からはまだ落ち

着きが伺えないでいる。

『……こういう所はコイツの美点なんだがな』

彼女の身内思いの所は俺自身、好感に値する所がある。

以前、クラスメートに聞いた話では自分のクラスと他のクラスの揉め事があった時は進んでその問題を解決に乗り出したらしい。そういったことは気軽にできるモノではない。人は何かしら自分の保身が最優先である。

自分の評価が変動しやすい事象、ましてや評価が下がりがねないいざこざから人は距離を置きたがるからだ。

だがコイツは『クラスの仲間が困ってるなら助けるのが当たり前』という持論の下、そういう事に平気で首を突っ込む。

「月村さんの事が気になるか？」

「……立花。今の発言はいくら立花でも許されないわよ？親友がもしかしたら危険な目に逢ってるかもしれないこの状況でなに当たり前な事いつてるのよ。」

そう、今回のように親友になにかあったかもしれないという可能性がある現状なら尚更だ。

「悪い、意気地が過ぎた。母さん、携帯は繋がったか？」

「いいえ、繋がらないわ。けど電波や電源は入っているみたいよ。」

彼女に謝り。俺は母さんに携帯が繋がるかどうか確認を取る。結果は上記の通り。

これで誘拐の可能性はほぼ消えた。

最近の携帯はGPS機能がついており電源が入っている限りその携帯がどこにあるのかが解る。

誘拐なら電源を切られている可能性が高いからだ。

おそらく携帯はホテルにあるのだろう。

そんな事を考えつつも頭の中で瞬時に組み上げたプランを二人に提示する。

「それじゃここからは二手に別れて彼女を探そう。月村さんが姿を消した可能性は二つ。

一つは文字通り俺達とはぐれた可能性。

二つ目は何かしらの事情で俺達から離れなければならないという可能性。

この事を踏まえて彼女がいる可能性が高いルートは二つ。

今、俺達がいるこのメインストリートと建物を挟んで隣にある海辺の通り。

これの根拠として普通の中学生と比べて頭のいい月村さんならわざわざこちら側から見つかりにくく、トラブルに巻き込まれやすい細道に入るといふ事は考えにくい。

また、見つけてもらおう為に比較的トラブルに逢いにくく、人がこの通りより少ないという点がある。

人員配置は俺がこのメインストリート。母さんとバニングスが海辺のルートの探索を担当する事にする。

探索するに当たってのポイントだが。通り上はもちろん特に通りの端に気をつける事。人間の心理上、人は不安になると端や隅に寄る習性があるからだ。そして、コンビニとかがあつたら中を確認する事。飲食店と比べてコンビニは目立つし気軽に中に入る事ができるからな。なにか質問は？」

俺の提示したプランにバニングスは目を丸くし、母さんはなにやら嬉しそうに笑っている。

「顔は私寄りなんだけど性格と頭の良さは真人さん似ね…。私の方は異論はないわ」

「探すなら三人別々の方がいいんじゃない？もしくは立花が二人組の方がいいと思うんだけど」

まあ、それもごもつともだけだな。

「却下。三人別々の場合だとまた誰かが迷子になる可能性があり、バニングスを一人にすると独自の判断で細道に入ったり変なトラブルに巻き込まれる事が想定される。そして俺と組んだとして、何かの拍子に完全に頭に血の上ったお前を御する自信がない。だからバニングスのペアは大人の母さんにここは頼むとする。

俺は護身術をみにつけているから多少のトラブルなら逃げ切る自信があるからな。ルート配置も探すポイントはプランを提示した俺の方が心得てるからだ。他に質問は？」

説明を受けてバニングスは静かになった。それを確認し、母さんに彼女を頼むと彼女の肩を肘から先の腕で軽く叩く。

「大丈夫だ。月村さんは直ぐに見つかる」

「……………うん」

小さく返事をする彼女を横目に俺は母さんに向き直る。

「母さん。俺は連絡手段を持たないから1時間後にホテル前に集合。それまでにこっちで見つかったらそっちの通りにいく事にする。そっちで見つかったら集合時刻に月村さんを連れてホテル前に来てくれ。そのあと観光を仕切り直そう。バニングスもいいか？」

「ええ。」

「わかったわ。」

二人が頷くのを確認、海辺の通りへと向かうのを見送った後、一度大きく深呼吸をすると『ヨシ!』と軽く気合いを入れて俺は一人、今来た道を引き返していった。

「うう、やっぱり二時間じゃ無理があつたかなあ……」

私、月村すずかはコンビニエンスストアのお手洗いから出る。その顔はどこか気だるくそうで二日酔いを思わせる。

まあ実際二日酔いなんですけどね。

朝の騒動で完全にお酒が抜けたと思っていたけどつい先程、急に気持ち悪くなつて道中見かけたコンビニエンスストアに駆け込んだのですが。

その際三人の誰にも声を掛けずに離れてしまったせい、みんなとはぐれてしまいました。

『この場合私はここを拠点に動かない方がいいよね……』

中学に入ってお姉ちゃんから学んだ誘拐等のトラブルを避ける方法の一つとして知り合いとはぐれてしまった場合、こういった場所を

拠点にジツとしているというモノがある。

理由としては世間でコンビニエンスストアは【110番の家】として登録されているのが多く、なにかあればソレ相応の対処法を店長やマネージャーがマニュアルとして心得ているのと、人の目が集まり易いこの場所、昼間は犯罪が起こりにくいというのもあり、上記のマニュアルを心得ている店長やマネージャーがいる確率が高いからだ。

『あとはまた気持ち悪くなった場合の保険……かな？』

そんな事を考えつつ、飲み物が置かれている大型の冷蔵庫からお水を取り出しレジへと向かう。

人前ということなどでなんとか気だるさを隠しつつお会計を済ませると三人から見つけやすいように、また外の空気を吸う為にお店の前に出た。

この時もお店から離れないという事は忘れない。加えて脇道に近づかず入り口の側に立つ事にする。

なにかあれば直ぐにお店に逃げ込めるようにする為だ。

ここのコンビニエンスストアは入り口の側に公衆灰皿があるから煙草を吸っている人の煙が煙いけどここは我慢。

早くみんなが私を見つけてくれる事に期待しましょう。

「ねえ君。今、一人？」

……………え？

「ここにもいないか……」

月村さんを探して30分程たった今。未だに彼女の姿は見えない。メインストリートの中央から一端、入り口まで戻って俺が提示したポイントに加えて可能性のあるファーストフードの店も覗いていた。場所的に大体、4分の2は来たからそろそろ見つかる可能性が高くなつて来る筈だ。

「次は……あのコンビニか……」

視界の奥に見えるコンビニエンスストアの看板を確認して俺は歩きます。もちろんこの時も道の端に注意を払うのを忘れない。

そしてコンビニまで10メートルの所まで来た時に見覚えのある紫色の神が視界に入った。

「……ビンゴ」

ようやく彼女を発見した俺は小さく溜め息をつく。

バニングスの提示した【誘拐】という小さいながらも存在する可能性が今消えたからだ。

「これでアイツも安心するだろう。」

旅行に招待した客が誘拐に逢いましたなんて目も当てられない事態だからな。

そう思い、一歩踏み出した時。

「ねえ君。今、一人？」

どこの誰かかも分からない男二人が彼女に話し掛けた。

口調からしてこの地元の人間じゃない。アレは関東の人間だ。年齢的に高校生ぐらい。おそらく旅行に来て現地でナンパといった所だろう。

まあ、彼女も見てくれはそこら辺の女性とは一線を喫しているからナンパする男の気持ちも分からはないが。高校生が中学生をナンパするってどうよ？
というか

「オロオロしてないで断れよ……。」

そんなんじゃない相手のペースに持ってかれるぞ。

まあ、鳴海市って言う飛躍的治安のいい街でバニングスっていう防波堤というか、用心棒というか、番犬と一緒にいたらそんな経験なんてほとんど無いだろうけどな。

仕方ない。面倒は起こしたくないし、彼女には悪いがちょっと一役やっってもらうか。

俺は月村さんに向かって再び歩みを進める。

そして彼女との距離が5メートル程に縮まった所で

「すずか!!!」

【月村さん】という苗字での呼び名ではなく下の【すずか】という彼女が生涯共にする名を男達にも聞こえるように呼んだ。

えっと、私は今とても困ってます。

目の前にいるのは私よりも頭二つ分程背の高い男の人が二人。年齢的からして高校生なんでしょうが、その人達がいきなり私に話し掛けてきたんです。

これはおそらくナンパなんでしょうけど、こういった時はどうすればいいのか、私にはわからないでいます。

鳴海市にいるときはアリサちゃんやはやてちゃんのような人を含めて複数で行動する事が多い為にこういった事はあまりなかったからナンパという行動の存在は知っているけど、その対処法を私は知らないんです。

とりあえず私は

『だ、誰でもいいから助けて〜!』

心の中でSOSを出しました。

そんな時

「すずか!」

私の名前を呼ぶ声がしました。

その声は最近になって聞き慣れた声で、その主は私の親友が付け狙

う人物のモノ。

名前を呼ばれると同時に私と男の人達の間割り込むようにして入ってきたクラスメートの男の子。

「立花君！」

「悪いな。待ち合わせの時間より遅れた。」

この時の彼の発言に私は違和感を覚える。

待ち合わせ？はぐれた私を探しに来たんじゃないの？

そう思った時彼の唇が微かに動いた。

オレニアワセロ。アト、ウデニダキツケ。ハヤク！！

そう言われて察した私は慌てて腕に抱きついた。多分これは幼なじみの待ち合わせといったシチュエーションなんだと思います。腕に抱きつかせるのは私が怯えているといった役を演じる為でしょう。

「ううん。待ったと言っても10分ぐらいだから大丈夫だよ」

だから私は少しだけ怯えていたという感じを男の人達に印象付けるように振る舞う。

それを確認した立花君。

そんな私の様子を見て軽く安堵の溜め息をつくと男の人達に向けてホテルで見せたあの睨みを見せました。

途端に真夏の気温だったこの空気が真冬の気温まで下がる。

彼の視る者を凍り付かせるような視線。最初ホテルで体験した時は

普通の人でもこういう人がいるんだと思った。
正直言つて怖い。

『な、なんだよお前は…。お前はこの子のなんだ？』

彼が睨みつける男性二人の内の一人がやつとの事で口を開く。
けどどこかその口調は弱々しく。彼の気迫に気圧されたというのが分かる。

「コイツは俺の女ですがなにか？」

……………え？

今、彼は何と言つたのでしょうか？

コイツハオレノオンナ？

え、ええええ！？

「そ、そうか、悪かつたな」

「いえ、では俺達はもう行きますんで失礼します」

彼の発言に顔を真っ赤にした私。

そんな事もお構いなしに話しを切り上げた彼は腕に抱き付く私を引きその場を後にしました。

小さなトラブルから逃れた私は立花君に連れられて、メインストーリーの隣にある海辺の通りに来ています。

ちなみに私の顔は未だに少し赤いです。

先程よりは落ち着いたものの、彼の発言がまだ耳に残っています。

トラブルから逃れる為の役作りとして言ったセリフなんでしょうけど、あの時の言葉は、私の予想をの斜め上を行くものでした。

てっきり私は仲のいい幼なじみという設定だと思ってたんですよ！？それが恋人という設定とは思いませんでした。

そんな事を思いつつ隣にいる私より身長の高い男の子の顔を見上げる。

「さて、二人はどこにいるかなつと…」

けど、この男の子は至って普通。

こっちの通りにいるであろうアリサちゃんと司さんの姿を探している。

なんなのでしょう？少しだけムツとききました。

「立花君。さっきのセリフは冗談でも彼女でもない女の子に言っちゃダメなんだよ？」

だから謝罪を要求します。

「ん？そついやそつだな。謝るのが遅れた。理由はともあれ悪かったな、不快な気分になんてさせて」

苦笑しつつも謝る彼。

別に不快には思っていないのだけどなんとなく謝罪を求めた私。とりあえずは笑顔で許す事にする事にします。なんですけど

「無罪放免そうそう悪いんだが……。とりあえず、離れないか？」

「え？」

そう言われて私は視線を落とす。

視線の先には立花君の腕。そしてその腕に抱きついている私の腕。

「う、ううううめんなさい！！」

「いや、別に謝られる程の事じゃないんだが」

慌てて離れた私は再び顔を赤くして彼に頭を下げる。

もしかしてずっと抱きついてたのかな！？ようやく落ち着いたのにまた顔に血が登ってしまった。

「あ、あはは！ごめんね！わ、私のことは気にしなくて

ここで私は周囲の異変に気づいた。

立花君の時と同じ、いやそれ以上の気温の低下。

視線の先にはジツとこちらを見ている私の親友。その視線はものす

ごく冷たくて、魅入られた私は心臓を掴まれたかのような錯覚に陥った。

「
」

彼女の唇が微かに動く。

シンジテタノニ…

瞬間。私は彼女とは逆方向に全力で走り出した。

え〜と……。

皆様大変お待たせしました。

第2回『リアル鬼ごっこ』

スタートです!!

【第二幕】九話『最初の思い出編・9です』（後書き）

次回第2回リアル鬼ごっこ開催します。

親友から逃げ惑う私

親友を追う私

青い渚を背に私は恐怖に駆られ

私は己の闇に身を任す

第2回リアル鬼ごっこ

始まります

とつかアリスちゃんって普通の人だったよね!?

(誤字修正しました。)

常夏の海辺を駆ける二人の幼なじみの少女。

駆け抜ける景色、清々しい日差しが二人を照らす。

この光景はとても微笑ましく思えるでしょう。

「待ちなさいすずかあああああああ!!」

「イヤアアアアアアアアアア!!」

こんなシチュエーションでなければ

〱第2回リアル鬼ごっこin沖縄〱

リアル鬼役：アリサ・バニングス

リアル追われ役：月村すずか

敗北条件：リアル鬼役によるリアル追われ役殲滅

勝利条件：リアル追われ役によるリアル鬼役からの生還

えっと、只今私月村すずかは海辺の街を全力で走っています。理由は前話の巻末であった通りに親友のアリサ・バニングスから逃げている訳でありまして。先程アリサちゃんを見た瞬間、鳴海の守護者感というか夜の一族の血が訴えたといいますでしょうか。

とりあえず生存本能が『逃げる』と叫びまして、脊髄反射レベルでの逃走を試みた次第であります。

そして私は気付きました。

思わず【全力】を出してしまったという事に……。

私は鳴海を守護する月村家の守護者。夜の一族とも【裏】の世界では呼ばれている家系の娘。

今は私情で守護者の任からは離れてますが一族の特徴の一つである身体能力は普通の人間とは比べ物にならないモノを持っています。

だから私は普段から全力の30%以下の力で体育等をこなしているのですが

今の脊髄反射での逃走で全力を出してしまいました。

立花君はもちろんアリスちゃんも驚いた事でしょう。

多分その場で呆然と立ち尽くしているはず。

『どうしよう…。』

心の底から湧き上がる悲しみの感情。

できる事ならこのままどこかへ逃げて、そのまま行方をくらましたい。けど親友という存在が私を繋ぎ止めている。

異常な私を目の当たりにして親友はどんな【顔】をしているのだろうか？

そう思っただけスピードを緩めた私はチラッと後ろを振り向いてみました。

「待ちなさいすずかあああああああ！！」

【鬼】がいました。

直ぐに緩めたスピードを再びトップまであげての全力疾走。
周りの景色が矢のように前から後ろに飛び交っていく。
なんで私を追いかけてきているのでしょうか？

「じゃなくて！」

なんで私の全力についてこれてるの!？

アリサちゃんは普通の女子中学生だよね!？普通の人間だったよね!？

それがなんで異常な私についてこれているの!？

それに顔がものすごい怖いよアリサちゃん!!

思わず【鬼】なんて比喻使っちゃう程怖いよアリサちゃん!!

「大人しく取られ（殺られ）なさいすずか!!」

「ソレ【親友】に向ける言葉じゃないよね!？」

「なにいつてるの!私達【友達】でしょ!!!」

哀れ私。たった今、【親友】から【友達】にランクを下げられてしまいました。

けどそれよりも大きいのは背後から迫る絶対的な恐怖。

「イヤアアアアアアアアアアアア!!!!」

あまりの恐怖に、丁度通りかかった海の家にある貸し出しのパラソルを彼女に投擲。一本一本が矢の如く、槍のごとく弾幕を作り出し彼女に襲い掛かる。

「舐めるなあああ!!」

しかし、あろうことか彼女は最初の一本で私が張った弾幕を弾き飛ばした。

それもがむしゃらに弾き飛ばしたのではなく、最初の一本を巧みに操り優雅に、かつ力強く、一つの演舞を舞うように弾いているのだ。ここでまた私は驚きに目を見開き呆然としてしまう。

そしてコレが私の一番の隙となった。

「取った!!」

5メートルの距離を一步で詰めた彼女。手に持つパラソルを天に向かって振り上げる。私は『信じられない』光景を目の当たりにした事により身体が硬直してしまう。

「サヨナラ……」

そしてそんな私に向けてパラソルは振り下ろされた。

全力疾走する私は、5メートル程前で同じく全力疾走している幼なじみの少女の名前を叫ぶ。

私が見たのは彼の腕に抱きついていた彼女の姿。

それはどこか一つの絵のようになっていて元から彼女がそこにいたように思わせていた。

そして彼はそんな彼女に対して私に見せない顔をしていた。

そんな時心の底から湧き上がる黒い影。

それに身を任せ私は駆ける。

【友】と書いて【好敵手】！

【好敵手】と書いて【ライバル】！

【ライバル】と書いて【敵】！

【敵】と書いて【敵】と書く！！

敵は殲滅しなければならない。

それが例え幼なじみであろうとも。

それが例え友であろうとも。

それが例え親友であろうとも。

彼は渡さない。

絶対に渡さない。

彼の側にいていいのはお前なんかじゃない。

彼の側にいていいのは私だ。

私は彼に一生をかけて償わなければいけないのだから!!

「イヤアアアアアアアアア!!」

そんな私に向かって彼女が投擲してきたのは海の家で貸し出として置かれているパラソル。

その一本一本が矢のごとく、弾丸のごとく私に向かってくる。やるわねずか!けど!!

「舐めるなああ!!」

その程度で私を落とせると思う無かれ！！

立ち止まり一番最初に飛んできたパラソルを受け止め、二番目に飛んできた二本を横一閃で弾く。

次に飛んでくる四本の内二本を弾く事で残りの二本巻き込み防ぎきる！！

手にしているパラソルを槍の如く巧みに扱う。弾いた数15本

そしてその光景に呆然とする我が友。

その一瞬の隙を私は逃さない。

脚に力を込め一步で間合いを詰め、右手でパラソルを持ち天に向け掲げた後に一言

「サヨナラ……」

私はパラソルを振り下ろした。

「……………え？」

けどそれは私達の間に入った男の子によって阻まれた。私が振り下ろしたパラソルはその男の子の額を捉えそこで止まっている。

パラソルの影から見えるのは黒い瞳、そして冷たい眼差し。

それに魅入られた時私の中の黒い影は一瞬にして奥底へと引っ込んだ。

「あ、あ……………」

手が震える。口から出る声も震えていた。ゆっくりとパラソルを掴む握力が抜けていき、支えを失ったパラソルは重力に引かれ地面へと落ちていった。

「い……………や……………」

そしてパラソルの影から瞳を覗かせていた人物の顔が私の視界に入る。

「イヤ……………」

それは黒い髪、黒い瞳の男の子。

「……………」

更新がおそくなってしまい申し訳ありません。

基本週1ペースでリアル鬼ごっここと伝説の剣を更新してますがそれも調子に左右されまちまちとなっています。

それでもよろしかったら今後ともご愛読よろしく申し上げます。

さて、今話で二幕の最終話。

ジャンルにはアリサも普通の人と書いてますが。

書いていて『アリサも人外じゃね?』と思った次第。

まあ、そこは『歪んだ愛が彼女を強くする』ということですのでよろしく
お願いします。

【基本】ノーマル(魔法や魔的スキル等を持たない)は立花とアリサだけのはずですのでw
後のキャラは……うん、魔的になりますね

【第三幕】一話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

ゴールデンウィークではトラブルに見まわれ

私は彼を傷付けてしまった。

俺の額に伝う一筋の“朱”

私はそれを見て悶え苦しむ。

ホシイ、ソノ朱ガホシイ

コレは恋？

コレは欲求？

けど、そのどれも私には許されない。

私はみんなとは

違うのだから

「この度は本当に申し訳ありませんでした」

隣で母、六道 司が頭を下げる。それに合わせて俺も頭を下げる。

ここは鳴海市にあるバニングス邸の屋敷。

その応接室で俺達親子はこの屋敷の主、デビッド・バニングスに謝罪している。

理由は彼の一人娘であるアリサ・バニングスについてである。

あの時、俺の額を殴った後のバニングスは狂気の声を立てて気絶した。

その後、母さんが来て彼女をホテルまで運んだのだが一向に目を覚まさない。

急遽視察は中止、自家用機を手配した俺達は直ぐに鳴海市にへと戻ったのだ。

「こちらこそ申し訳ありません。ウチの娘が六道さんのお仕事の邪魔をした上……」

バニングスさんが俺を見る。視線の先は額に巻かれた包帯。

コレはあの時、月村さんをかばった時にできた傷。裂傷はしたが幸いに脳内には異常がなかった。

「そちらの件につきましては問題ありませんわ。今回の事について非があるのは私共です」

「私の事もお構いなく。コレは私自身が勝手に負った傷ですので…」

「いや、ここは謝らせてくれ。本当に申し訳なかった」

再び頭を下げるバニングスさん。

母さんは彼に頭を上げさせると娘の方はどうしているかと尋ねる。

「鮫島。アリサはどうしている？」

「ハイ。先程お部屋に伺った所、既に気がついていているようでした。しかし、『今は誰とも会いたくない』との事で」

どうやらバニングスは部屋に籠もっていてでてくる気がないらしい。母さんは彼女に一目会っておきたそうだったが本人が会いたくないなら、本人の意志を尊重するべきである。

俺達二人は次に月村邸へと向かうべくバニングス邸を後にする。デビッドさんと別れる際に俺は鮫島さんに伝言を頼んだ。

「俺は気にしてない」

と

「……………」

窓の中から見える外の景色。

今、門の前から走り去って行った5台の黒いベンツ。

アレには私が愛するべき人が乗っている。けど今の私は彼の前に出たくない。

彼の前に出るのが怖い。

私はまた彼を

「アリサお嬢様」

木でできた扉を叩くノックの音がこの静かな部屋に響いた。思わず肩が震えたが鮫島だと分かったら直ぐに震えは収まった。

「なに？」

「六道立花様から言伝がございます。『俺は気にしてない』と」

「そう……………」

立花からの伝言を聞いた後、私はベッドに身を投げ出し膝を抱えて丸くなる。

「怖いのも……………」

私以外誰もいないこの部屋に小さく響く声。

立花は気にしていないっていうけどそれはアナタだけじゃない……。

私はいつも締め付けられそうに苦しくて、怖いんだよ……。

「……………」

私、月村すずかは自室にあるベッド。

そこで横になつている私は今まで自分の欲望と戦っていた。

「やっと落ち着いた……………」

脳裏に過ぎるは赤い一滴の血液。

あの時私は立花君が庇ってくれたにもかかわらず彼の額から流れる血を見た瞬間夜の一族としての吸血衝動に駆られてしまったのだ。頭の中を

血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ
血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ
血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ
血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ血ガホシイ

と欲望が己の理性を押し潰そうと溢れ出す。

その感情がとても怖くて、それに身を任せたら一瞬で今までが崩れ去ってしまう。

途中何度も意識が飛びそうになった。
けど必死に我慢した。

そして今は落ち着いたのでこうして部屋で休んでいるのである。

「すずかちゃん」

ノックと共に私専属のメイド【ファリン・K・エアリヒカイト】の声が扉の反対側から部屋の中に響く。
その声に答えるように私は身体を起こすと未だに気だるい足取りで扉まであるきそれを開け放つ。

「なに？」

「六道様がお見えになられています。すずかちゃんもお顔を出された方がいいかと」

立花君と司さんが来てるんだ…。
うん、ファリンの言うとおり顔ぐらいいは出さないとダメだね。
お仕事なのに迷惑かけたんだから。

「うん、わかった。着替えてから行くからちょっとだけ待っていてくれる？」

そう言った後、私は部屋の中に戻ると手早く着替えファリンと一緒に六道親子がいる応接室へと向かった。

道中、私は何時も通りの表情を作る。

これは私が被り慣れた仮面。

鳴海の守護者、夜の一族、吸血鬼としての自分を隠す為の仮面。

応接室に着いたの後私は軽く深呼吸をして扉をノック。

「お姉ちゃん、すずかです。」

扉の奥にいるであろう私の姉、月村忍に自分の到着を告げる。

「入りなさいすずか」

そして姉からの入室の指示を受け、扉を開く。

ドアの隙間から立花君の顔が見えた時。

ドクンッ

私の中の吸血鬼が再び暴れ出した。

「ウチのすずかが本当に申し訳ありません。」

目の前にいるのは我が月村重工一番の取引相手である六道グループ会長とその息子である本社代表の二人。

対峙しているのは月村の当主であり月村重工社長令嬢の私、月村 忍。

「気になさらないでくださいな。今回の件につきましては保護者として監督不行き届きである私の責任でもあるのですから」

ソファーに座りながらのほほんと笑顔を見せる六道グループ会長、六道 司。

最初彼女が我が家に来た時はかなり驚いた。

そして顔を合わせるやいなやいきなり頭を下げだしたのだ。

私は昨晚すずかになにがあったのかと聞いたのだが自分のせいで六道さんのお仕事の邪魔をしてしまったと言っていた。

そして今日、私達月村側から謝罪に赴こうと思ったのだが先にあちら側が来てしまい現在に至る。

「立花君もごめんなさい。額の傷は大丈夫？」

私少し気まずそうに様子を見る少年。六道グループの次期会長と名高い六道 司の一人息子、六道立花。

すずかと同じ中学2年だが最近では経済界の皇子と喚ばれつつある少年だ。

とてもじゃないが年相応の少年に見えない所があり、そんな所がちよっとだけ恭也と似ていたりして私的にはかわいく思えたり。

「ホラ、すずかも」

「ご、ごめんなさい立花君。私のせいでお仕事の邪魔ばかりか怪我までさせちゃって」

そして隣で頭を下げる我が妹。

「いえ、私の事は気になさらないでください。コレは我が勝手に負った傷ですから」

私達の謝罪に気にしなくていいと言い張る少年。

この子精神年齢何歳かしら？と思った時さすがの様子に気づいた。

少し顔が紅潮しており良く見なければ分からないが冷や汗をかいていた。

そして手を必死に握りしめているのが、“何かに耐えている”という印象を感じた。

『すずか？』

そんな妹に内心で首を傾げつつも様子を伺う私。

それでも原因が解らないまま時間は過ぎていき、六道親子が帰られる際は私とすずか、ノエルとファリンでお見送りをした。

目の前では5台のベンツが走り去っていく。

そしてそれが私達の視界から消えた途端……。

「すずかお嬢様!？」

私の隣ですずかがその場にうずくまってしまった。

ゴールデンウィークの青空の下、響くのはメイドの叫び声。直ぐにメイドの二人にすずかを部屋に運ばせて看病させた。

その日の夜。

「もう体調はよさそうね。お昼のことなんだけど一体どうしたの？」

私はすずかに昼間の事を問いたです。

返答はこうだ。

立花君の顔を見た瞬間、再び吸血衝動が起きてしまった。けど、あの場で問題を起こす訳にはいかないので我慢してたと。その話を聞いて私はある疑問に駆られた。

『血を見てないのに吸血衝動に駆られた？』

普段の私達なら有り得ない事である。

それから一人で書斎にこもり長考したのちある結論に行き着いた。

『……………もしかして』

直ぐに鳴海の守護者として、夜の一族の長としての私は“六道”に對して探りを入れる事にした。

【第三幕】一話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

更新が遅くなり申し訳ありません。

【第三幕】「二話」とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸

苦しい

アツい

渴く

誰か

この渴きを

潤して

【第三幕】二話』とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸

『六道君こんにちは。今日も遅いんだね』

「まあな……」

『サリさん！今日もお美しい！』

「うきげんよう」

げんなりと挨拶をする俺、
礼儀正しく笑顔で挨拶するメイド。

ゴールデンウィークの連休明けて第一周目の金曜日。

今日、本社での会議があったので昼過ぎの登校となったのだが。

正直言つて眠たい。

それもそのはず。朝4時に自宅を出て6時に出社。7時から会議が始まり、11時に退社、午後1時前に学校へ重役出勤。

コレを今日で5日連続でやっているのだがハッキリ言つてこの身が壊れないのが不思議である。

母さん曰わくそれは『若さ』らしい。

まあ、それはいいとして

「バニングスの奴、今日も来てないのか？」

ゴールデンウィーク明けから起こっているクラスの異変。

このクラスで一番明るい（煩い）女子。

アリサ・バニングスが学校に来ていないのだ。

「うん、アリサちゃん今日も来てないんだ。今までこんな事なかったのに……」

目の前では高町さんが心配そうに空席になっている俺の隣の席を見つめる。

クラスメートや小等部からの付き合いがある人間、親友達の話によると真面目な彼女がこうして連続して休む事などなかった。体調を崩して休む事すらほとんどないらしい。

「すずかちゃんはなにか知らないかな？」

「ごめんね。ちょっと私もわからないかな」

そしてもう一人様子がおかしい人物がいる。

月村さんだ。

仲良し女の子5人組の中で一番俺と交流があるのがバニングスと彼女だがゴールデンウィーク明けから俺と距離を取っており、こちらの顔を見ようとしない。

先程の返事も自分の席で背を向けたまま軽く首だけを高町さんに向けて返事をするだけである。

「……………」

その光景を黙って見ている彼女。

少しの沈黙の後、俺の方に冷たい眼差しを向けた。

「六道君…、二人に何したの？」

「いや、俺は何もしてないから」

俺は何もしてない。寧ろされた側^{パニングスに}なんだけど。

けどそんな事はお構いなしにまだ睨んできている高町嬢。内心でため息を尽きつつ俺は次の授業が体育なので口に着替えの入った鞆をくわえる。

そして適当なクラスメイトと一緒に教室を出ていった。

「っ……………ぷはっ」

今は体育の時間。

私月村すずかは一人水飲み場で顔を洗っている。

後ろの方では男子がサッカーの試合をしており、女子はその観戦。所々、黄色い声が拳がっているけど私はそちらの方には振り向かない。

何故なら六道立花という男の子が視界に入った途端、吸血衝動が襲ってくるからである。

本来ならば1日休めば収まる筈のソレ。

けどあの日から1週間経った今でも彼を見ると彼の血が欲しくなる。

代わりに毎晩輸血用の血を飲んだけど全然渴きは潤わない。

寧ろ渴きが増すばかりだった。

「私どうしちゃったんだろ……」

小さく呟く。

しかし、返してくれる人物はいない。

その呟きは女の子達の黄色い声にかき消されていった。

「すずかちよつといいかな？」

黄色い歓声が響く中、私に歩み寄ってきた金色の長い髪を持つ女の子。

私達幼なじみ5人組の一人、フェイト・T・ハラウンである。

少し神妙な顔つきで話し掛けてくる彼女の顔を見て私はその理由を悟る。

「ゴールドンウィーク明けからアリサが学校に来てないよね。すずかもなんだか元気がないみたいだし、リツカとの旅行でなにかあったのかな？私で良ければ相談に乗るけど」

「立花君とは別になにもないよ。ありがとう。私は大丈夫だから」

嘘だ。

私は立花君を避けている。

彼を見るとこの渴きが増してしまうからだ。

それにその理由が彼の血を欲している。そして自分は吸血鬼である

となんて相談できる筈がない。

彼女は这个世界ではない別の世界の魔法使いであるが“人”である。対する私は这个世界の生物ではあるが“人ではない”夜の一族という名の“吸血鬼”だ。

小学校の時点で“人間から逸脱した身体能力”

“守護者としての力”

そして“吸血行為”

確かに見た目は普通の人間なのかもしれない。

けど、人間という入れ物にこれらの要素が入ってしまえばそれはもう人間ではない。只のバケモノだ。

「そう、なにかあったらいつでも言う。私達が相談に載るから」

立ち去る親友。

その背中に『ありがとう。けど私達は住む世界が違うんだ』と投げかけた。

この世は人が支配する“表”。魔が支配する“裏”に別れている。

フェイトちゃん達はみんな“表”で私は“裏”の住人なんだよ。だから相談なんてできないんだから。

「月村！！」

そんな時、ボーっとしている私に呼び掛ける体育の教科担任の叫び声。

えっ？と呆けた声を上げた後、頭に強い衝撃を受けて私の意識が闇に閉ざされた。

「……………」

保健室で俺はベッドで横になっているクラスメイトである女の子を見ている。

彼女は体育の時間、俺がクリアしたサッカーボールを頭部に受けて気絶してしまったのだ。

彼女の運搬はサリさんと幼なじみ5人組のである高町さん、ハラオウンさん、八神さんが勤めてくれた。

そして俺は彼女が目を覚ますまでの看病を言いつけられてここにいる。

サリさんがいないのは先程、母さんに呼び出されたから。だから今この空間にいるのは俺一人だ。

とりあえず彼女が起きるまでの間は自分のノートパソコンを使って日本史の予習、復習をする。

ちょうどいいのでこの場を使って今、俺が腕に付けているこの義手

についてプレゼンさせてもらおう。

さて、今回ご紹介するのは腕に障害を持つ方でもパソコンを扱えるようになるそんな義手です。

題して『パソコンできる君』

我が六道グループの技術の粋を集めて完成させたこの義手は脳から送られる電気信号を利用して操作を行うというモノ。

コレがあれば生活の幅がグッと広がること間違いナシ。

今、ご注文いただければ電気信号を読み取る為に腕に取り付ける万能コネクタの手術費。更にお食事時に使える『隠れ義手』シリーズもお付けします。

これだけのセットでなんとお値段50万円。50万円のお値段でご提供させていただきます。

お問い合わせは

「ん……………」

ん？どうやら月村さんが目を覚ましたようだ。

ゆっくりと身体を起こす彼女に俺は安堵の溜め息をつく。

「気がついたようだね月村さん」

が、声をかけた時、ビクリと肩を震わせた。そしてこちらを見る。

「さっきは申し訳ない。俺の蹴ったボールが」

ここで俺の言葉が遮られた。

俺を見据えるのは真紅に染まったブラッドレッドの朱。見た途端に全身を駆け巡る危険信号。

周囲の室温も冷たく感じた。

俺はとっさに駆け出す。

さて、第3回、リアル鬼ごっこのスター……

かぶちゅっ

【第三幕】『二話』とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸
やっぱり短いですね。

こんな作品でもよろしかったら感想をよろしくお願いします。

【第三幕】三話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

〓 第三回・リアルおにごっこ〓

in 聖祥大学付属中学校保健室

リアル鬼役：月村すずか（vampire）

リアル追われ役：六道立花（一般people）

220

【勝利条件】

リアル追われ役によるリアル鬼役からの逃亡成功。

【敗北条件】

リアル鬼役によるリアル追われ役の捕食。

血のように朱く染まったあの瞳。
魅入られた瞬間に背筋を駆け抜けた悪寒。
そして全身に感じた危険信号。

俺は駆け出す。

腕についている【パソコンでできる君】の存在など等に頭から抜け落ちて
いる。

一歩

机からパソコンが落ち、甲高い衝撃音がこの一室に響く。

一步

パソコンの引きずられる音、椅子が乱暴に倒れる音。

出口まであと二歩。

出口に手を伸ばす。

しかし、肩に感じた微かな痛み、甘い香り、男を惑わすような吐息。

かぶちゅっ

ちよ、ちよつとまて!!
まだ始まったばかりだぞ!?

開始二歩で捕獲って……

直後体制を崩した俺の意識は頭部を強打する事により意識を失った。

チュウ、チュパ……

美味しい……。

首筋からしたり落ちる美しい朱。

一口すする度に今までカラカラとなっていた渴きが潤されていく。

レロ……チユ……

ふと、私はこの朱の持ち主の顔を見上げる。

黒い髪の持ち主の彼。

なんでだろうか。彼が愛おしく思える。

彼と私は違うのに。こんなにも愛おしい。

沖縄での彼の言葉、彼の笑顔、ほんの一時であったが偽りといえども私は彼の彼女となった。

その時間がとても心地良いモノで一瞬だけど自分がバケモノだということ忘れる事ができた。

「私もお姉ちゃんみたいに……」

私の姉は人間の男性と恋仲にある。私はそれがとても羨ましい。

私もいつかあなりたい。そう思っている。

私が抱き付いているこの人は私を受け入れてくれるだろうか。人間ではない吸血鬼という名のバケモノであるこの私を……。

「お願い、私を受け入れて……」

愛玩するように寄り添う私は口元を首筋まで運ぶ。

首筋に浮かぶ朱い雫に再び口を付けようとして

「……………ッ！！！」

脳裏にアノ光景が浮かんだ。

周囲を山々で囲まれた地。天に輝く星空の下、闇の中で眩く輝く泉の側で私は同じ守護者である同い年の男の子に自分の牙を突き立てている。

私はかつてたった一人でこの地を守護していた少年の力になりたいと願い、契約の義を行った。

結果は私の暴走。自身では御仕切れない程の吸血衝動に襲われた私は彼に牙を突き立てた。

「い、いや……………」

あの時は純粹なる血への欲求に負けた。

今回はそれに恋愛感情が混じり込んでいる。

けど前も今も何も変わらない。

私はまたバケモノに成り下がってしまったのだ。

「お、お姉ちゃんに電話しないと……………」

震える手で携帯を取り出す。

朦朧とした意識の中で姉の番号を呼び出し繋げる。

「立花君。すずかちゃんの様子は………立花君？」

そして親友の女の子が再びこの部屋に来た時にはそこに私達の姿はなかった。

「アリサの事は頼んだぞ鮫島」

「かしこまりました旦那様」

皆様、お初にお目にかかります。私、バニングス家で執事を務めさせていただいております鮫島と申します。

只今はバニングス家の当主、デビッド様を会社にお送りした所でございます。

送り届けた後、私は鳴海市にあるバニングス邸に向けて車を走らせる。
道中私はバニングス夫妻の一人娘であるアリサお嬢様の事を思い浮かべる。

ゴールデンウィークのあの日、お嬢様が六道様との旅行から突然ご帰宅した後、一向にお部屋から出ようとはしません。
最初の2日は食事も取らずにお部屋に籠もりっぱなし。これは奥様の説得の末、食事だけは取っていただけのようになりました。
しかし、ゴールデンウィークが開けてもお嬢様はお部屋から出られない事はありません。

コレも六道司様の御子息、立花様と関係があるのででしょうか？
私は立花様がアリサお嬢様をお助けしたことしか知りません。
あのお気の強いお嬢様があそこまで彼に入れ込む理由が私には分からないのですから。

「ふう、今はお嬢様自身がご自分でなんとかするしかないか……ん？」

交差点に差し掛かった時目の前を横切る一台の黒い車。

この車には見覚えがあった。

アレは月村家の車だ。

来た道からして聖祥から来たという事が伺える。

すずかお嬢様が体調を崩してしまったのだろうか？

そう思った時後部座席に座る一人の少年が目に入った。

ぐったりとして、うつすらと白目を剥いており、どこか血の気が悪いような感じがする。そしてその彼に寄り添うようにしている月村

家ご令嬢、すずかお嬢様。

何故彼があのような状態で月村家の車に乗せられて（積みまれて）いるのだらう。

そんな事を考えていたが直ぐにその車は私の視界から消えていった。

「……………」

私、アリサ・バニングスは自室のベッドに腰かけ一人昼食を取っている。

昼食といってもほんの二三口で終わってしまい後は皆残してしまう。お陰で今の私は少しやつれてしまっている。

このままではいけない。

そんな事は分かってはいる分かってはいるけど部屋から出るのを怖がっている自分。学校へ行くのを怖がっている自分。立花に会つのを恐れている私が今ここにいます。

「アリサお嬢様。少し、お時間よろしいでしょうか？」

部屋の扉をノックした後、鮫島の声が扉の向こう側から響いてきた。少し感情が不安定になっている私は紅茶を一口飲み気分を落ち着けた後、それに対応する。

「なに？できればもうしばらく一人にしてほしいんだけど」

違うでしょアリサ！鮫島は私の事が心配でこうしてちよくちよく声を掛けてきてくれてるんでしょが！！
これじゃただの八つ当たりと変わりないじゃない……。

「申し訳ありません。先程旦那様を送り届けた際に月村様のお車を見かけまして……」

「すずかのとこの車？」

「そう、すずかはちゃんと学校に行ってるのね。さつきということは時間的にまだ学校の時間。多分体調を崩して早退したところだろう。」

「ことスポーツに関しては聖祥において女帝と名高い彼女だが、たまにこうして体調を崩す事がある。今回もその類だろう、そう思った。」

「六道様もご一緒にお乗りになられていました。」

「え？」

その言葉に私は手に持っていたティーカップを落としてしまった。

「お嬢様！？」

私の異変に気付いた鮫島が扉を叩き呼び掛けてくる。

ドンドンと木製の扉が音を立てる。が、私は呆然と床に落ち砕け散ったティーカップを見つめていてその音、彼の声は耳には入っていない。

さすがが立花を自分の家に招き入れた？

そういえば沖縄での二人はどこかいい雰囲気だった。私と彼とでは出来なかったあの雰囲気。

「すずか……………」

心の底から黒いモヤモヤが湧き上がってくる。

小さく、怨念じみた口調で敵（親友）の名を口にした私はベッドから腰を上げて扉へと向かう。

「アンタには渡さない……………。私は立花に一生償わなくちゃいけないんだから」

一歩、また一歩、ゆっくりと扉へ歩み寄りドアノブに手をかける。そこで私の動きは止まった。

また、立花を傷つけたらどうしよう。

脳裏に浮かんだのはゴールデンウィークでの光景。そして、あの時の光景。

フラッシュバックしてきた悪夢に手が震え出す。

行かないと……。
けど……怖い。

ドアノブが回せない。頭の中では回そうとしているが、身体が動くうとしてくれない。

「そうだ……義母様」

ここで私は彼女の存在を思い出す。
彼女なら自分の息子の事を理解してるはず。月村との婚約の話があれば彼女の耳に必ず入る。

もし、強制的な婚約なら彼女が必ず破談させる。

正直頭の中がぐちゃぐちゃだ。

もし、婚約が両家の公認だったら。という事もチラっっている。

私は携帯を取り出し六道グループ会長、六道 司に電話を掛ける。
嫌な妄想が次々と浮かんできてしだいに涙が溢れ出してきた。

コール音が繰り返されてく、この時の私にはとても長く感じた。
そして

『もしもし、アリサちゃん？』

一分程して繋がった頃には

「もしもし……。おがあさま……」

顔を泣き濡らしていた。

「……………」

空港のVIPルームで私はプライベート用の携帯を切る。
ついさっきまで話していたのはバニングスグループのご令嬢、アリサ・バニングスだ。
ゴールドエンウィーク半ばから今日まで学校はおるか部屋から出てきていないと息子に聞き、心配していたのだが今日、今し方彼女から電話が掛かってきたのだ。

出てそうそう耳に入ってきたのは私が聞き慣れたモノとは正反対と言える泣き声。

直ぐにどうしたのかを尋ねると立花の婚約について聞かれた。
そして、もしかしたら立花が月村の人間と婚約するかもしれないと彼女は言う。

それを聞いた時、私は一瞬呆けてしまった。
何をバカな事を言っているのだろうか。立花は最低でも18まで結婚は愚か、婚約すらする気はないと謳っているのだ。

あの子は父親に似てこういった事には筋をしつかり通す。
今まだこの業界に入って間もないのに婚約なんてするはずがない。

とりあえずは私は立花の婚約を認めてないし、そんな話しすらしない。もしあったとしても私が破談させると言って落ち着かせ電話を切った。

「さて、アリサちゃんにはああ言ったけど。月村、ね」

VIPルームで一人呟く私。

【月村との婚約】それが私には引っかけか。

もともと、月村家の婚約の話は表ではほとんど聞かない。

月村家は日本で有数の企業だが政略結婚の類や、誰かが婚約、結婚

を自分から行おうとしないのだ。

それが何故突然今、隠れながら、ウチの息子を……。

そんな時、脳裏に懐かしい記憶が浮かんだ。

「……有り得るわね」

おもむろに携帯を操作してメールを打ち込む。宛先は【御巫 五和】

【月詠 聖】。

送信した後、番号を呼び出し電話を掛ける。

20秒程たち、繋がって耳に入ってきたのは優しい口調で語りかけてくる女性の声。

それを聞いた後、小さく深呼吸をした私は返事を返した。

「お久しぶりです。“碌瞳家”当主、司でございます。少し、お時間よろしいでしょうか？巽 陽菜様」

【第三幕】三話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

感想お待ちしています。

【第三幕】四話』とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸

再び修正

「……………うん、わかった。今から向かうとなるとお婆さんのへりで大体1時間ぐらいかな？」

とある山奥に奇妙な街があった。

周囲を山々に囲まれたお椀状の盆地。

集落でもなく、村でもなく街。

一番近い隣町でも車で一時間はかかるこの地。

普通なら街にまで発展する筈のないこの地。

夕焼けに照らされ家や小さなビルのひかりが夜をつけていることは間違いなく街と言える。

名を【神楽坂】

その街から離れた山の峰にある平安時代を思わせる屋敷。

そこにある日本庭園で一人の少女は携帯の電話を切った。

「さて、一時的な管理はお婆さんの所に任ずとして、シラトラもお留守番よろしくね。」

足元で一匹の白いトラ模様の猫が鳴く。

その鳴き声が夕暮れの空に溶け込んだ後、けたたましいプロペラの回転音と強い風が庭園を包み込んだ。

少女が見上げる先には一機の黒いヘリコプター。

搭乗口が開かれて縄梯子が下ろされる。

彼女はなんの迷いもなくそれを掴んだ。

「せっかく街から出られるんだし善は急げ、待っててね“兄さん”」

俺はゆつくりと目を開ける。

先ず最初に飛び込んできたのは窓。

透明なガラスに見えるのは反射した明かり。ガラスの奥に見えるは美しい朱い満月。

周囲を星を散りばめた黒いコートを身にまとう事もあってその妖美な素顔を一層美しく引き立たせている。

もう夜か…。まいったな今日中に返答しなくちゃいけない案件があったのに。

頭の中で自分の失態を悔やむ。

くそ、これじゃ社長失格……って

「夜!？」

慌てて体を起こした俺。

同時に視界に入り込んできた見慣れぬ部屋。

立场上家具の知識もある事からこの部屋に置いてあるのは皆高級品、それも結構なアンティーク品という事がわかった。

存在しない腕で額を抑える。

なんで俺はここにいる？俺は確か学校の保健室にいて……

「おはよう六道立花君。」

混乱する意識の中、声を掛けられて視線を声の方向に向ける。

そこには俺につきまとう女の親友を大人にしたような女性がいた。刹那、すぐさま脳内から彼女のデータが引き出される。

「月村…忍」

「こんばんは。よく眠ってたわね。やっぱり世界有数の大企業の社長って忙しいのかしら？」

小さくクスクスと笑いながらこちらをからかっている女性は日本有数の企業である月村重工社長、月村忍。

一度だけ母さんに連れられた社交会で挨拶した記憶がある。

「お久しぶりです忍様。」

おそらくここは海鳴市にある月村の屋敷。

“如何なる理由”で俺がここにいるのかは分からないが、“彼女”に連れてこられたのは間違いない。

なにか裏があるのかは知らないが俺は先ず彼女を敵と認識して接する。

睨みを効かせる事で冷たい空気がこの個室を支配する。

客間と思われるこの空間は5月とは思えないくらい寒くなった。

母さんから教わった『相手に舐められない方法』“空間を支配する”。

まさかこんな時に使うとは思わなかった。

「あらあら、まだ中学生なのに対したモノね。」

再びクスクスと笑う。

思わず背筋に冷や汗が伝った。

まだ母さん程とはいかないが空間掌握術には自信があった。

世界的有名ブランドメーカーとの商談の時でも通用したのにこの女には全く通用してない。

「ありがとう、ちょっと涼しくなっただわ」

「おい忍。相手は中学生だからかうのもそこまでにしておけ」

後ろから聞こえてきた声に驚き振り向く。俺の丁度真後ろ、背後に立っていたのは黒い髪の男性。腰に二刀を携えた彼は静かにこちらを見据えていた。

「ちょっと恭也。アナタだって人のこと言えるの？恭也だって中学生相手に殺気立ってるじゃない」

前方に腰掛ける女はどうでもいい。それよりもなんでこんなに近くににいるのに気付かなかった？

焦る気持ちに加え、その瞳から放たれる殺気に心の底から恐怖を感じた。

しかし、それを面に出す訳にはいかない。必死に恐怖を底に押し込めて睨み返す。

「ほう……」

と一言。彼は何かに関心したかのように呟くとその殺気を引っ込めた後、月村忍の傍らへと移動した。

「立花君は紅茶は何か好き？」

「私はコーヒー派なのでお構いなく。」

「あらそう？まあいいわ。それじゃ本題に入りましょうか」

残念そうに苦笑する彼女。

しかし、次の瞬間には表情は一転。とても真剣なモノとなった。

「まずは改めて自己紹介。株式会社、月村重工代表、月村忍です。本日はこちらの勝手な都合で行ったこのような誘拐まがいな行動をお詫びします。」

静かに頭を下げる。

「それでは本日の無礼の理由をお教え致します。すずか」

「はい……」

返事後、客間に入ってきたクラスメートの女の子。

白いワンピース、白いカチューシャを身に付けた彼女は顔を俯きながら自身の姉の傍らに立つ。

そこで俺は意識を失った理由を思い出した。
俺は彼女に襲われたのだ。

「六道さんがここに連れてこられた理由は私の妹、すずかが理由です」

視界の端で月村すずかの肩がビクリと震えたのが見えた。

「ところで六道さんは“吸血鬼”というのを信じますか？」

「……………は？」

その単語を聞いて思わず呆けた声を出してしまった。

吸血鬼？ホラーのアレか？心臓に杭を打たれたら死ぬとか夜行性、
聖水、太陽の光が致命的とか

「月村一族、またの名を“夜の一族”。私とすずかは吸血鬼なの」

「……………ッ!!」

月村すずかが息が詰まる音が聞こえた。

彼女は両の手を握りしめる。そして耐えるように肩を震わせていた。

「あ、ご存知の通り太陽の光は大丈夫だし、聖水も効かないわよ。
心臓に杭を打ち込む以外の外傷で死ぬこともある。ただ普通の人と
違って治癒力が高かったり、超人的身体能力を持ったり異端的才能
を持って生まれる事もある。それら以外は普通の人間よ」

そんな事を公共に知れ渡ってしまったっては何体ものしれない生き物は軽蔑、迫害の対象になってしまう。最悪の場合はいい実験動物だし。

「なるほど……。で、今回の件につきましては私の口封じが目的ですか。私を殺すおつもりで？」

そしてこの事から考えるにたどり着く結論がコレ。

「そんな事しない!!」

けど俺の考えはクラスメートの女の子の叫び声によって否定された。彼女は涙を流しながらこちらを見つめ必死に訴えている。

「すまない月村さん。職業上悪いケースは最悪のパターンを考えるようにしてるんだ。君の言うとおり今の発言は軽率だったな、ごめん」

彼女の目が俺の出した最悪のパターンを除外してくれた。

それだけでもありがたい。正直クラスメートの前でこんな態度を取りたくない。

せめてもの詫びにと彼女だけには普段の口調で頭を下げる事にした。

「……こちらから教えておいてこういう事を言うのも悪いんだけど、立花君に選んでもらわなければならぬことがあるの。

誓いを立て、私たちの一族と友誼を結んでそのまま共に歩いていくか……。

それとも、私たちの一族の全てを忘れるか。誓いを立てる場合は、ウチの一族の誰か……。

今回の場合はさすがになるわけだけれど義兄妹でも夫婦でもいい、その契りを交わした上で、一族の上の方に縁者として話を通す事に

なるわね。

忘れる事を選んだ場合は、私たちの一族の『能力』を使って、立花君の記憶を封印します。

特に関係のない第三者に知られた場合は、問答せずに記憶を封印しているけれど、今までは特に問題無かったみたいだから、後遺症なんかは考えなくてもいいと思うわ」

なるほどな……。

異端的な能力持ちが生まれるから記憶の封印も可能か…。

「ところで“友誼”を選んだ場合、私は縁者になるという事ですが、別に問答で記憶を封印しても良かったのでは？もし私になにか裏があったら自分の首を絞めているようなモノですよ？」

「あー、それはさすがが申し出てきたのよ。」

「うう…。」

なにやら彼女はニヤニヤしながら自分の妹を見ている。隣に立つ男性は額に手を当て深い溜め息をついた。

「どつやらの子アナタに気があるみたいよ？」

瞬間、彼女の顔は茹で蛸のように真っ赤になった。

俺は訳が分からず首を傾げる。

俺、なにかしたか？

「吸血衝動には食欲による欲求と恋愛感情による欲求があつてすずかの場合は後者ね。過去にこういったケースがあつたらしいわ」

「それはいいとして例え彼女が私に好意を持っていたとしても私を縁者として迎え入れていいのですか？」

ハッキリ言っただけで不用心すぎる。

もし俺がどっかの組織と繋がっていたらどうするつもりだ？

「大丈夫よ。悪いけどアナタとアナタの会社について調べさせてもらったわ。一つ聞きたいことがあるけどなにも出なかったから」

それを聞いて俺は安堵の溜め息をついた。良かった。これで選択権が保証されていることが確認できた。

けど、それは勘違いだった。

「そう、何も出なかったのよ」

一瞬だけ緩めた睨み、俺の空間掌握術が一気に塗り替えられこの空間は月村忍という女に支配された。

「な、何も出なかったのなら…お、俺は白でしょ？」

口調も戻り声が震える。

「言葉の意味が解らない？文字通り“何も出なかった”の。企業とは皆、裏があるもの。

賄賂、不法取引、何一つ出でこなかった。

純白と言っただけいい程にね。

何をどうすればこんな綺麗な会社ができるのか解らない。

六道君…アナタ達何者？」

紫色から真紅に染まった彼女の瞳が俺を射抜く。

そんな事言ったって俺は何も知らない。

そう言おうとした時、

「……………え？」

視界が朱に染まった。

壁が、窓が、家具が、夜空が朱く光輝く。別に流血した訳ではない。異常な空間に閉じこめられた感じだ。

「アナタ何したの!？」

「俺は何もしてない!!」

本当に何もしてない。脱力感も何も感じない。こんなオカルトな力なんて持ってない。

「今、御巫と月詠って言った!？」

俺の言葉を聞いて月村忍は目を見開く。

頷く俺を確認した後再び食い入るように窓の外を見つめた後彼女の顔色はみるみるうちに青くなっていた。

「菱形に魚の尾鱗のような家紋、逆三角に十字の家紋!。ま、ま、間違いない…。アレは巫女御三家の御巫と月詠!！」

“巫女御三家”という単語に俺と月村さんは首を傾げる。

「互いのテリトリーには不可侵が暗黙の了解なのに……異家はなにしているの?しかも、なんで両家のトップが二人も出てきているのよ……。ずか!立花君をお願い!!ノエル!ファリン!応戦するわよ!!異家が気付いていない以上私達で応戦します!!」

「「はい(は、はい)!!」」

ノエル、ファリンという名のメイドに指示を出した後彼女は恭也という男性に寄りかかる。

「ごめん恭也。こっちのいざこざに巻き込んだみたい……。悪いけど手伝ってくれる?」

「俺の事は気にするな。付き合っただけさ」

10秒程だろうか抱き合う二人を沈黙が続く。
そして……

「いくぞ……」

「ええ！！」

窓を突き破り4人は飛び出して行った。

【第三幕】四話』とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸

本当に申し訳ありません

【第三幕】五話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

和の国に三人の巫女あり

彼の者、悪しき神を報じた者なり

封魔の御巫

破魔の月詠

退魔の

彼の者達総して巫女御三家と言ひ申す。

【第三幕】五話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

窓から飛び出した私、月村忍。

後から続くのは婚約者の高町恭也、メイドであり私が作り上げた自^オ動人形であるノエルとファリン。

このメンツでなら大抵のことなら正面きって対抗する事ができる。
しかし今回の相手は部が悪い。

【巫女御三家】

日本に存在する巫女家の中でも突出した三家といわれ、表と裏の均衡を司る防人。

そして目の前にいあの白い和服の女は結界術、縛霊術、封印術を司る家系の頂に君臨する。

巫女御三家一派、“封魔の御巫”当主
ミカナキ イツリ
御巫五和

その隣で車椅子に座った黒いスーツの女。長い黒髪をポニーテールした目つきの鋭いあの女は破魔術、斬霊術を司る家系の頂点。

巫女御三家一派、“破魔の月詠”当主
ツクミミヒツリ
月詠聖

ハッキリ言つて最悪だ。

ここにいる黒い和服とグラスンを掛けた女共は御巫家分家の巫女なのだろう。コイツ等だけならまだなんとかなる。けど宗家、それも当主が二人も出てくるとは……。

「恭也、ノエル、ファリン戦う時は一カ所に留まらないようにして、そして術者が印を組み終わるまでに仕留めること。いいわね」

「かしこまりました。でしたら私に手があります。しばしお時間を……」

ノエルの言葉に視線で頷いた私は一步前に出て当主である二人に頭を下げる

「月村家当主月村忍です。本日はどういったご用件でしょうか？こは我等海鳴の防人が守護する地。例え御三家当主のお二方でも巽家の許しが必要ならば介入は御法度という事をお分かりのはずですが？」

この問いに先ずは白い着物を着た女、御巫五和が柔らかな笑顔で頷いた。

そしてゆっくりと手を持ち上げ私達の飛び出した窓を指差す。

「貴女方の目的は彼ですか？」

彼女が指差したのは立花君だった。

隣にいるすずかはビクリと肩を震わせ彼を庇うように前に出る。

私にはそれが頬笑ましく思えた。

「申し訳ありませんが彼は我が月村家に縁者として来てもらわなければなりません」

視界に口元を抑えて驚く御巫家当主と微かに肩を震わせた月詠家当主。

「ですからこのままお引き取りを……。できないというのならば……」

ゆっくりと眼を見開く。

紫色の虹彩が真紅に染まり上がる。

私は妹のように海鳴を守護する防人の力はない。しかし、夜の一族としての力ならある。

すずか……。初めて恋をした貴女はその男の子と共にありたいと思ったのね。

だったら私は姉として貴女を守るわ。

「我らが夜の敵とみなし排除します!!」

夜の一族月村家当主、月村忍が!!

雄叫びと共にこの庭を埋め尽くすように白い煙幕が視界を包み込んだ。

「……………」

俺達のいる庭が煙幕に飲み込まれた瞬間、俺はその場から姿を消した。

周囲の景色がまるでスローモーションになったように遅くなされる。まあ、煙幕の中で上手く分からないが俺と周囲の時間はズレている。御剣の秘奥『神速』

「……………フツ」

煙幕に紛れ一息で複数の人間の意識を奪う。殺しはしない、義妹の前では殺しをしない。それが俺と彼女の約束。

一人、また一人と意識を刈り取っていく。

一人は首に手刀、小太刀の峰を打ち込む。

一人は手に飛針を打ち込み印を組めなくする。

淡々と敵を仕留める内に俺の脳裏に婚約者の顔が浮かんだ。

『忍……………無理はするなよ』

共に戦う彼女の身を安じるのだった

「フアリン！」

「ハイ御姉様！」

展開した煙幕の中で私は妹に呼び掛け戦闘を開始する。

同じく煙幕に吞まれた御巫家と呼ばれる家系の人間を一人一人駆逐する。

自動人形と言われる私達では恭也様のように気配を読んだり、『オートマタ神速』のような異常極まりない技を行使することはできない。

しかし、この煙幕は私達にとっては無意味に等しい。

行動を開始すると同時に視認モニターを熱感値サーモグラフィに切り替える。

そして、普通の人間では真似することのできない運動能力を発揮する。

一人一人、丁寧に気絶させていく。

「御姉様、今日ののすずかちゃんは見違える程しつかりしてますね」

「そつね。あの顔はお嬢様の契約の義以来ね。」

また、一人意識を奪った後私は一瞬だけ物思いにふける。

お嬢様がこの海鳴を護ると決意された日。先程の顔はあの時の顔だった。

結果としては自分の血に恐れる事になったのだが、今一度あの時の

ような決意を取り戻してくれた。

『あの少年には感謝しないといけないのかしら。だとしても正直言
つて『裏』の世に引き込んだのを後悔するわね……』

「フン!!」

一人、御巫家の巫女の頭を地に叩きつける。

「シッ!!」

一人、御巫家の巫女の首に手刀を叩き込む。

煙幕の中でも私は敵がどこにいるのかが分かる。

異端の血の匂い。

それが私を嗅ぎ取る私の鼻が私の目となる。

一人、巫女を捕らえた後、自分の眼前へと引き寄せる。

必死にもがいてはいるがその程度の力で夜の一族が特異能力の一つ
である我が怪力から逃れえはしない。

「貴方には恨みはないけど……」

そして、空いている左手でサングラスを取り払った後、彼女の瞳を
私の真紅の瞳が捉えた。

「……………!？」

途端に彼女は痙攣を起こしたように震えだした。そして口から泡を吹き出し、白目を剥き意識を失った。

「安心なさい……………。精神崩壊までは起こさせないから」

煙幕がゆっくりと晴れる中、冷たい口調で力なく地に倒れる女に言葉を投げかける。

『私と同じでなくてもあの子には普通の女の子として産まれてほしかった…。』

白い煙の隙間から朱い夜空が顔を出す。

私は小さく溜め息をついた後、一番異能の匂いが強い方向を見つめる。

そして、煙幕が晴れた。

「……………」

「……………ッ!？」

刹那、この空間が凍りついた。

いや、凍りついたように錯覚してしまったと言っていていいだろう。一瞬だが海の底に叩き落とされ海ごと凍らされたように感じた。この殺気はあの白服の女、御巫五和から発せられている。

「……………」

彼女は私の周囲を見渡す。

そこには彼女の部下である巫女達が地に伏している。彼女は己の部下を傷付けた私達に噴気しているのだ。冷たい殺気を全霊を持って振り払う。

後ろではノエルとフアリンが周囲に気を配る。

私の隣では恭也が二振りの小太刀を彼女に向け構える。

彼も気付いているだろう彼女の異常さに。

故になにか可笑しな事をしたら直ぐにでも彼女を斬り伏せるつもりなのだ。峰打ちではなくその刃でだ。

私達は互いに睨み合ったまま動かない。

血のような朱を思わせる真紅の瞳と滄海を思わせる蒼の瞳。

しばし沈黙がこの空間に流れた後、白い着物の女、御巫五和の口がゆっくりと動く。

この時私は彼女が口を開く事に対して全身で危機を感じた。

マズイ キケン アブナイ

けどそれは一人の少女によって阻止された。

何時この場にいたのかは分からない。すずかとほとんど年の変わらない少女が御巫五和を手で制していた。

またその隣には仮面を被った同じくすずかぐらいの男の子。

御巫五和を制した彼女は隣にいる女を制した後、彼女に笑顔を向ける。

それを見た後、女も彼女に優しい笑みを向けた。

「……………」

御巫五和が周囲の巫女達を見渡し右手をいろんな仕草で4回ほど動

かす。

同時に彼女達が倒れている巫女達を回収、私達と大体100メートル程の距離を取った。

何をする気？私達を纏めて結界に閉じ込める気？

けど術が完成するよりも速く動ける私達、それは分かっている筈だ。

「……………」

そんな事よりも気になる事があるあの娘は何者だ？

視線の先にはショートのデニムパンツ、赤いパーカージャケットを着た黒い髪黒い瞳の女の子。

私には彼女の正体が解らずにいた。

御巫と対等とは言わないが相当の家の娘？

そんな事を考えている時、ある事に気付いた。

そしてこちらに面妖な笑みを向ける正体不明の少女も気付いた要因だと言える。

「しまっ
」

月詠聖の姿がない。

私が言葉を言い終わる直前に感じた殺気、場所は私と恭也、ノエル

とファリンの間。

私^がが振り返るよりも速く彼女は動いた。

月詠流・三日月

【第三幕】五話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

誤字修正しました。

【第三幕】六話『とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸

更新が遅くなってすみません。

【第三幕】六話』とても“魔的”な事実。参戦させていただきました。月夜の“吸

朱く染まったこの空間。

振り抜かれた一筋の閃光。

そして響き渡る耳を衝くようなけたたましい金属同士の衝突音。

「きよ……恭也」

反応できたのは私の婚約者だけだった。

二振りの小太刀と拮抗する一本の野太刀。受け止めているのは御剣の剣士。

そして先程の三日月を思わせる一閃を放ったのは

「……………」

車椅子に座る月詠の頭首。

私の首まである長い太刀を口で加えている彼女に驚きを隠せない。

恭也は必死に止めており太刀が震えているがあの子は微かなブレもない。

【異常】

不意にその単語が頭をよぎった。

「ハアッ!」

婚約者の気合いと共に響く刀同士の弾き合う音。

それを合図に我に返った私はノエル達とその場を飛び退く。

不味い、直ぐに援護を！！

「忍お嬢様！！」

そう思った矢先にファリンが叫びを上げる。同時に響く乾いた銃声。私の顔の横を通り抜けた二つの風。目の前では二人が同時に風を弾いた。

「くっ！！」

後ろから走りくる二つの足音。

苦悶の声を上げながら迎撃の為に振り向く。

そして視界に捉えたのは両の手に小さな銃を携えた正体不明の女の子と刀を手にした仮面の少年。

すかさず少女に向かって拳を放つ。

が、その拳は彼女の顔を捉える寸前に上に飛ぶ事でかわされてしまった。

しまった。これではもう一人に。

そう思ったが少年はファリンに向かって切りかかって行った。

そして少女は私の頭上、逆さの状態でこちらを擬視している。

少女の真つ黒な瞳と私の朱い瞳が交わる。その時、彼女の瞳の異変に気付いた。

瞳に浮かぶ金色の梵字。

それを見た刹那。

・炎ノ式

私とノエル達の間には炎が立ち上がった。
直ぐに飛び退く私。

なんだあの術は！
御巫でも月詠でもないあの娘。直ぐに態勢を立ち直さなければ。

しかし、彼女は炎の向こう側から姿を見せない。
不信に思ったが後ろから向けられた視線にその訳を悟った。

「そう、私とタイムマンを張りたい訳ね…」

ボキボキと拳を鳴らす私の視線の先には不確かかつ大和撫子を思わせる
笑みをこちらに向ける御巫家頭首【御巫 五和】の姿があった。

朱い夜に響き渡る剣戟の衝突音。

交差するは二つの影。

一人は己の脚で立ち、一人は鉄の車で踊る。
俺は未だにこの状況を受け入れないでいた。
目の前の女は長い太刀を口で加え、車椅子を巧みに操り回転、あたかも踊るかのよう。

現状で言えば俺は守りに徹している。
いや、動揺により守りに徹するしかなくなっていると言った方がいいだろう。

次々に迫り来る剣戟の嵐をいなし、捌き、防ぐ。

正直言つて目の前にいる女が化け物に思えて仕方がない。

車椅子の車両片方を軸として回転しているのだが決して軸がブレたり転倒することもない。

もし彼女がその脚で立ちその手でその刃を振るっていたら一体どうなっていた事だろうか。

『いかな。戦闘中にいらぬ雑念を持つとは俺もまだまだか…』

もう叶わぬであろう全力の殺陣に一掬いの儂き願いを送り、俺は一度距離を取った。

「……………」

「……………」

互いの間に流れる沈黙。

睨み合う視線からほとばしる殺気。

安易に動けば再び衝突するのは明白。

だが、俺は彼女より先に動いた。

「永全不動八門一派・小太刀二刀御神真刀流 師範代。高町恭也です。」

取った行動は相手に対する礼。
言うな、不謹慎なのは分かってる。

「この度の立ち会い、このような形になってしまい残念です。」

しかし、これは全力を出せない彼女への手向けでもある。

脚に力を込める。

脳内のリミットを外しにかかる。

願わくば全力のあなたと戦い高かった

「師範代といえど未だ若輩の身ではありますが全力を出させていた
だきます」

これで決める……。

一日三回の制限がある【神速】

その二回目。

放つは御神の奥義。

目の前の女。月詠聖が瞬きをする瞬間、俺の姿は掻き消える。
10メートルの間合いを一瞬で詰めた後

御神真刀流・薙旋

奥義の一つ、抜刀からの高速四連撃を繰り出した。

破壊音と共に碎け散る車椅子。

地に落ちる破片がこの朱い夜に響く。

俺は駆け抜けた後振り抜いた姿勢のまま動かない。

いや、

動けないでいたのだ。

瞳孔が開き、息もまばら、背筋からは滝のように流れ落ちる汗。事後硬直にしては異常なくらい長い。

「ほう、「表」にもこれほどの手練れがいたか」

俺の後方、たつた今駆け抜けた場所に降り立つ。黒いスーツを身に纏い、黒く、長い髪をポニーテールにした女性はその場で立ち、腕を組み、小さな笑みを見せている。

「そついえばお前は名乗ったのに私の方がまだだったな。」

彼女は上空から降ってきた太刀を片手で受け止めると背筋を正しな

のった。

「巫女御三家一派、月詠家45代当主にして月詠流闘術・師範 月詠聖だ。」

堂々と名乗りを上げる彼女を余所に俺は一人焦っていた。

『馬鹿な！？神速と雑旋をああも簡単に！それに立てないのではなかったのか！？』

振り返り再び構えを取る。

対する彼女は男勝りの笑みで此方を一目したのち太刀を構える。

「見た目に惑わされている所を見るとやはり“表”といった事だな。5分だけだが私も出来る限りの力を出そう。」

切っ先を天に向けた構え、日本に健在する古流剣術『タイ捨流』と酷似した天の構え。

「“裏”の戦いに“表”の剣士である小僧がどこまでついてこれるか見せてもらおうぞ」

刹那、凄まじい音を上げて月詠の姿が消えた。

同時に左手から感じ取った殺気。

すかさず、そちらに向けて小太刀を振るう。

響く衝突音。

ここで俺は再び目を見開く。

ぶつかり合ったのは俺の小太刀と月詠の蹴り。鋼の刃は彼女が身に纏う黒いスーツにより阻まれその身に届くことはなかった。

「月詠流・鉄衣ツクリヨウ」

ニヤリと笑う彼女はすかさずその右手に持つ太刀を一閃させた。

月詠流・三日月

「チツ!!」

高速の一閃。

それはあたかも夜空に浮かぶ三日月を模したかのように美しく、鋭い。

舌打ちの後、迫り来る太刀を受け止める。防ぐのではなく利用する。太刀の軌道に従い自分も飛ぶ。

忍と同じくして怪物じみた怪力には適わない。故に取った行動。

再び10メートルの距離まで飛ばされた俺は彼女から決して目を離さない。

全神経を研ぎ澄ませ。

目に頼るな、己の感覚と経験を信じる。

もうあの女を身体障害者とは思えるな。

全ての攻撃が無に返ると思え。

それを踏まえた上で勝つ!!

宙で身体をひねり地に脚を付け、再び彼女に突っ込む。

互いに振りかぶる刃。

されがぶつかり合う瞬間、俺の小太刀は彼女の太刀をすり抜ける。

御神真刀流・貫

相手の攻撃を見切り、自分の攻撃を通す技術。
それはあたかも幻影のように相手の刃をすり抜けた。
刃が彼女の首を捉える。

そしてそのまま首を跳ね飛ばす。

月詠流・朧月

しかしそれも無に返ってしまふ。
斬った筈の首が朧のように消え、頭上から飛来する殺気。
すぐさまに回避した俺は小太刀を納刀、着地した彼女に向け右手で
鋼線を飛ばす。

「おお！面白い小技を使うな！」

感嘆の声を上げつつそれをかわす。
捉えたのはポニーテールの髪だけで20センチ程を切り落とすのみ
だった。

「む、除け切れなんだか」

彼女は髪を切られた事に少しだけだか残念そうにする。
その隙を逃がすまいと次いで飛針を8本放った。

「甘いわ。月詠流・はりがみ鍼髪」

迫り来る飛針を視認した後、右手を強く握り込む。
うっすら赤い光が手から漏れる。

そして指の間から10本の黒い極細の鍼が出てきた。
彼女はそれを投擲して俺の飛針を撃ち落とした。

おいおい…、あの女は全身武器なのか？

自分の髪を武器にするなんて聞いた事がない。

着ている服を防具にしたり、髪を硬質化させて武器として扱い。
神速にも反応するありさま。

終いには……

「月よ染まれ、朱く、燃えろ！！」

月詠流破魔ノ太刀・朱月

真っ赤に燃え上がる太刀を手にこちらへと迫ってきている。

上段よりの切り下ろし。

それをギリギリでかわす。地に叩きつけられた刃からほとばしる炎
が地を焼き、燃え上がる。

何でもアリだな。

距離を取った俺は内心で悪態をつく。

視線の先には炎中からゆっくりと歩み出てくる月詠家45代当主。

その姿は阿修羅を思わせ、見る者を恐怖させる。

「いやいや、君は凄いな。“表”に置いておくには勿体無い。どうだ？私の妹の婿にならないか？行かず後家だがまだ二十歳だ」

しかし、彼女は純粹にこの殺陣を楽しんでいるようで場に合わない冗談も吐いてきている。

「申し訳ないですが私には婚約者がいますので遠慮させていただきます」

もとより受けるつもりはないのだが右の方から殺気があるので丁重にお断りさせてもらおう。

それよりももうそろそろ5分だ。5分間だけ現状で戦えると言っていた。

「それは残念だ……。そういえばそろそろ時間か。では決着をつけようか？」

どうやら彼女も気づいているようで長い太刀の切っ先を後方に向け、片足を出し前屈みに構える。

「ハイ」

それに応じ、俺も構える。

そして、同時に駆け出した。

御神真刀流・閃

月詠流一刀・満月

【第三幕】六話『とても“魔的”な事実。参戦させていただきま。月夜の“吸

今回登場しました月詠 聖さんの説明を

【月詠 聖】

年齢：36才

職業：月詠会（極道）会長令嬢

月詠流闘術・師範

巫女御三家一派“月詠家”45代当主

武器：三尺八寸の野太刀『名称：月詠』

278

詳細：他サイトで書いていた作品に登場するチートな姐さん。

破魔を生業とする月詠家の45代当主。

今作品に登場する六道司の高校来の親友でクールビューティーをイメージして作った彼女はバトルマニア。

チート度合いとしては、車椅子で高町恭也との戦闘で肉迫し、着ている服を刃の通さない鋼鉄のように固くし、神速の如くスピードで動き、地を割る怪力を持つなど。

今幕以降、ほとんど出番はありませんが良かったら覚えてやってください。

ちなみに、彼女には20歳の妹と13歳の娘がいます。

【第三幕】七話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

見つめ合う朱月と蒼海。

片や血を求める夜の化身。

片や防人の巫女。

耳に入る音は炎が揺らめく音と剣戟、銃声。

それ以外は沈黙が両者の間を流れる。

私は目の前で笑みを浮かべながらこちらを見据える彼女を良く観察する。

巫女御三家一派、封魔の御巫。

その44代当主

御巫五和

私は少ないながらも彼女の情報を持っていた。

当時若干10歳にして当主の座についた御巫の神童。

これだけではあるが警戒するには十分な要素だ。

正々堂々な正攻法など使わない。卑怯呼ばわりされようがかまわない。奇襲や奇策全て使わなければ勝てない。

「……………」

しかし、こちらの考えていることなど興味がないとでもいうようにニコニコと笑っている彼女。

片手を胸にあてその後丁寧な礼をした。

同時に私は殴りかかった。

全力の右回りストレートを彼女に向けて叩きつけた。

文字通りの奇襲。

相手が目を離すと同時に打ち込んだ拳。

私は武家の人間ではない。

不意打ちを使い相手から批判されようが知ったことか。

「……………チツ」

が、私の拳はコイツに届く事はなかった。

拳は彼女を捉える寸前、なにかに阻まれて停滞している。

舌打ちの後直ぐに距離を取った私は御巫の巫女達を取り囲むこの空間を縦横無尽に駆け彼女の様子を窺う。

御巫はゆっくりと顔を上げて走りまわる私を見る。

胸に当てていた片手は印を結んでいた。

まず、その事に戦慄を覚えた。

基本的に術者は両手を使い印を組み上げる事により術を行使する。

しかし、彼女は片手だけで印を組む事ができるのだ。

片手を使わないだけでかなりのメリットがある。

明いている手がフリーになり別の術を行使する事が可能なのだ。

結界師にとってこれほどのメリットはない。

『まさか、片手で印を組む事が可能だなんて……。流石は御巫創家以来の神童といった所かしら』

さてこれからどう攻めるか考えていると彼女が動いた。

御巫封縛術・草縄

同時に私は驚愕した。

彼女が組み替えた印は一回のみ。

普通なら十数通りの印をくまなければいけないのだ。

一回のみでは術は発動しない。

しかし彼女はその一回で術を行使してきたのだ。

ざわめき始める雑草達。

そしてそれは幾十もの蔦を伸ばし私を捉えんとして襲いかかってきた。

「ちよっ！？なんてチート!!」

悪態をつきながらも捉えられる寸前にすぐさま蔦を爪で引き裂く。

そして再び全力で走り出す。

途中庭にある置き石等を投げつける。

彼女の眼前で見えない壁にはばまれた。

砕け散る石。

一瞬だが彼女の意識をそらす事ができた。すかさず一步で間合いを詰めた私は彼女の視線の位置に自分の眼を置く。

精神介入開始

先程他の巫女にも使った精神操作。
相手の精神に介入する特殊能力
互いに目が合ったが最後。

私の力から逃れるすべはない。

サア、クルワセテアゲル……。

正直言つてこの女の事は気に食わない。
命がけのやりとりをしているのにヘラヘラとしているのだ。
だから……

コワレロ

精神を曲げよう。

捻ろう

崩そう

壊そう

「ウン………?」

私の呆然とした声が小さく響く。

目の前には平然とした笑顔で私を見据える御巫当主。

信じられない。

精神操作にを受けた人間は平常ではいられない。

狂ったようにのた打ちまわり植物人間みたいになるのはずなのだ。

それなのにこの女は平然としている。

どれだけ凶太いというのだ。

そこで私はある事に気づいた。

私を追っていた草達が私を追ってきていない。

見れば左手の印が崩れている。

右手のも震えており、私の精神介入が完全にはないが効いているのが分かった。

ならば邪魔な結界を取り除いた上で取り押さえるべきだ。

直ぐに精神介入を再開した。

コイツの精神が凶太いのは解った。

けどそれも時間の問題である。

その証拠に右手の印も次第に崩れていき、それが完全に崩れたと同時に私は彼女に馬乗りになるよう押さえ込んだ。

「はあ……………。随分精神が凶太いのですね。私の精神介入にここまで耐えた人間は初めてですよ」

大きく息を吐き出し。

形だけではあるが嫌味を含めた賛辞を送る。

「では話していただきましょうか？ 貴女方御三家があの子を狙う理由。そしてあの子が何者なのかを」

その理由によつては私はあの子も守らなければならない。

なんせ大事な妹が自ら見つけた婚約者候補筆頭なのだ。

見た感じだがあの子は恭也と似通った所もあるし私達の事情もきつと受け入れてくれる。

そして受け入れたのち彼は妹を悪いようにはしないはずだ。

「……………」

私が押さえ込んだ巫女は笑顔ながらも困ったような表情をしている。そして諦めたようにおおきくため息を吐くと

捕らえよ

彼女は人のモノとは思えない程美しく澄んだ声で呟いた。
同時に私の四肢を何かが掴み取り引き剥がす。

捕らえよ闇よ、枷となれ

縛れ風よ、鎖とならん

煌めく月光、檻に成す

我が謳

御巫

応え封じなさい

【第三幕】七話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”編』

今回は短いです。

ほんとに申し訳ないです

とりあえずおりきやらをご紹介します。

水比奈 五和

御巫 五和

職業：水比奈グループ社長夫人兼御巫総業社長令嬢。

巫女御三家一派 封魔の“御巫”44代当主。

前話で紹介した月詠 聖とおなじくするチートなおばさん。

封魔士であり結界師の彼女は御巫家創立以来の神童。

片手印、一節による術の行使を行い。その強度は他の追隨を許さない。

精神も凶太いというチート。

いつもニコニコしてて基本アパー。

天才とバカは紙一重と親友にいわれている。

ちなみにこのキャラクターを作った際に協力していただいた他の作

者さんが裏設定を設けてくれました。

ヤンデレクイーンと……

内容はご想像にお任せします。

【第三幕】八話『とても“魔的”な事実。参戦させていただきま。月夜の“吸

誤字修正しました。

【第三幕】八話『とても“魔的”な事実。参戦させていただきませう。月夜の“吸

「ッー！」

目の前で火花が散る。

ぶつかり合った片刃の刀と両刃の西洋剣。月村の自動人形である私、オートマタファリン・K・エアリヒカイトは苦悶の声を漏らす。

目の前にいる仮面の少年。すずかお嬢様と同じぐらいの歳だろうか。私は彼との殺陣を繰り広げ、押されていた。

戦闘能力としては姉以上で接近戦に特化したこの身体。人間にはできない駆動率、出力、分析力を持っているのに押されている。

『この方はホントに人間ですか！？』

そう思ってしまう程だ。

袖の中から飛び出している剣を二本駆使しているが一向に攻めに転じれていない。

途中援護の為にもう一人と銃撃戦を繰り広げている遠距離戦に特化した姉が仮面の少年に向かって銃を撃つが“見えない壁”により阻れている。

術式の痕跡が解析できない。

全く見たことがなくデータベースにもない術。

そしてなによりこの少年は全く本気を出していない。
その事が私を焦らせていく。

「ッ!？」

それにより私の動きに隙ができるのは必然だった。

一瞬の隙を逃さなかった少年は光速の二連撃を繰り出し剣を弾き上げる。

腕と一体になっている事もあって当然ながら私は大きく腕を開きから空きも同然の身体を差し出してしまった。

すかさずそこに一太刀を入れてくる彼

『き、緊急回避行動!！』

スカートの中から噴き出した白い煙幕。

同時に全力で後方に飛び退く。

今のは危なかった。姉の方も援護できない程に追い込まれている。

早く体制を立て直さないと

小さな眩きと同時に煙幕の中から蒼く輝く斬撃が飛び出してきた。その数4撃。

『勝負をかけてきた！？』

すかさずそれを斬り払うが一撃一撃の重さに苦悶の表情をつくる。

天翔

四撃目を払った直後に腰に走る重い衝撃。
異常な速度で背後に回り込まれた私は腰に蹴りを入れられたのだ。
揺れる意識。微かに私の名前を叫ぶ姉の声が耳に入る。

294

トルネード・バインド

そして仕上げと言わんばかりに低空に蹴り飛ばされた私は小さな竜巻の枷によりその身を拘束された。
逆さに拘束された私の視界にはこちらへと突っ込んでくる仮面の少年。

彼は間合いに入ったと同時にその手に持つ刀で縦に一閃した。

「フアリンー!!」

妹が仮面の少年に蹴り飛ばされたと同時に私は叫んだ。

同じ自動人形オートマタである彼女は接近戦に特化しており人間とは次元の違うスペックを持っているのだ。

それがまるで赤子のように弄ばれている。

このままでは不味い、直ぐに援護しなくては!!

そう思い両手に持つP90の片方を少年に向ける。
しかし

・炎ノ式

足元から燃え上がった炎により私は援護ができない。

メイド服の一部だけ焼けてしまったが咄嗟の回避で直撃は避ける事ができた。

けど安心するのは速い。

妹が危機的状況にある今、直ぐに援護しなければならぬのだ。

一度は避けたものの今度は覚悟を決め、少年に銃口を向けた。

少女は無視する。

妹はやらせない、ぜったいに。

・封砂ノ式

しかしその覚悟も虚しく私の四肢は宙に舞い上がった砂の鎖により縛り上げられる。
もがくが全く動かない。
そうしてる間にも妹は風の枷に捕らわれてしまう。

「止めなさい！その子には手を出さないで！！」

仮面の少年に向けて叫ぶ。

しかし彼は容赦なくその手に持つ刀を振り下ろした。

やらせない！！

朱いこの空間に紫色の影が動いた。
私とファリンは同時に目を見開く。
振り下ろされた刀は少女の振り上げられた白く美しい脚によって止められていた。
この時初めて少年の動きが鈍った。
コレが彼の初めての隙となった。

「やああっ！！」

少女は彼の刀を持つ腕を掴む。
そして一族特有の怪力を使い呆然とその光景を見るもう一人の少女に投げつけた。

「ッ！！大丈夫！？」

「ああ……」

彼を受け止めた少女は紫色の髪の少女、私達姉妹の主、月村すずかを睨む。

その目はまるで仇をみるような眼差しだった。

私の眼下では姉妹メイドであるノエルとファリンが屋敷に侵入した人間達の二人と戦っている。

兄と姉はもうすでに抑えられてしまった。

助けに行きたい。けど傍らには私が恋する男の子がいる。

同時に戦う事への恐怖もある。

唇を噛み締める私。

「月村さん、行きたきや行けばいい」

そんな私に立花君は肩に手を乗せて笑いかけた。それを聞いた瞬間、私の枷が外れた。

瞳が真紅に染まり上がる。

ありがとう立花君。

ゆっくりと彼に振り向いた私はその頬に自分の唇で触れ窓から飛び出した。

空気の壁を肌で感じ朱い地面にふわりと着地する。

一番最初に目に入ったのは逆さの状態で風に拘束されているファリオンと彼女に迫る仮面の少年。

「させない」

地を踏みしめ全力で駆け出す。

ものの数歩で二人の間に入り込んだ私はハイキックの要領で振り下ろされた刀を止めた。

同時に彼の動きが一瞬だけ鈍る。

私はそれを見逃ささない。

腕を両手で掴み取り、ノエルと戦っている黒髪の女の子に向けて少年を投げ飛ばした。

「ッ!!!大丈夫!?!」

「ああ……」

黒髪の女の子は仮面の男の子を受け止めた後に私をまるで仇のように睨みつけてきた。

けど私だって負けじと朱い瞳で睨み返す。

「立花君はあなた達には渡さない。」

静かにかつ相手に届くように言い放つ。

義兄や姉、侍女の二人が抑えられた今、私にはもう勝機はないのかもしれない。

けど私はここで引く訳にはいかないのだ。

彼は私が初めて恋心を持った人で、もしかしたら彼は私を受け入れてくれるかもしれない人だから。

「黙れ、アンタなんかにあの人は渡さない……。今まで存在すら知らされず、会う事が許されなかった私の気持ちがお前に……」

彼女の周りの空気がざわめく、途端に私の肌がビリビリと痺れだした。

「！？待て！結花！！」

少年が豹変した彼女を制止するために声を上げた。

だけど彼女はそれを無視。

瞳に金色の梵字が浮かぶ。

碌瞳式

「お前なんかにわかるかあああああああああ……！！」

少女が雄叫びを上げた。

鳴神

視界が真っ白になる。

「どけ!!」

「え？」

そんな中、私は誰かに突き飛ばされた。

【第三幕】八話『とても“魔的”な事実。参戦させていただきませぬ。月夜の“吸

短くて申し訳ありません

【第三幕】最終話『なんとも“魔的”な事実。参戦してきた月夜の“吸血姫”館

ご指摘をうけました誤字を修正しました。

目を焼き尽くす光、耳を突き破る轟音の後、突然突き飛ばされた私は呆然と立っている。

今のは誰？

ふと、私が飛び出した窓を見てみた。

ガラスが割れたその窓の先には誰もいない。

アレ？

そこにいるはずの男の子の姿はない。

立花君はどこ？

そこにいるはずの立花君の姿はない。

次いで今煙が立ち上がっている私がいた場所を見た。

アノ場所に彼の姿はない。

「「すずか!!」」

拘束を解かれたであろう義兄と姉が私に駆け寄ってきた。けどもそれに反応することなく呆然と立ち上がる煙を見る。

「「すずかお嬢様!!」」

ノエルとファリンも私のもとへきた。

けど私はそんな事よりも私を突き飛ばした人物の方が気になった。

侵入者が私を助けるはずがない。身内の4人は拘束されていた。

「い……や……。」

そんなの分かりきった事だった。

私を突き飛ばしたのは

「いやあああああ!!」

立花君だ。

頭を抱えその場に座り込む。

現実を拒絶する悲鳴がこの朱い空間に響き渡った。

心の底から溢れ出す黒いカタマリ。

血走った目は呆然と立ち尽くす小娘を睨みつけた。

「こ……………ん……………」

青ざめた顔でアイツは何かを呟いたようだがそんな事はどうでもいい。

「あゝ ああああああ！！！！！」

お前が優しい彼を殺した！！

お前が私の大切な人を殺した！！

お前が私の初恋の人を殺した！！

文字通り鬼の形相で彼女に飛びかかる。

「止めなさいすずか！！」

「すずかお嬢様！！」

身内4人羽交い締めで私を抑える。

「殺す！クロス！殺す！クロス！クロス！クロス！殺す！クロス！クロス！
殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺す！殺してやる！！」

必死にもがく私。

必死に抑える身内4人。

そんな私達を余所に侵入者である水比奈五和と月詠聖は立花君の死体がある煙の中へと駆け込んでいった。

「立花君に触るな！触ったら殺すぞ！！」

これ以上彼に触れさせてなるものか！！

身内を引き渡した私は晴れゆく煙へと走る。

そして煙の合間に月詠聖のポニーテールが見えた。

爪をむき出し、牙を噛み締め、アノ女を引き剥がす為に手を伸ばす。彼に触れるヤツは殺す！！

「よかった……間に合った」

けどその手は彼女に触れる寸前に止まった。

二人の視線の先には地に横たわる立花に向けられていた。

あれだけの光、轟音、衝撃を受けてなお、彼は無傷だった。

え？立花君は無事なの？

「五和、お前の“御巫”がなかったら立花は死んでたな。私の脚では間に合わなかった……。」

水比奈五和に向けて月詠聖は安堵の溜め息をついた。

それに返すように彼女は小さく手を動かし答えている。おそらくあれは“手話”だ。

「安心しろ月村嬢。立花は無事だ。」

私を見て告げられた言葉。

それを聞いた途端、足の力が抜けてその場にへたり込んでしまった。

「達也！結花を連れて来い！立花は無事だ！！」

彼女は少年少女に呼びかける。

ふらつく足取りの黒髪の少女を連れてきた仮面の少年。

立花君の無事を確認した後、彼は大きく息を吐いた。

そして

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

少女は立花君の傍らで涙を流して泣き叫んだ。

そして……

「ウルサイ……」

顔をしかめてゆっくりと目を開けた彼。

存在しない手で耳を押さえ、この中で年長である水比奈五和と月詠
聖を睨みつけた。

「これはどういう事が説明してもらえますよね？五和“おばさん”、
聖“おばさん”」

「コレはどういう事だクソ婆あ……」

只今風通しの良くなった二階客間でソファーに座り、立花君はモニター越しに青筋を浮かべながら自分の母親へとガンを飛ばしています。

穏便に言うともモニター越し、ようするにテレビ電話を使って司さんと話しているのですが、そこには紳士的な態度など皆無です。

私はというと彼のとなりで目尻に涙をうかべ腕に抱きつきながら座っています。反対側には黒髪の女の子が同じく腕に抱きついて、未だに泣いている状態。

ソファーの裏には先程まで戦っていた7人が苦笑いを浮かべて立っています。

『婆あは聞き捨てならないけどまあいいわ……。今回その4人を寄越したのは月村からあなたを奪還する為よ。』

「司様、もしやあなたもこちら側の人間なのですか？」

お姉ちゃんが引きつった顔で司さんに問いかける。

その問いに対して突然雰囲気の変わった彼女は答えた。

『巫女御三家一派、退魔の碌瞳。46代当主“六道”改め、碌瞳司です。この度は我が同胞が世話になったようですね……』

冷たい口調で自分の素姓を告げた。

同時にお姉ちゃんは目を見開いて立花君を見ました。

「碌瞳？」

「アナタ、碌瞳本家の人間!？」

お姉ちゃんは立花君の服の襟を掴むと自分のもとに引き寄せました。とてもくるしそうです。かなりくるしそうです。

「巫女御三家ってなんですか!？俺も初めて聞きましたよ!！」

「お姉ちゃん落ち着いて!！」

話しによると、

巫女御三家は日本の巫女達の頂点に位置する三家で女性が当主となる家系だとか。

一応男性も退魔士、封魔士、破魔士として暗躍する事ができるのだが立花君は軽い靈感があるだけで他は人と変わりがない。

そこで司さんは立花君を“表”の世に置き、“裏”の世の事は隠匿したらしい。

簡単に言うと立花君は“碌瞳”の末席に名を連ねていない無関係者だという事らしいです。

ちなみにこの“表”と“裏”とは『人の住まう世』が“表”で『魍魎の類が住まう世』が“裏”である。

「まあ、俺が母さんの言う“裏”に関わると足手まといなのがが必至だし、その事を隠匿した理由もわかった。ついでにおばさん達も“裏”の住人だということもわかった」

「り、立花。そろそろいつもみたいに“姉さん”と呼んではくれま
いか？」

恭也さんに破壊された車椅子代わり、新調した車椅子に腰掛けた月
詠さんが引きつった笑顔を立花君にむけてます。

ついでに言つと水比奈さんも涙を浮かべて立花に合掌しながら頭を
下げてます。

「余所様に迷惑を掛けたおばさん達の事なんてしりません」

『ホントいつちゃんもひつちゃんもなに大人気なくドンパチやつて
んのよ。忍ちゃんも婚約者さんもごめんなさいね』

いつちゃんは五和さん、ひつちゃんは聖さんなのでしょうけど二人
とも先程の戦闘のような雰囲気はありません。

子犬のような雰囲気があります。

なんか聖さんのポニーテールが元氣のない子犬の尻尾に見えます。

現に恭也さんもお姉ちゃんも引きつった顔で頭を下げているのです。

「達也君もごめんなさい。守護者の勤めとはいえウチのいざこざに
まきこんじゃって」

「俺の事は気にしないでください。久しぶりに帰ってきて母から頼
まれた任務と思えばなんとありません」

“守護者”の単語に私はハツとなり仮面の少年を見る。

それに合わせて彼は仮面を外す。

目に入ったのは懐かしい顔。

海鳴の守護者、巽家の巽達也君だった。

私達、月村の人間は驚きの声を上げる。

小学校以来、ある事実によりこの世界から姿を消した彼が、一番最初、私が手伝ってあげたいと思った彼がそこにいたのだ。驚くなどという方が無理があった

「た、達也君どうして!？」

「知り合いか？」

立花君が首を傾げて聞いてきたので私は教えてあげた。

達也君、“巽達也”は海鳴という魔界を守護する人間であり私達同様“裏”に属する人間だという事を。

そして自分は守護者のなりぞこないだということ

「はじめましてだな。俺は巽達也。今代の“海鳴の守護者”だ。今回、碌瞳家主碌瞳司より君の奪還の依頼をそちらの三人が受け、鳴海の中での監視、護衛を母より任された者だ」

「……やっぱり婆あ共がグルになってたか。」

溜め息をつき、再び水比奈さんと月詠さんを睨みつける。

ビクリと肩を震わせたのちオロオロとした。

二人の視線はモニターに移る司さんに向けられていて、彼女に『助けて司!』^{ちゃん}と言っているようでした。

そんな二人に対して笑顔で応ずる彼女。

『甘んじて受けなさい。』

裏切られました。

「結花。そろそろ泣くのは止めて自己紹介したらどうだ？せつかく会えたんだ。この好機を逃すのか？」

裏切られた！？と絶望する二人。

立花君はもう二人の事は無視です。かく言う私も無視の状態です。なぜ立花君強奪にきた人達を構わないといけないのですか？

まあ、コレは置いておいて達也君が呼びかける『結花』という女の子。

彼に言われコクリと頷いた。彼女は立花君に向き直り、ソファの上に正座し前に指を重ね置くと

「み、巫女御三家一派“退魔の碌瞳”碌瞳結花。次期当主にして碌瞳司の娘であり、あなたの…六道立花の血の繋がった妹です。……兄さん」

刹那、時間が止まった。

「おいお袋…、今“兄さん”という単語が聞こえたのは気のせいかな？」

『気のせいではないわね』

……

「立花君！！私そんなこと聞いてないよ！？」

「俺だつて聞いてねえよ！！」

「そつえばお二人ともそっくりです！？」

一瞬にしてカオスと化したこの客間。

私を含めた月村側は身を乗り出し二人を見比べます。いきなりの事に結花ちゃんはビクリと肩を震わせる。

ていうかホントにそっくりです。今まで気づかなかったのが不思議なくらいそっくりです。

「こ、今年13になりました。」

「ん？という事は俺の一つ下か……。じゃなくて！おい婆あ！碌瞳の事は仕方ないとして俺に妹がいるなんて大事な事なんて黙ってた！？」

『そ、それについては私も反省してるわ。いずれ会わせるつもりだったにせよ結花に辛い思いをさせた事にも反省してます。ハイ……。あとその婆あは取り消してくれないかな？』

目が泳いでます。

そうですか。結花ちゃんは私達の一つ下の後輩ですか。

「隠匿するにしてもコレまで隠す必要があったのか！？コイツがかわいそうだとなんで今まで気づかなかった？」

「う、ごめんなさい兄さん。けど本当は碌瞳の決まりで16まで会うことは愚か、碌瞳が管理する“神楽坂市”から出ることもできなかったんだよ？だから母さんを責めないで……。」

「チツ……。」

涙目になりながら兄を宥める妹。

立花君はムスツとした表情で押し黙る。
内心はそんな掟知ったことか！とでも言いたいのでしょう。

けどここは妹に免じて黙ってやるといった感じで渋々黙ってくれた。
ここで私は彼女の心情について考えてみた。
存在しているのに自分の存在を身内に伝えてもらおう事ができない辛さ。

近くにいるのに会う事の許されない苦しさ。

そして、その人とは違う自分の異常さ。

そんなモノ13の女の子に持たせる苦痛ではない。
内心に小さな怒りが湧き上がる。

先程の戦闘の時に張り上げた叫びは彼女の心の声。

あの雷光は彼女の怒り。

今となれば私にもわかる気がする。せつかく会えた兄が取られそう
になっているのだ。

怒らないのも無理はなかった。

「結花ちゃん……ごめんなさい」

私は彼女に頭を下げた。

純粹に彼女に対する謝罪だ。

“裏”に彼を引き込んだ事と大事な兄を奪う事。

「い、いえ！私こそ本当にすみません。達也さんの監視下とはいえ
やりすぎちゃって！！」

私の態度にオロオロと慌てだす結花ちゃん。
そんな私達に小さく笑みを浮かべる皆。

よかった

さつきはとても怖くて当たりの激しい印象だったけど、本当はとても優しい子のようです。
うん。この子には好感が持てるし、いいお友達になれそう。

「あ、そういえばすずか。立花君の縁者の件はどうする？」

「兄さんは渡しません」

前言撤回です。この子は敵です。

というかお姉ちゃんもなんで空気を読まないんですか？

なんですかその“代わりに言っただげたわよ”って顔は。

それに は10代までです。

20代のお姉ちゃんにはもう遅いです。

ほら、恭也さんも引きつった顔してますよ？ところでノエルとファリンはなに目をキラキラさせているのでしょうか？

あと結花ちゃんうるさいよ？

「えっと司さんは構わないんですか？」

恐る恐る司さんを見る。

“裏”の人間に力のない“表”の息子をこれ以上関わらせるはずがないからだ。

けど彼女の表情は私が思っていたモノとは違った。

どこかいたずら思いついた子供みたいな顔。

楽しげに私を見た後言った。

『縁者については立花の意志しだいね。』

「母さん!？」

予想外の母の言葉に結花ちゃんは声を張り上げる。けどそれは母自身のお睨みによって制された。

『けどいいのかしら？月村は“裏”に住まう吸血鬼の一族。知ってしまったとはいえ、立花は“表”の人間よ?』

「私は構いません。この気持ちに嘘偽りはありません」

しっかりと彼女に返した後、私は立花君へと向き直る。

そして彼の目を見つめた後、言った。

「私は“裏”の世に住まう吸血鬼の一族。ここ海鳴の守護者になりそこねたバケモノです。」

私は立花君が好きです。」

顔が熱くなるのを感じた。

視線の先で立花君がジッとこちらを見ている。

彼を挟んだ視界の橋に結花ちゃんがものすごい形相で私を睨んでいますがもちろん無視します。

流れる長い沈黙。

時計の針の音だけが耳に響く。

そして彼が口を開けた。

「一つ聞きたいんだけど、月村さんは自分が吸血鬼だという事を気にしてるようだね」

「吸血鬼じゃ…ダメかな？」

やっぱりダメらしい。私は心の内で必死に涙をこらえる。

「ダメ以前に月村さんは普通とはかわりないと思う。」

どこが変わりないのか私にはわからなかった。

どこに定期的に血を摂取する人間がいるのだろうか。

どこに異常な怪力を持つ女の子がいるだろうか。

いるはずがない。こんなにも違うのに何故彼は私が皆と同じだといふのだろうか。

「確かに月村さんはものすごい怪力を持つてるかさもしれない。血を飲まないといけないのかもれない。けどそれは月村すずかという“人間”が持つオプシヨンみたいなモノだろ？そういうこと関係ナシに俺は君に好感が持てる。」

言われているウチに真っ赤になった顔がドンドン熱くなっていくのがわかった。

まるで告白されているかのような感覚（された事は何度もあります）が全て切り捨ててます（

「俺からしたら月村すずかは普通の可愛い女の子だよ」

そして“ボンツ”と煙を上げた私はへなへなと力が抜けてソファーになだれかかった。

うくん：例えるならチーズ？

「立花も男らしい事言うじゃないか」

月詠さんが笑いを浮かべながら口を挟んだ。

「言うのを忘れていたが御三家本家は妖怪や神との混血だ。月詠は妖怪・土蜘蛛。御巫は人魚。」

『碌瞳は天之御中主神の血を持っていると言われているわ』

「だそうだ。という事は俺もバケモノの系譜ということ。俺はこんな事、気にも止めない」

苦笑しつつ肩をすくめる。

「じゃ、じゃあ……」

「けど“今の”俺は結婚はおろか、婚約者や、恋人を作るつもりはない。縁者の件を受けてもいいがそれは“友”としてなのか“伴侶”としてなのかは俺自身まだ決められんな」

それでもいい。

こんな私を“普通の可愛い女の子”と言ってくれた。

こんな私を“受け入れて”くれた。

これほど嬉しい事などあるだろうか。
ポロポロとこぼれ落ちる涙を拭いつつ精一杯の笑顔で私は彼に

ありがとう

と伝えた。

月村邸を出てた俺達兄妹は聖姉さんと五和姉さんに送られ六道邸へと帰ってきた。

すっかり遅くなり時刻は12時前。

門の前で二人を見送った後屋敷へと歩き出す。あの話の後、“今代の守護者”と呼ばれる肩書きを持つ同い年の少年、巽達也と軽く話しをした。

どうやら月村さんは力を使う事にトラウマを持っているらしく、あの程度克服した今でも恐怖感には拭えないそうだ。

けど、そこを受け入れた上で接して欲しいと頭を下げて頼まれた。俺は了承。固い握手と妹が世話になった礼を述べて別れた。

「ん？どうした」

その事を思い出していた時、妹が俺の後をついてはきていない事に気付いた。

彼女は敷地に入らず門の前で立ち止まり俯いている。

首を傾げつつも一度歩いた距離を逆走し何故立ち止まっているのかを訪ねた。

「あ、あはは……。やっぱり私が兄さんのお家に入ったら不味いんじゃないのかな？兄妹っていつても今まで存在を知っていたのは母さん達とヨギおばあちゃんぐらいだし」

……ヨギ婆あのやろう知ってやがったのか。

「私の事知らない使用人さん達も混乱して、兄さんだって困っちゃうだろうし。」

「神楽坂っていったら〇〇県だったな？どうやって帰るつもりだ？それにもう時間も遅いだろ」

「や、宿は適当にホテルにでも泊まるし、明日になったら電車やバス使って帰るよ」

しどろもどろになりながら答える。
俺は半目になりながらそれを眺めた後

「却下。カプセルホテルやビジネスホテルは隣町まで行かないと存在しない。また、中一のお前を何も聞かずに泊めてくれるホテルも存在しない。それにこの時間出歩いていたら警察の補導対象になる。次いでバスや電車を使うと言ったが一つの市から今まで出た事がないのに二県離れた家まで無事に帰れるとは思えん。それ以前に財布も持ってきてないだろ？」
さて、なにか反論する事はあるか？」

速攻で切り捨てて逃げ道を塞ぐ。うらめしそうにこっちを見るが無視。

肘から先のない腕を彼女の頭に載せる。

「使用人や執事は俺が黙らせるから心配するな。というか妹が家に帰ってきてなにが悪い。ほら、さっさと帰るぞ“結花”」

ポンポンと頭を軽く叩き、再び屋敷へと歩き出す。

少しした後『待つてよ兄さん！』と明るい声が夜の庭に響いた。

さて、これから使用人を皆黙らせるか。

あ、その前に晩飯だな……。

月曜日、私はいつもよりかなり早く学校に登校した。

部活の朝練をしている生徒は皆外。

校舎の中には誰もいない。

少しだけ冷たい空気を肺一杯に吸い込んだ私は教室の扉を開く。

「あ……………」

「すずか……………」

誰もいないと思っていた教室。

けどその空間に一人だけいた。

金髪ショートな持ち主、アリサ・バニングスだ。先週をフルでお休みになられた学年主席。クラス委員長でもある彼女は花瓶の水を取り替えていた。

彼女の瞳は私を捉えるなり、ツヤを失った寒気のする眼へと変貌する。

「……………」

今までの私なら怯え、逃げていただろう。

けど、今の私は違う。

自分から彼女の所に近寄りジッと彼女を見据える。

普段どおりなら気付いただろう。私の瞳が朱く染まっている事に

「……………」

沈黙が私達を包む。

そして先に動いたのはアリサちゃんだった。

右手に持つ花瓶を大きく振り上げる。

どうやらそれを私に叩きつけるつもりらしい。

けど、それが振り下ろされる事はない。

「アリサちゃん……」

私が彼女の真後ろでその右手を掴んでいるからだ。

驚きに目を見開く彼女。

小さく笑みを浮かべる私。

「私もね立花君に惚れちゃったんだ」

花瓶を奪い取り、元の位置に戻すと淡々とかたる。

「友か伴侶かは未定だけど縁者としての契りも交わした。前の私なら自分を抑えて身を引いていたと思う。けど……」

ゆっくりと右手を持ち上げ目の前にいる女の子を指差す。

「ありのままの私を見てくれて、それを受け入れてくれた彼を私は

絶対に諦めない」

絶対に負けないよ。
親友ライバル

私、月村すずかは親友に宣戦布告した。

三幕終了!!
感想お待ちしてます。

しばらくは間幕が続きます。
知り合いと温めたネタを書いていきたいので今後ともよろしくお願
いします

by アイズ

間幕1話『月夜が明けて……、犬と猫?』(前書き)

更新が遅くなり申し訳ありません。

間幕1話 『月夜が明けて……、犬と猫？』

妹の結花が神楽坂に帰った次の週の月曜日。

本社での会議を終え、サリさんと共に学校へと向かう黒いベンツの中、流れゆく景色を見つつ俺は土、日の事を思い返していた。

まず家に入ると同時に執事長の尋問が始まった。

いままでどこにいたかの、本社からの電話が殺到したのだ、誘拐と
思い警察に電話しようとしたのだ。

まあ、警察の方は母さんから釘が刺されていたみたいで、本社への
対応もしてくれたいらしい。

次に結花への反応、これが一番疲れた。

彼女の顔を見ると同時に『や、やっと坊ちゃんまが婚約者をお決めに
……』と涙を流しながらぬかしやがった。

コレに結花は顔を真っ赤にして俯く。

否定しようとするもタイミング悪くやってきたサリさん。

鬼の形相で俺の襟首を掴み上げると『アリサお嬢様はどうするんですか！？』と叫ぶ。

意識の遠のく俺。そんな俺を助けてくれたのは結花だ。

必死に自分は婚約者ではなく妹だと訴える。

もちろん信じられる筈はない。

そこで俺は事情を説明するのだが結花が住まう“裏”や月村家につ

いては隠してそれらしい話しをでっち上げる。
嘘に穴がないように丁寧に組み上げていき説明した。

それでなんとか執事長達を丸め込む事ができて結花は我が家に迎え入れる事ができたのだ。

ちなみに彼女が本家に戻ったのは昨日の昼、五和姉さんが迎えに来てくれて、海鳴六道邸全員で送り出したのだった。

また土曜の晩、この腕について一悶着あったのという事をここに記しておこう。

「午前中は会社で仕事、今から登校する所だよ。結花も頑張って勉強すること、授業で解らない事があつたら遠慮なく聞いてくれて構わないから」っと……………」

【パソコンできる君】で結花から来たメールを返信する。

昨日の内にプライベート用の携帯のアドレスと番号、パソコンのアドレスを教えておいたのだがさっそく今日メールが来た。

ついでにクラスメートらしき女の子と一緒に撮った写メも付いていた。

土曜の内ではまだ彼女が妹だという実感が持てなかったが今ではちゃんと妹だと認識している。

「結花お嬢様からメールですか？」

「ああ、友達と一緒に撮った写真もついてきたよ。元気そうだなによりだ」

「すっかりお兄さんになってますね。嬉しそうですよ」

そりゃ嬉しいさ。兄を慕ってくれる妹がいるんだ。今まで一人っ子だと思ってたけど本当は妹がいる。

その事もあって少し嬉しさがプラスされているのだろう。

けどサリさん。シスコンみたいな言い方は止めてくれないかな？

苦笑すると同時に『今度の休みは神楽坂市に顔を出しに行こうかな？』と思考する。

本社の夏期休暇の予定日と自分自身のスケジュールを確認しているとサリさんがもうすぐ到着する旨を告げた。

それにあわせて脳裏を過ぎる二人の女の子の顔。

月村すずか

“裏の世”と呼ばれ、妖怪、魔物が住まう世界の住人。つい先日交友としてか、夫婦としてかは未定だが縁者となった月村の吸血姫。

そしてバニングス……。

時刻は丁度昼休みに入った所。

俺とサリさんは教室の前に立っている。

いや、この描写は正しくないな。

正確に言うなら俺が扉を開けようとしたらサリさんに止められたと言った方がいいだろう。

彼女は今、スライド式の引き戸に手を掛けた状態で滝汗を流したまま固まっている。

一体どうしたのだろうか。

とりあえず俺は二つある入り口のもう一つに向かい扉に向かい、

【隠れナイフ君&スプーンちゃん】の指先を引き戸の取っ手に掛け引き開ける。

「……………は？」

扉の先は銀世界でした。

「……………！？」

目をこすり再び教室を見る。

銀世界というより氷付けだった教室は普段通りの教室に戻っていた。いや、普段通りではなかった。

誰一人、席から立たずに綺麗に着席していた。

その中窓側二列、真ん中の席に座る二人。

片や自分の席で足を組みつつもの凄く不機嫌な顔で窓側の席に座る女の子を睨みつけている

「ねえ……。休み時間、休み時間、毎回その席に座るのはどんな見？そこは立花の席よ？」

アリサ・バニングス。

対するは窓側にある俺の席で脚を組みながら面妖な笑みをうかべている。

「将来的に奥さんになる私が座ってて何かおかしいかな？」

月村すずか……。っていつか奥さんってなんだよ。

「何言ってるねよ！立花は私の婚約者よ！！」

いや、婚約した覚えはないぞバニングス。

「立花君の口からちゃんとされたのかな？ 私はちゃんと縁者としての契りを結んでくれたよ。だから立花君はアリサちゃんのじゃなくて私の婚約者」

月村さんも婚約した覚えはないぞ？

あと、その笑みは忍さんを連想させて怖い。

「……………」

なんか修羅場と化している教室を呆然と眺める俺。

二人はまだ気付いていないようで未だ互いに睨み合っている。

「言っとくけど立花は頭脳明晰な女の子が好みなの。すずかも頭いいけど確か50位だっけ？ 私は学年主席よ？」

「そんなことないよやっぱり可愛い女の子だよ。アリサちゃんも可愛いけど私は今年の“ミス・聖祥中等部”だから立花君にピッタリだよ。アリサちゃんは確か4位だっけ？ 私と150票差？ あはは」

ちなみに3位“高町なのは”

2位“フェイト・T・ハラオウン”

5位“八神はやて”

トップ5はこの幼なじみ5人組が独占しているらしい。

「知ってる？ 立花は紅茶よりコーヒーが好きなの。確かアンタは

紅茶党よね？」

「ご心配なく コーヒー豆の種類は土曜日に網羅したし。入れ方も昨日マスターしたよ 豆の焙煎からドリッップまで完璧です」

すげえ……。

「ちなみに立花君の好みは？」

「「キリマン」」

なんで知ってんだよ

「全く……。立花もとんだ雌猫に目を付けられたものね」

「ウルサイ雌犬よりはいいと思うよ？」

やべえ、バニングスの額に青筋が浮かんでやがる。

そう思っていると視界の端で何かが俺に近づいてくるのが見えた。

「立花君ホンマ二人に何したん!？」

目の下にクマをつくり、頬をやつれさせ、目を充血させた八神さんが低い声で訴えてきた。

何をしたと言われてもどちらかと言えば被害者は俺なんだけど

「なにもしてないよ」

「嘘や！ この前まであんなに仲が良かった二人があんな事になるはずがないやなん！！」

と、いわれてもなあ……。

「立花君おはよう」

「「うわあああっ!?!」」

後ろから声を掛けられた。いきなりの事で思わず悲鳴を上げる俺達二人。

声の主はさっきまで俺の席に座っていた月村さんだった。

思わず“ヴァンパイア”という単語が浮かんだが口にはしない。口にはしてはいけないと思ったからだ。

「お、おはよう月村さん。まあ、今は昼だから正確にはこんにちはだな」

「フフ　確かにそうだね。こんにちは立花君」

とりあえず引きつった笑顔で挨拶を交わす。

爽やかな笑顔で俺の腕に抱き付いてきた彼女はそつと肩に頭を預ける。

「お仕事お疲れ様。立花君お昼まででしょ？ 今日お弁当作ってきたんだ。あ、サリさんも作ってきてくれるから私はホントに軽いモノなんだけどね」

「そ、そうか？」

「うん　とその前に……」

肩に預けていた頭を浮かせ教室の方に向き直る。

同時に彼女目掛けて飛来してきたコンパス、定規、シャーペン、ポ
ールペン。

それを慌てる事もなく全て片手の指の間で受け止めた。

「立花！」

もの凄い形相でこちらに走り寄ってきたバニングス。

空いている方の腕に抱き付いてくると反対側にいる月村さんを睨み
付ける。

「こんな雌猫に騙されないで！　アナタは私の旦那で私はアナタの
妻なの！　浮気の事は今回だけ目を瞑ってあげるから早くソイツと
縁を切って！！」

「いや、俺は結婚してないから……」

「もう……、ホントにウルサイ雌犬だよ。立花君が迷惑している
のがわからないのかな？　立花君、ちょっとだけまってくれるか
な？　保健所呼ぶ時間がないから私がなんとかするね」

「上等よー！！」

やっとの事で両腕が解放された。

視線の先には丁度曲がり角の先に姿を消した二人。

俺はため息をつき隅っこで怯えている八神さんとクラスメイトに

「迷惑かける」

と頭を下げるのだった。

間幕1話『月夜が明けて……、犬と猫?』（後書き）

キャラの崩壊が進んでいますね。

こんな作品で良かったら今後ともご愛読してくださいと嬉しいです。

感想お待ちしております。

間幕その2『いきなりでございますが』（前書き）

更新が遅くなりすみません

間幕その2 『いきなりでござりますが』

みなさまごきげんよう。

私、私立聖祥中等部一年、白鳥 麗華です。

世界に誇る日本有数の企業。白鳥グループ会長令嬢である私はお父様から譲り受けた頭脳とお母様からいただいた美貌を兼ね備えた女性
性の鏡。

完璧なまでな私。

お父様様の付き添いで社交界に参加するのは勿論、パーティーで私は注目の的。

お父様は私に期待しているし、私も期待に応えたい。

故に私は常に完璧を目指す。

学業にも、容姿にも、恋愛にも

しかし、社交界に出るがいるのは白鳥家に取り入ろうとする殿方ばかり

家柄はとても素晴らしいのだけどそれでも白鳥より下であり、たとえ上であつても完璧を目指す私の心を震わせる方がいない。

そんなある日。

この日も私はお父様の付き添いで参加した社交界パーティー。

今回の開催地は華の都パリ。
そこでも最高級のホテルで行われた今回のパーティーは今までにない程の大規模のパーティーだ。

日本の企業も参加している。

医療関連で大きな力を持つ水比奈グループ。

水比奈グループと強力な提携関係にある御巫総業。

など日本側もかなりの顔ぶれだ。

その中で私は珍しい顔を見つけた。

まずは機械関連で世界に誇る技術力を持ちながらも社交界にはめったに参加しない月村重工。

小さいパーティーにはちらほらと参加していたが大きなパーティーには全く参加しない企業。

今回参加しないであろうと言われていた月村重工が参加してきたのだ。

代表である月村忍が婚約者であろう男性とメイド二人を連れて挨拶周りをしている。

そして驚いた事に同じ学園で一つ上の先輩、月村すずかも来ていたのだ。

濃い蒼のドレスと大人びた化粧をしている彼女。

昨年のミス・聖祥中等部の称号は伊達ではないようで周りの視線を集めている。

また、そんな彼女に歩み寄る一組みの親子。

それはバニングスグループ。

社長デビッド・バニングスを始め。

月村すずかと同じくして先輩のアリサ・バニングスの姿もあった。

父の方は良く見かけるが娘である彼女がこのレベルのパーティーに参加するのは初めてかもしれない。

学年満点主席をキープする彼女は時期社長候補最有力だ。

また彼女達は私のパーティーフェクトライフに対しての目の上のタンコブ。私は令嬢として、後輩として挨拶にいくべきか悩んでいるとお父様が少しだけ屈んで私の耳に囁いてきた。

「六道グループ会長と本社代表がきているそうだ。挨拶にいくぞ」

その言葉を聞いた瞬間私は緊張のあまり息を呑んだ。

六道グループは日本トップレベル、世界十指に入る企業だ。

このパーティーのスポンサーとしても一役噛んでいる六道家は是非ともお近づきになりたい名家である。

お父様についていき六道グループを探す事5分。挨拶周りをしている最中の六道グループ会長、“若き女帝”こと六道司を見つけた。また、その傍らには私と年の変わらない殿方もいた。

「麗華も覚えておきなさい。あの少年が天才と言われる六道グループ本社代表の六道立花。六道司の御子息だ。」

当然私は驚いた。

自分とほとんど同い年か一つ年上の殿方が社長、それも六道グループの本社を任されているのだ驚かないのも無理はない。

それに彼の容姿は童顔寄りながらとても凛々しく、その瞳は私の心を震わせた。

見つけた、私の完璧な人を。

丁度その時、こちらに気づいたのか六道司が自分の息子を連れて歩み寄ってきた。

お父様とは面識があるようで簡単な挨拶の後、私の紹介に移った。

理想を見つけた今の私に失敗は許されない。

社交界でのみしか顔を合わせる事のできないこの現実。

何度も社交界に参加した経験を生かし、丁寧に、なおかつ印象に残るよう挨拶をした。

それからは大人と子供の会話。

親同士が話し、私達子供同士が会話を交わす。

私が手に入れた情報は彼がアメリカの名門を飛び級し、主席で出た事。

今は日本で暮らしていること。

あと、努力もあって後日、日本で行われるパーティーに来てくれるという約束を取り付けたのだ。

おかげで私は有頂天になってしまっている。けど悪い気はしない。

「会長……、そろそろ」

「ええ、わかつたわ。それじゃ、白鳥さん。私達は失礼させていた

できます。」

しかし、そんな楽しい時間もあっという間に過ぎていく。六道はやはり多忙のようで私達に断りを入れると人ごみの中に消えていくのだった。

翌週の火曜日。

いつも通りに送迎で登校した私は学生の注目を集めながら正門をくぐる。

この時の私の頭の中は六道立花の事で一杯だった。

あの方は今何をしているのだろう。どこにいるのだろう。そんな事はばかり考えている。

丁度その時、正門前に一台の黒いベンツが止まった。

何気なしにその光景を見た時、私の時間は止まってしまった。

そのベンツからあの六道立花が降りてきたのだ。

私はこの学園に在籍する殿方には全く興味がなく。

そういつた話しがあっても馬に念仏状態で聞きに流していたのである。

こちらに気づいていないのか彼はメイドと一緒に3メートル程離れた距離で私の横を通り過ぎて行く。

私は呆然と立ち尽くしていた。

そして5分。

我に返った私は彼の教室を探し出す為にその後についていく。

そしてたどり着いた場所は二年生の教室。

年上、顔よし、頭脳よし、家柄よし、経歴よし。

完璧だ。

迷わず二年生の教室の扉を開け放つ。

一斉に生徒の視線がこちらに集中するが気にしない。

“失礼します”と丁寧にお辞儀をした後、六道立花の元へと歩み寄る。

「お久しぶりです立花様」

「君は確か白鳥嬢」

嬉しい事に彼は私の事を覚えていた。

「麗華とお呼びください。今日は立花様にお伝えしたいことがございましたら参りました」

まどろっこしい事が好きではない私は直ぐに本題に入る。

「私とお付き合いです」

そこで私のセリフは止められた。

いつの間にか私の横に立っていた月村すずかと後ろに立っているアリサ・バニングスによってだ。

月村すずかは隣で私の首筋にカッターナイフを当て

アリサ・バニングスはアイスピックを私の左目眼球スレスレに突きつけていた。

「ダメよ立花。ハッキリ“俺にはアリサという婚約者がいる”って言わないと。勘違いした女がこうしてやってくるんだから」

「アリサちゃんに言ってるのかな。立花君は私の旦那様だよ？」

冷たい声が私の両耳から入ってくる。

それに呼応して手足が震える。

恐怖が私を支配した。

「立花君ちよつとだけ待っててね」

「オイタをした後輩とちよつとだけ話してくるから」

私はそのまま二人に引きずられるようにして教室を後にした。

あの子の記憶はない。しかし、身体があの子には近づくなと言っている。

これがアリサ・バニングスと月村すずかの最初の狩りであり、私が記念すべき第1号である。

間幕その2『いきなりでございますが』（後書き）

感想お待ちしています

間幕 次いで3 『観察記録』 (前書き)

誤字修正しました。

間幕 次いで3 『観察記録』

皆さんおはようございます。月村家末女、そしてこの作品の正ヒロインであり、六道立花君の婚約者。

月村すずかです。

先日、私は親友のアリサちゃんにライバルとしての宣戦布告を伝えました。

私と立花君は既に縁者としての契りを交わしていますが。彼女は全く諦めていません。

それどころか自分が立花君の婚約者と言い張る次第です。

そこで私は考えました。

彼女に確実に勝つにはどうしたらいいのか。

そして辿り着いたのは“彼女を知る”。

情報戦は大事ですよ。

コレを読んでいる読者の皆さんは『親友なんだから知らない事はないんじゃないの?』と思われがちですが。親友だからこそ知っているようでも知らない。

“いつ”、“どこで”、“何をしている”というものは案外知らないモノなのです。

そういう私もアリサちゃんとは小学校からの付き合いなのですが、四六時中一緒にいるわけではないのでこれを機に彼女の動向を観察してみる事にしました。

これはその観察記録です。

AM・7:15

アリサちゃんの朝は早いです。

小学校の時はもう少し遅い時間にバスで出ていたのですが、中学生になってからは自宅用車で鮫島さんに送ってもらい登校します。

何故こんなに朝、早くから登校するのかといいますと彼女はクラス委員長だからです。日誌から花瓶の水の交換、黒板周りの清掃が彼女の仕事になります。

本当はもう一人副委員長で男子がいるのですが、その子はサボリ癖を持っていてめったに仕事をしません。

それを気にしていた先生が立花君を指名。彼ならアリサちゃんも喜ぶと思ったのでしょうか。

ですがアリサちゃんはそれを拒否。『昼間は学業、夜は遅くまで社長としての業務をこなしているのに朝早くから登校させては彼の身体が持ちません。この程度、私一人で十分です』といいました。

身体障害者というのもあるのでしょうけどそれには触れず、彼の身を察じていたアリサちゃんに思わず感嘆の眼差しを向けてしまいました。

アリサちゃんやっぱり手強いです。

あ、ちなみに私は現在、ファリンの運転でアリサちゃんの車を尾行中。

ちよっとした諜報員気分を味わってます。

AM・7:45

およそ30分かけて登校したアリサちゃんがまず向かうのは自分の下駄箱ではなく立花君の下駄箱。

小さなロッカータイプの下駄箱の戸をおもむろに開けた後に取り出したのは手紙？ ううん。違う、アレはラブレターみたい。それを真剣な眼差しで見た後。大きな溜め息をついてそれ再びロッカーに戻しました。

てつきり私はそれを捨てるなり破くなりするモノだと思っていたのだけどうやら違うようです。教室に来て直接告白してくる子には制裁を加えるのになんでだろう？

私のイメージでは

『全く……人の旦那にラブレターなんてなんて考えてるのかしら。

ボツ（ライターの音）』

こんな感じなんですけど

ちなみに自分のロッカーに入っていたラブレターはその場で破り捨ててました。

A M・8：45

午前の授業が始まりました。

といつても本鈴は30分なので今は授業中です。

科目は数学。工学系の進路を目指す私には必須科目でももちろん得意科目です。というより、数学は私達幼なじみ5人娘、全員が得意なんですよ？

アリサちゃんは経営学、経済学を納め、将来的にはお家の会社を継ぐ為に必要ですから当然ですし、なのはちゃん、フェイトちゃんはやてちゃんはお仕事で使う“魔法”に演算が必要不可欠なんです。うです。以前聞いた話なんですけど。空を飛ぶ魔法と悪い人を撃つ魔法は別々に頭の中で演算をして使っているそうなんです。それって数学を勉強しながら並列して国語を勉強して、なおかつその両方を理解するという事ですよ。ちよつとズルいと思うのは私だけでしょうか？

それにしても悪い人を撃つ魔法ってなんだろ？

まあ、それはいいとしまして、この授業中というのは私にとって結構な苦痛の時間でもあります。

立花君の席は窓側の列の真ん中、アリサちゃんはその隣、私の席は

教室の入り口の列、一番後ろなんです。

離れた場所で二人のやりとりを眺めているのですがコレが結構ツライものです。ハッキリ言っていちゃついているようにしか見えません。

コレは早急に手を打つべきでしょうか？

授業中話しをしている二人を見る度、シャープペンが一本、二本、三本と役目を終える始末。文房具屋さんに行くのが日課になりつつあります。

それにしてもいいなあ……

P M 1 2 : 0 0

お昼休みです。

チャームが午前の部の終業を継げると同時に席を立ち上がる立花君。アリサちゃんとサリさんに『先に屋上に行っていてほしい』と告げました。

アリサちゃんは少しだけ渋い顔をしたけど直ぐに笑顔で了承。私は気になるので後を追おうとしたのですがアリサちゃんに捕まりそのまま屋上へと連行される事になりました。

『アリサちゃんは立花君が何してるか気にならないの？』と遠まわしに聞いてみたんですけど『いくら妻でも口を挟んでいいことと

悪い事があるのよ』と言っていました。

10分後、立花君はげんなりとした表情で帰ってきました。メンバーはおなじみ通り幼なじみ5人娘、加え立花君とサリさん。

私はいつも通り彼の左側に腰掛け、アリサちゃんはその反対側。今日も手作りしたおかずを立花君に差し出すのですが、今日もアリサちゃんはそれを妨害して自分のお弁当を差し出して来る。目の前にサリさんの作ったお弁当があるのにお弁当を出しては失礼だと思つのです。だから私みたいに気軽に食べれるおかずが丁度いいんだよ。

という訳でアリサちゃんはちょっと大人しくしてよっか。ハイ、立花君

『お食事中申し訳ありません。本社よりお電話です』とサリさんが立花君にイヤホンとマイク、ノートパソコン、義手【パソコンでできる君】を差し出してきました。

邪魔された私はムスツとするのですがどアリサちゃんは笑顔で頷いてマイクとイヤホンを受け取りそれを彼の右耳と服の襟に、ノートパソコンを起動してそれを【パソコンでできる君】に接続し彼の右手に取り付け何事もなかったように食事を再開。

立花君は『俺だ。昼食の最中だが食べながらでも構わないか？

悪いな』とお仕事の話しながらお昼ご飯を食べ始めてました。

私も流石にお仕事を邪魔してはいけないので大人しく食事を再開するのですがふとアリサちゃんを見た時

アレ？

私は気づいた。

なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人はサリさんと楽しく話していて気づいていない。

気づいているのは私だけ。

立花君の隣で静かに食事を続ける親友。

目の前に置かれてるノートパソコンを見ながらお仕事の話しをしつつも食事を続ける立花君。

そんな彼の胡座をかいている足の上に置かれてるお皿。話しをしながら食べているので必然のお皿の上から料理がなくなる。そこへさりげなくアリサちゃんがおかずや食べやすいサイズのおにぎりを置いているのだ。

自分が持ってきたお弁当のだけでは偏りがあるのでサリさんのお弁当からもおかずを取っていて、立花君の左手に付けられている食食用義手【隠れフォーク君】の動きが少しよどめば掴みやすいコップにお茶を注いでこれまたさりげなく渡していた。

自然と受け取っている彼。

多分仕事に集中しているのだろうけどあまりに自然過ぎて全然違和感がありませんでした。もしかしたら今まで気づかないだけで立花君が編入してきてからずっとこうなのかもしれない。

P M 1 4 : 1 0

今日、最後の授業は体育です。

更衣室で着替えている私達女子のメンバー。更衣室内にはサリさんもいたりします。武術の心得のある彼女は私達のガードマンで

もあるのです。更衣室に男の子の気配が近づいたら警告と共に撃退する手はずになっていてこれまでに仕留めた回数5人。内一回は立花君も含まれていたりします。男子がふざけて立花君を更衣室に投げ込んだのです。

まずはサリさんが自分の主人を投げ込んだ男の子を駆逐、被害者な立花君も同罪ということで制裁をつけました。

ちなみにそんなメイドさんは現在はやてちゃんにセクハラされています。

年上のお姉さんに失礼な気がするのですがみんな笑っています。そういう私とアリサちゃんも笑っています。

そこで私はある事に気づきました。

アレ？　アリサちゃんおっきくなった？

私の言葉にアリサちゃんは自分のモノを寄せ上げる。そして『そういえば最近ちょっとキツイわね』の一言。

同時に静まり返った一部の女子。その表情は絶望に満ちていました。

同時に『裏切り者！』と再び叫ぶ一部の女子。

どんな理由で裏切り者なのかは彼女達のプライドを守る為に伏せさせていただきますのでご了承ください。

あとサリさんの次にアリサちゃんも襲われました。

この時間になってクラス委員長の仕事を全て終えたアリサちゃんは私達親友4人娘と一緒に帰宅します。

立花君は授業が終わると直ぐに会社へと出向く為、サリさんと一緒に学校を後にします。

故に帰宅メンバーは私達幼なじみ5人娘。

楽しく喫茶翠屋でお喋りした後午後5時頃。私達はそれぞれの家に帰るのです。

本当ならここで私も帰るのですが。今回はアリサちゃん観察記録のミッションがあるのでアリサちゃんを尾行します。

朝と同じくしてファリンの運転の下、アリサちゃんが乗っている車を尾行し、付いた先は街にある生け花や茶道を教える教室。

それも7時に終わり今度はお裁縫や家事を教える教室、そして琴などの和楽器を教える教室を夜10時まで回ってました。もう分かるかもしれないですが彼女は花嫁修行をしているのです。

お昼のアレも立花君に相応しい女の子になる為に自分を磨く努力。それを静かにアリサちゃんはしていました。

対して私はコーヒーを覚えた程度で何もしていない。

こうしてはいられない。私も自分を磨かないと!!

観察記録はこれにて終了。
進展があればまた報告するね。

間幕 次いで3 『観察記録』 (後書き)

感想お待ちしています

【第四幕】 一話 『巫女娘襲来、そして私の罪・1よ』（前書き）

会いたい

会いたい

会いたい

会いたい

会いたい

【第四幕】 一話 『巫女娘襲来、そして私の罪・1よ』

神楽坂市近傍の山中

真夜中の山林。暗闇に包まれた照らすのは月の光と星の光のみ。この空間に響くのは虫と風の音だけである。

私、碌瞳結花は碌瞳の退魔士としてお仕事の一つ神楽坂の管理に勤しんでいた。作業内容は至ってシンプル。神楽坂を囲むように張られた結界の点検補修。あとは小さく弱いが徘徊している霊達の退魔だ。

「いや〜助かったよ和白。私だけじゃ朝までかかっちゃってたかも」

『

笑顔で片手を動かし返事をする白い着物姿の女の子。彼女は水

比奈 和^{ワシロ}白。

五和さんの娘さんで次期御巫の当主候補の一人で私の親友の一人。御巫は当主と先代の当主の女性以外は喋ってはいけないという厳しいお家。だから彼女とのコミュニケーションは手話で行う。

『（そういえば結花ちゃん。縁ちゃんの姿が見えないんですけど………』

「縁？ アレ？ さつきまで一緒にいたのに……」

二人してキヨロキヨロと周囲を見渡す。そして、結界の拠点の一つである古い祠の影から不自然に飛び出している一本の枝。いや、枝ではなく太刀の柄である。

「縁……もう終わったよ」

「ホ、ホント？ もう……いない？」

祠の影から出てきたのは小柄の身ではあるが身長を悠に超えた太刀を抱きしめている黒ゴスロリ姿の女の子。

長い髪を靡かせもの凄く怯えた表情を見せる彼女は聖さんの娘さんで月詠縁^{ゆかり}。

彼女もまた私の親友の一人なのだがお母さんである聖さんの勝ち気、バトルマニアな性格とは裏腹に彼女はとても内気、臆病、非戦闘主義なのだ。

今回の私のお仕事のお手伝いも最初は嫌よ嫌よと必死の抵抗をしてきた。いくら言っても泣きわめきながら同行を拒否するので和音がもの凄く怖い笑顔で説得、今回同行するに至った。

「縁……そろそろ帰るよ。明日も学校なんだし」

『（正確には“今日”ですけどね）』

と、ここで和音はある事に気付いた。縁の背後に近づく一つの影。まあ、影と言っても私達みたいに靈感が異常に強い人間じゃないと見えないんだけどね。

縁に近づく影はゆつくりと彼女の肩に手を伸ばす。それは青白い人の手。どうやら結界内に入り込んだ霊の残党のようだ。私達3人が今まで気付いていないという事からしてかなり弱い霊という事が分かる。

ちなみに私は銃のチェックをしてたので気付いてない。そして

「チェック終了〜〜と……あ」

私が銃から視線を縁に移したと同時にその手は彼女の肩に置かれた。手の持ち主はどっかの落ち武者。場所が場所なだけにものすごく不気味。

ヒンヤリとした感触が露出された部位の素肌を伝って縁自身の身体を駆け巡る。

「ヒツ!?!」

彼女が小さく悲鳴を上げた瞬間。

月詠流一刀・満月

この山林の中に満月が輝いた。

月詠流一刀・満月。一本の太刀を用い自身を中心として360度隙間無く“同時”に斬撃を放つ月詠流破魔式刀術の奥義。

月詠流破魔ノ太刀・朱月

続いてこれまた奥義である燃え盛る朱い月を放ち

秘伝・新月

そして月詠本家の秘剣、光も追いつかない斬撃を落ち武者さんに叩き込みました。

実は彼女、月詠流闘術の免許皆伝、師範代、次期当主の筆頭巫女なのです。

怖いが為に、身を守っていたらいつの間にか免許皆伝で相手になるのがお母さんの聖さんだけだとか。

まあ、それはいいとして見事オーバーキルで破魔してくれた彼女は泣きながらこちらに駆け寄ってきて私に抱きついてきた。

「うわあああああああん！　怖かったよ～～～！！！」

これはお化け屋敷にこの子を連れてったら血を見るね。そんな事を考えつつ私の胸で泣く親友の頭をポンポンと慰めるように優しくなでる。

「ハイハイ怖かったね～。怖い落ち武者さんは縁がオーバーキルしたからもういないよ～」

『（ホントに縁ちゃんはお強いですね～）』

今のオーバーキルを見て声は出さないもののけらけらと笑う和の方が私は怖かったりする。

そんな事を言おうものなら一週間程飲まず食わずで脱出不可能

な結界に閉じ込められてしまうのでここは黙っておくことにしよう。
そんなわけで小さいハプニング（？）に見まわれた私達3人は
お仕事を終えた後、私の家であり、二人の神楽坂での住まいである
碌瞳本家へと帰っていった。

え？　なんか話が関係ない？　本当のお話しはここからですよ。
ここまででは御三家の親友の紹介です。決して作者の字数稼ぎではな
いので勘違いしないでくださいね。

あ、あともう一人だけ紹介するのでちょっとだけ待ってくださいね。
その子も今後にちゃんと関係してますので

ここは私立神楽坂中学校。私、碌瞳結花と水比奈和白、月詠縁
が通っている学校である。風貌としては典型的な文武両道なだけで
どどちらかという武の方が血の気が多い感じ。優秀な生徒がいれ
ば全スポーツ部が様々な手段を用い、本人の意志は無視し、総力を
挙げて獲得に乗り出してくる。

うちのお母さんも学生時代、散々追い回されたと言っていたけ
ど実際に見てみるとただの暴動にしか見えない。ちなみに縁もその
暴徒の被害者であったりする。

体育で剣道の授業があったのだが先生は女子、男子関わらず問

答無用で実験台にするという事で人気のないハゲ教師。まあ、指名された生徒は等価交換により成績に色が付くんだけど……。よりによってこの教師は縁を指示したのだ。

嫌よ嫌よと目に涙を浮かべながら拒否を示した彼女。けどコレは授業、指名されたら逃げ道はない。一応私も止めたのだけどそれも虚しく縁は実験台の役に立たされてしまった。そして私と和臼は同時に自分の家とは異教の十字を切る　アーメン。

結果はご想像の通り教師から打ち込まれる前に恐怖によるカウンターで瞬間30撃を打ち込んでのオーバーキル。縁の実力が白日の下に晒される事となった。瞬く間にその情報が学校中に広まり暴徒の勧誘が来るのだけどそれも全てオーバーキル。流石に不味いかな？とは思ったのだけど校長先生がそれを黙認してくれました。

さて、逸れた話しをもとに戻して私達巫女娘三人はというと、いや二人は只今神妙な面持ちで一つの机、私をを取り囲んでいます。

「うつわ、暗いね」結花

そんな私達の所にやってきた少女。彼女はお母さんの最初の親友の娘さんで名前は榎本麻耶えのもとまや黒い髪をツインテールにし、青い瞳と赤縁メガネ、黒い皮のグローブをしているのが特徴である。

「結花ちゃん、お兄さんに会いたいんだって……」

「お兄さんってこの前写真で見せてくれた立花さん？」

「はい。六道グループ本社社長の六道立花さんです」

机に突っ伏す私。縁の解説の通り私はホームシックならぬ兄シツクになっている所であります。

「ホント、ブラコンだよね〜」

「なによ〜、いいじゃないブラコンでも。だって兄さんホント優しいんだから！　前私を初めてお屋敷に連れて行ってくれた時もお手伝いさん達全員に説明して、ご飯だって洋食に慣れない私の為に和食にしてくれて、短い時間だったけど勉強も見てくれて、帰る時もお土産に兄さんが私の為に腕時計を注文してくれたんだよ！？」

兄さんは社長さんで大学も出て優しいし、こんなお兄ちゃん
でブラコンにならない方がおかしいよー！！」

「があーっとまくしたてる私。ブラコンで何が悪い！　海鳴の守護者の達也さんも兄さんとはとってもいい奴だって言ってたもん！

ビバブラコンー！！

「ハイハイ。その話は前も聞いたから……」

「けど……立花さんって……ホントに優しいよね」

『（縁ちゃん結構助けられていますよね〜。私も良くしていただいています』

「……………え？」

「ねえ、それってどういこと？　ねえ縁、和白今なんて言ったの？」

「ヒッ！？」

一瞬で壁際まで後退した縁。それを見て楽しそうに笑う和臼が代わりに説明した。

「私も縁ちゃんも社交界でお会いしてるんです。縁ちゃんは国内のみですが月詠会会長のお孫さんとなると言い寄る殿方が多くなります。けど縁さんは性格が性格なのでその防波堤役として良く助けられてるんですよ。私の場合は喋る事が許されないのです。の通訳や簡単なお世話をしてくださいました。あと母上達の繋がりでもお会いしてましたよ」

私が彼女達に兄の存在を教えたのは先の件の後日。けど、二人はそれよりも前に兄さんと会っており交流もあった。

私はその事にシヨックを受けた。

「ゆ、縁と和臼の……バカあああああ!!」

「イヤアアアアア!?!」

半狂乱とした私は縁に襲いかかった。結果としては縁にカウンタ―オーバークルされて和臼に縛られる始末。麻耶はそんな私達を楽しそうに観戦してました。

その日の晩、私はある決心の下に行動に移した。これは碌瞳家のしきたりに逆らう事であり次期当主のやる事ではないのは分かっている。

けど、どうしても私は兄さんと一緒にいたかったの。

かく奥さんが優しくしてあげようとしてるのにそんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない。けどそんなアナタも可愛いから好き

ちなみにメイドは事前に撃退しているのでノープロブレム。

「仕方ないわね……ちょっとだけ待っててね」

頬を愛おしそうに撫でてあげて私はその上から退いた。同時に彼は地につき涙を流しながら荒い息をついているが私は既に視線を離している。

「で、なんの話し？」

「うん。一年生に転校生だって」

フェイト……。そんな事の為に私の至福の邪魔したの？

「ねえ、山と海どっちが好き？」

「え？ 私はどっちかという和海……」

「オイ、なに遠まわしに殺人予告してやがる」

軽く頭をポカッと叩かれた私はハッと我に返った。危ない危ない、危うく犯罪を犯す所だったわ。けどよくよく考えればこの期末前の次期に転校生って珍しいわね。

「一年生に転校生っていつてたけど、どうして私達に聞くの？」

「うん。もしかしたら二人の知り合いかなって思っただけ。お金持

ちのご令嬢らしくって日本人なんだけど身のこなしがとても綺麗な
んだって……」

そういうこと。確かにその手の人なら何人か覚えがあるけど皆
お嬢様学校に通ってる連中だし、ゴネるだけでそこより低いランク
のこの学校に来るとも思えない。

「立花は覚えある？」

「一応、一人だけ。母さんの親友の娘さんだけど転校来るような子
じゃないな」

立花も無しつと……。

けど多分その子も立花狙いの可能性がある。一応気をつけておこ
うと心の内で頷いた私はふと時計を見た。

「そういえば立花ってこれから会社に行かないといけないんじゃないな
かったの？」

「ああ……どっかの誰かのせいで忘れてた」

実は彼、これから出社しないといけない。ちなみに私も忘れてた
ので急いで彼の荷物を纏める。パソコン、技術、携帯つと

「今日は帰ってくる？」

「わからん。早くて昼からの授業中ぐらいだと思っけど」

そう、結構時間がかかるわね。それで慌てて来られて事故でも起こされても適わないので

「だったら今日はそのまま早退しなさい。無理して来る事はないわ。」

それがベスト。彼にはは早く帰って休んでもらいたい。

私達は話しながら教室を出る。それと同時にメイドと鉢合わせた。彼女は私に撃退されて校内で迷って今やっと教室に辿り着いた所である。

そんな彼女に私は悪びれた素振りもなく彼の荷物を差し出す。

「ハイこれ立花の荷物。校門まで私も見送るから」

「ありがとうございますアリサお嬢様。」

ちなみに彼女は私の陣営。事前に調教済みである。

「別に見送りはいいって言うてるだろが」

「旦那の出勤を見送るのは妻の勤めよ。それに私が好きでやってる事だから」

「誰が旦那だ！誰が！！」

こんなやりとりをしながら校門まで向かう。正門前には既に車が迎えにきていた。私達はその車の側に付くとメイドが一步彼に歩み寄る。

「少しお下がりくださいアリサお嬢様。 “社長” お召し替えを……」
「ん……」

ここでちよつと紹介しておこうかしら。メイド、サリ・エドワードの十八番、“お召し替え”。

さつと取り出した黒い布で立花を包み、バツと布を引き剥がす。

なんとそれだけで彼の着替えが済んでいるのだ。理屈は分からないけど時間が押しているときにはかなり便利である。ちなみに今回は黒いスーツ

それに合わせてメイドから数種類あるネクタイの一つ、青のネクタイを受け取ると丁寧に彼につけてあげる。だけどいつの間にか彼は電話用の小型マイク、イヤホンで会社の人と話しをしていた。

もちろんそんな事など気にしない。邪魔にならないようにネクタイを締めあげたあとは変な所がないか全身を見て異常がない事を確認。

「よし。OKよ」

「ありがとうございます。では社長、お車に」

「いってらっしゃい。気をつけて」

走りさっていく車。旦那の出勤をリアル体験した私は上機嫌で自分の教室へと向かう。

「さて、今日の習い事ってたしかお裁縫だったかしら……ん？」

自分の教室の近くまで来た時にある事に気付く。なにやら男子生徒がウチの教室の前に集まっていた。

たまに私達幼なじみ5人娘のファンクラブが教室の前に集まる事がある。今回もそれかと思っただがどうやら違うようだ。一年生が中心だし人数も少なめ、なにより誰かを案内しているような雰囲気があった。

『あ、先輩!』

一年男子の一人が私に気付いた。なんなのか首を傾げながらその一年に歩み寄る。

「アンタ達こんな所でなにやってんの。もう授業が始まるでしょ？ホラ散った散った」

「失礼します。この度はお騒がせして申し訳ありません」

鬱陶しそうにこの群れを散らそうとする私。そんな私に向かって一人の女の子が歩み出てきた。短い髪の女の子。一年男子の前に出て丁寧に頭を下げる。背筋も真っ直ぐで驚く程に礼儀作法がしっかりしている。なるほど、この子がフェイトの言っていた転校生ね。顔に見覚えがない所を見ると私が参加したパーティーには来ていない。

「まあ、直ぐに解散するなら文句はないわ。それでどうしたの？」

「ハイ。実は六道 立花という方を探しております……こちらのクラスにいらっしやると伺ったもので」

ハア……どうやらこの子も立花目当てか。私に覚えがない所か

らして立花が忘れてるかこのこの子の親が立花の写真を見せたのだらう。

立花目当てじゃなかったら一応先輩として優しくしてやろうと思っただけぞうという事ならたとえ一年でも容赦はしない。

「悪いけど立花はついさっき会社に出勤したわ」

瞳から光が消え失せる。同時に周囲の温度が劇的に低下。一年の男子は私の事を知っているので我先にと逃げ出す。残ったのは一年転校生の一人だけ。彼女は姿勢を崩さぬまま私を見ていた。

それに対して私は一瞬だけ彼女に気味の悪さを感じた。けど弱い所を見せる訳にはいかない。だから無表情のまま言葉を続けた。

「私は妻として彼を見送っただけで何か伝える事はある？」

「……妻？」

この単語に一瞬だけ彼女の肩がピクリと動いた。それを見逃さなかった私は更に続けた。

「六道立花の妻、アリサ・バニングスよ。悪いけどウチの旦那に近づかないでくれる？」

言い切ると同時に彼女に向けてありったけの殺気を向ける。積んだ、勝負は私の勝ちだ。

そう思った。

「
」
けど、彼女はそれに対して全く怯んでいなかった。むしろ無表情を保っていたのだ。この事で私の中に動揺が走った。

なに、この子……一体何者？

立花というブースターを付けた私の殺気は完璧メイドのお墨付きだ。一介のお嬢様が平然とできるハズがない。

なのになんで平然としているの？

動揺している私と無表情な彼女の間に沈黙が流れる。

お昼休みではなく短い休み時間なのにこの時間が何時間もの時に感じる。

「そう……貴女でしたか」

転校生が言葉を言い切る前にチャイムがその言葉を掻き消すように鳴り響いた。授業開始を告げる電子音で作り出した鐘の音。それが最後の中音程の音を響かせて鳴り終わる。

「それでは授業がありますので失礼いたします」

転校生が私に向けて再び礼をした後、踵を返して歩き去っていく。彼女の姿が曲がり角に消えると同時に私は

「ッ!？」

その場に崩れ落ちた。自分の身体を抱きしめて過呼吸のような荒い息をつく。

そう……貴女でしたか

あの人の腕を奪ったのは

【第四幕】 一話 『巫女娘襲来、そして私の罪・1よ』（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。

タイトルに巫女とありますが今回、人外魔境は最初の冒頭のみのもりです。

それでは第四幕を開始します。

感想もお待ちしてます!!

PS 〃ご指摘を受けました誤字等を修正しました。

突然ですが

皆様こんばんはもしくはこんにちは。

俺の（私の）りあるおにごっこ作者アイズです。

先程、ふと累計PVを見た所、なんと30万PVまであと僅かという所までできてました。

そこで急遽、読者の皆様、お気に入り登録してくださっている方々、お気に入りユーザーとして私を登録してくださっている皆様にアンケートの御協力を依頼させていただきたくこの場を設けた次第です。アンケートの内容としましては私が記念作品の題材として考えている次の数点から皆様に『読んでみたい』という題材を選んでいただくというモノです。

また、『この中にはないな』という方でも『こういうのはどう?』という形でお答えしていただければそれが今後の記念、リクエスト作品候補となったり、もしかしたら本編に組み込まれるかもしれません。

ですからコレをご覧になった皆様。是非とも御協力をよろしくお願いします!!

さて、今回30万記念作品のお題ですがこの二人にプレゼンしてもらいましょう

立花「あ、どうも。六道グループ本社代表、日本支部統括顧問の六道立花です」

アリサ「こんばんは。バニングスグループ社長令嬢、そして明日、式を挙げる事になりましたアリサ・バニングス改めて六道アリサです」

立花「ちよつとまって！！いつ俺がてめえと結婚するって言った!？」

アリサ「もう立花ったら別に恥ずかしがる事なんてないじゃない。これだけの人達に祝福されてるんだから素直に喜べばいいのに」

立花「恥ずかしがってねえよ！！　たく……、この後、予定が押し込んでんだから真面目にしてくれ……」

アリサ「私はいたって真面目よ？　まあ、旦那のスケジュールの邪魔したら嫁失格だし本題に入るとしましょうか」

立花「始めからそうしてくれ……」

アリサ「さて、今回プレゼンさせていただくのは作者からもありませんように私達がメインの作品【俺の（私）りあるおにごっこ】の30万PV記念作品の題材です」

立花「幾つかある内から『コレを読んでみたい』というのがありましたら感想やメッセージボックスへの返答でよろしくお願いします。また、リストになくても題材として提案していただければ作者が真剣に考えて候補としますのでよろしかったらそちらもよろしく願います。さて、まずは一つ目」

？『ほのぼの（？）といこう。立花とアリサのラブラブ（？）な休日』

アリサ「私コレがいい！絶対コレ！アンタ達コレを選ばないとただじゃおかないわよ！？」

立花「ほのぼのしてるのはバニングスだけだろ……。俺は1日休まらないのは確定だ」

？『月夜の吸血鬼。危ないあの子はピンク色？』

アリサ「ハイ次！！」

立花「……お前ら本当に親友か？」

？『挑戦社長司書。けど実際は会長司書？』

アリサ「コレって……」

立花「ああ、多分母さんの司書を経験する話だろうなあ」

？『ここは湯煙海鳴温泉！二人の乙女の温泉バトル！！』

アリサ「コレもいいわねえ、夫婦水入らずで温泉だなんて粹じゃない」

立花「いや、『二人の乙女』って書いてあるだろ!？」

アリス「さて、以上4つが記念作品の題材です。この中から一つを選んで感想やメッセーヂボックスに投票してください」

立花「また、リクエストも随時受け付けてますのでそちらもよろしくお願いします……さて、俺はこれから用事があるから行くぞ?」

アリス「ええ、わかったわ。それじゃいつてらっしゃい……なんて言うと思った? 知ってるのよ立花。これからオフなんでしょ?」

立花「な、なんで……」

アリス「妻である私が旦那のスケジュールを把握してないわけじゃない。さて、と……。夜はまだまだ長いわ。朝まで楽しみましよう」

立花「うわあああああっ!?(逃走:リアル追われ役)」

アリス「それじゃ今日はこの辺で、また本編で会いましょう。ウ

フフ (追走:リアル鬼役)」

リアル鬼ごっこスタート

突然ですが（後書き）

記念作品の投稿は4幕終了を目処にしています。

【第四幕】 二話 『巫女娘襲来、そして私の罪・2よ』

その後、一向に帰って来ない私をなのはが探しにきた。彼女は教室の前で震える私を見て驚く。おそらくここまで弱った私を見せたのはこれが初めてだろう。今までこんな姿はなには見せた事は無い。パパにもママにも、鮫島にも、すずかにも

立花にも。

慌てる彼女、その声にクラスのみんなが教室から出てくる。けど出てくる前に私は立ち上がった。

これ以上、弱い所を出してはいけない。これ以上弱い姿を他人に見せてはいけない。そう自分に言い聞かせる。

「なに？ みんなしてどうしたのよ。ホラ、早く席に着かないと先生が来るわよ」

弱い所は見せられない。だから気丈に振る舞う。みんなが教室に戻った後最後に私も教室に入ろうとする。

だけどそこでののはが肩を掴んだ。

「アリサちゃん一体どうしたの？ 相談だったら乗るよ？」

小学校からの親友の彼女。

誰よりも強い彼女。

誰よりも優しい彼女。

誰よりも鈍感な彼女。

そして誰がよりも敏感な彼女。

彼女は彼女のクセに私の異常に気付いた。いや、先程の私を見れば誰だって私がおかしいことに気付くだろう。けど問題はそこではない。問題はその異常さに気付いたらまるでスッポンのように食いついてくるところにある。

だから私は

「なんでもないわよ。ホラ、さっさと教室に入らないと」

「アリサちゃん!!」

「ウルサイ!!」

だから私は彼女を拒絶した。

小学校のあの日以来初めて親友を拒絶した。これ以上他人に私の闇を垣間見てほしくないから。だから拒絶した。

「なんでもないって言ってるでしょ!!」

声を張り上げた私は呆然とする彼女を置いて教室へと入る。必然的に声を上げた私に視線が集まるがそれは全て黙殺。自分の席について窓の方を見た。

そこにあるのは私が支えになる事を願う男の子の席。

なにも考えず、何も感じない伽藍とした感覚で見ていると、携帯が震えた。

開いてみると見慣れないアドレスだった。アドレスからしてパソコンだというのがわかる。件名には

六道立花と書かれていた。

という事はコレは彼が持つ業務用パソコンのアドレスだ。業務用ではあるが初めて手に入れた彼の連絡先。その事に自然と頬が緩む。直ぐに本文を開いた。

授業前に悪いな。今日から4、5日九州へ出張する事になった。手間だとは思うが先生への伝言を頼む。

P S ・月村さんとは喧嘩しないように

そう、出張するんだ……。

気持ちの降下を感じた。逃げ道がなくなったような絶望感に打ち拉がれた様な感覚になった。

彼を逃げ道に使ってはいけないのは自分でも良く理解しているつもりだ。けど、頭では分かっているけど心は彼にすがろうとするのだ。

そんな事を許される資格はない。

一言言い聞かせる。

そんな事をしているはずがない。

一言言い聞かせる。

私が彼の

人生を奪ったのだから

それからというものの休み時間になる度にあの転校生は教室の前にまで来た。廊下と教室という空間を区切る窓、引き戸の向こう、廊下側である子はジッと私を見つめるのだ。

その都度、私は震え、弱る。けどそれを面に出すことは許されない。

故にゆつくりと精神が毒に犯されたように死んでいく。あの子に見つめられているだけで朽ち、捻れ、ひび割れ、崩れていく。

『なんでみんなあの子に気付かないの？』

毎回休み時間に同じ場所にいる彼女に誰も気付かない。ハッキリとそこにいるのに、ハッキリとそこにいない。

怖い。

その感情が私の中を蠢いていく。

そしてまた授業開始のチャイムが鳴り響く。同時に姿を消した転校生。この時にはもう私の精神はギリギリにまですり減らされていたのだろう。

私の闇をジッと見る存在がいなくなった安堵感からであろう。

倒れるようにして机に突っ伏した後意識を失った。

「アリサちゃん？　　アリサちゃん！？」

最後に聞こえたのは親友が私の名前を呼ぶ叫び声だけだった。

お昼休み。私、高町なのはは職員室に来ていた。理由はアリサちゃんの早退を先生に告げる為。

今日のアリサちゃんはとてもおかしい。いや、おかしいのは立花君が編入してきたからなんだけど、今日のアリサちゃんはいつものアリサちゃんと違う。

震えてた、顔色が悪かった、何かに怯えているようだった。人ではなく別の、そう、別の何かに怯えているようだった。

「それじゃ、バニングスさんのお家に連絡を入れておくわね。」

私達の担任、山陰千里先生。彼女は直ぐに受話器を取ろうと手を伸ばす。

その時、私はある事を思い彼女を止めた。

「先生。六道君の連絡先って分かりますか？」

「六道君の？　ごめんなさいね。六道君は立場が立場だから連絡先は私達のような一般教師には教えられてないのよ。理事長なら知ってるはずだけど……。」

「そ、そうなんですか？」

その返答に落胆する。アリサちゃんの異変を彼に伝えようと思っただのだ。

立花君は生徒としてかなり特殊である。世界的企業の一人息子なのだ。それ故に彼を狙う人間にとっては些細な情報でも貴重な情報になってしまう。

例えば電話番号。その電話番号さえあれば彼の所在地が掴める。だから例え業務用携帯の番号でも安易に分からないようにしているのだ。

どうしようかと千里先生が電話している間に思考を巡らせる。と、そんな時、

「どうしました？」

「ふえ？」

突然声を掛けられたので呆けた声と一緒に振り向いた。そこにいたのは年輩の女性。

あまり見覚えのない人なので誰だろうと思っていると

「理事長！　ちょうどいい所に……！」

千里先生が声を上げた。この女性こそこの聖祥大学付属校の長であった。

「はじめまして！ 二年の高町なのはです！！」

私は直ぐ彼女に頼み込んだ。立花君の連絡先を教えて欲しい。自分の親友であるアリサ・バニングスの異常を彼に伝えたいと。

「……………ここは保健室？」

目を覚ますと同時に鼻を突いたのは覚えのある独特の香り。次いで視界に入ったのはカーテンのような仕切りだった。

どうやらいつの間にか意識を無くしていたらしい。気絶する直前になのは声が聞こえた気がするからおそらく彼女が私を保健室に運んでくれたのだろう。

ああ、みんなの前で倒れるなんて私も落ちたモノね…………。しばらく寝ていたから多少回復することができたので悪態をついてみた。

「早く、教室に戻らないと…………」

身体を起こしてベッドから降りた私はふらつく足取りで歩き出す。どうやらまだ身体の方は回復してないみたいだ。けど、そんな事よりも私はさっさとこの空間から出たかった。

私は医務室というのが嫌いなのだ。理由はあの時の事を思い出すから。だから早く出て行きたい。

一歩一歩、震える足で歩き、一回一回、力の弱い腕を使い身体を支える。狭い空間なのにとても広く感じる。あの日からいつもそうだ。クラス委員として体調の優れない人間を保健室に連れて来る事は多々あった。けど、この部屋に入る度この空間をとても狭くとも広く感じてしまう。

そして苦しい。胸の位置、心臓を撫でられ、掴まれたかのような嫌悪感、圧迫感を覚えてしまうのだ。

「……………ふう」

やっとの思いで保健室から出た私は壁に背をついて大きく息をついた。

保健室という私にとって一つの拷問部屋から出た安心感からである。

時間は大体午後の授業の中頃。今からでも遅くない、授業にでない……………。

そう、思っ一本踏み出した時

「ッ!?!?」

背筋を冷たい何かが走った。

ゆっくりと首を後ろに向ける。見てはいけない、見たくない、見るな。そう自分に言い聞かせるが身体は引き寄せられるかの如く首を、視線を後ろに向けた。

身体のお加減はいかがですか？

いないと思っていた女の子が私の直ぐ真後ろにいた。
その底の見えない暗い瞳を私に向けて……

そして私は駆け出した

第4回・リアル鬼ごっこ……スタート

【第四幕】 三話 『巫女娘襲来、そして私の罪・3よ』

第4回・リアル鬼ごっこin海鳴市

リアル鬼役：聖祥大学付属中学一年・転校生???

リアル追われ役：聖祥大学付属中学二年・アリサ・バニングス

勝利条件：リアル追われ役によるリアル鬼役からの逃亡成功。

敗北条件：リアル鬼役によりリアル追われ役の捕獲

特記：リアル追われ役、精神、肉体的にハンデ有り

嫌だ来ないで、嫌だ追わないで、嫌だ見ないで、嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

嫌だ私の闇をみないで！！

走り出した私はとても無様に逃げ惑う。足がもつれてこけて、息をきらして、犬のように逃げる。

学校の中では逃げ場がない。だから校外へと本能的に逃げる。向かう先は街中。

まだ学校の時間なのに街中を走る聖祥中学の女生徒。周りの目が集まるがそんなことなど今の私には気にする余裕など存在しない。止められている自転車に引っかけ倒し、道行く人にぶつかっては怒鳴られる。

そんな時ふと目に入ったのは裏路地へ入り口。普段の私ならこんな場所には入らない。

追われる側は人目に付く場所に逃げ込むのがセオリーなのだ。けど私はそこに逃げ込んだ。

精神的にもきていて殆ど壊れ掛けていた私には何が正しい判断なのかがわからない。

薄暗い路地をもたつきながら走る私。見つからない場所へ、見つからない場所へと汚く匂う空気を肺に取り入れながら模索する。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい」

走りに走って、最終的にはもう動けなくなった私はゴミ箱の横
で膝を抱え、顔を伏せる。

シーン……としたこの路地裏に私のひたすら謝る言葉だけが小
さく響いていた。

「……………」

私、月村すずかには自室のベッドでぐったりとしている。傍らには
病院にある輸血用パックが一つ、ストローが刺された状態で置かれ
ていた。表紙だけ見なければトマトジュースと勘違いできたかも
しれない。けど銘柄には『blood type: O』と表記されて
いてこれはO型のヒトの血液だという事が分かる。

私、月村すずかと姉、月村忍を含める夜の一族は吸血鬼の一族。
吸血鬼と言っても基本的に快樂、食欲といった三大欲求に任せて吸
血するのではなく身体機能を維持する為に血を飲む必要がある訳で
それがいつしか私達夜の一族が吸血鬼と呼ばれる由縁となった。

けど月村家は快樂、恋愛感情による吸血衝動が大きかった。私

の場合もその恋愛感情はもちろんだが、他人の命の水である血を飲む事を嫌っていた。

私はバケモノ。他人とは違う異質な存在。だから自分を受け入れる事ができなかった。

しかし、こんな醜い女を彼は受け入れてくれた。

彼は、私の吸血衝動を私という人間に付いているただの“オプシヨン”と言って受け入れてくれたのだ。

一瞬戸惑ったけどそれよりも嬉しさの方が大きかった。憧れていた姉とその婚約者のような関係になれるかもしれないと

本当なら今日も学校へちゃんと行きたいのだけどちょうど血の補給の日なのだ。

「はあ、立花君の血が飲みたいな」

すみません。この時の私は貧血(?)で頭の回転が悪いのです。本来ならこんな物騒な事は言いません。言いませんったら言いません。

「……立花君の所に行こうかな？」

この時の私の言葉は気にしないでください。口に出しても実行しないので別に害はありません。

「すすかちゃん。立花君からお電話」

ぐでつとしている私に呼びかけたのは扉の向こうにいるファリン。
“立花君”という単語により一気に覚醒した私はベッドから飛び降りると彼女が言い終える前に扉を開け放った。

「立花君からお電話だよね!? 代わって!!」

先程のぐでつとした雰囲気など微塵も感じさせない形相で彼女から子機をひったくる。そして自分の耳にスピーカーを当てて

「もしもし、すずかです」

丁寧な、静かに応答した。しかし、いくら待っても言葉が返ってこない。返ってくるのは

ツー、ツー、ツー……。

という通話終了を意味するなんの面白味のない一定の電子音のみだった。

「立花君からお電話だったんですけどすぐに仕事に戻らないといけないらしく。言伝をお預かりしてますって……すずかちゃん?」

「ファリン……明日から家に来なくていいよ?」

「ちよっ、すずかちゃん!??」

とてもいい笑顔でクビを言い渡した私。

とてもいい顔で慌てだした元メイド。

私がドアを閉めようとするも必死に抵抗するファリン。今、こ

ここで主従の関係が崩れようとしていた。

「コラすずか。あなたなに馬鹿な事言ってるの……」

そんな時に現れたファリンの助け舟。私の姉、月村忍。彼女の姿を見るやいなやファリンはその細い腰にしがみつき泣き出した。

「忍様！ すずかちゃんがあゝ！！」

「あー、ハイハイ。ファリンはクビにしないから安心してね〜、ところですか。立花君からの伝言はちゃんと聞いた？」

首を傾げる私にお姉ちゃんは小さくため息をつく。立花君からの伝言を私に伝えた。

「バニングスの様子がおかしいと高町さんから電話が来た。俺が早退するまではいつも通りだったんだけど月村さんはなにかしらないか？ もし頼めるなら真意を確認してほしい”そうよ？”」

それだけを言い残した後お姉ちゃんはファリンを慰めながらその場を後にした。けど、私はその場で思考に耽る。

アリサちゃんの様子がおかしい？

おかしいのはいつの事。けど気になったのはなのはちゃんが気付いたから。なのはちゃんは自分の事に関しては鈍感なのに他人の事に関しては敏感なのである。彼女がアリサちゃんの様子がおかしいと言えば十中八九おかしい。

直ぐに自室へと戻った私はベッドの上に投げ出されている携帯電話を手にとると慣れた手つきで親友の番号を呼び出す。次に時間を見て授業中でない事を確認すると今呼び出した番号に電話を掛け

た。

5秒、10秒とコールの音が鳴り響く。しかし、一向に相手が出る気配がない。代わりに応対してきたのはお留守番サービスの音声。留守電に残すメッセージなどにもないので直ぐに電話を切った私はベッドの上に置かれた輸血パックの血を全て飲み干す。次にめったに着ない、ボーイッシュで動きやすい服装に着替え部屋を飛び出す。

そして、家族になにも言わないまま屋敷の外へ出ると一人、街の方に走り出した。

私は膝を抱えうずくまったまま動かない。一体どれほどの時間が経過しただろう。10分？ 30分？ 一時間？ それとも1日？ 一体どれくらいこうしているかわからない。疲れて疲れて、次第に眠くなってきた。

寝たくない。寝たくない。寝たらアレを見てしまう。

彼が腕を無くしたきっかけ、彼の人生の3分の1を奪う事になった理由。そして、

私の罪

そう、アレは5年前……

私が小学校3年生の夏休みの出来事だった。

【第四幕】 三話 『巫女娘襲来、そして私の罪・3』 (後書き)

感想お待ちします

【第四幕】 四話 『巫女娘襲来、そして私の罪・4よ』（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません。

【第四幕】 四話 『巫女娘襲来、そして私の罪・4よ』

六道立花

今や世界十指に入る大企業である六道グループの本社長であり、その創設者である六道司の一人息子。

今や私達の業界では知らぬ者がいないほどの少年。天に恵まれた頭脳を持つ彼の特徴、それは腕の肘から先が無いという事だ。

彼の腕は生まれつき存在しないのではない。事故にしろ、故意にしろ、後天的に失われたのだ。

そう、あれは5年前の出来事

「ふう、やっと着いた……」

小学校三年の夏、私は両親と一緒にアメリカの地を踏んだ。

夏休みの最中この大陸に来た理由は両親の仕事の付き添いがてら旅行しに来たのだ。本当ならなのはとすずかも誘うのだけど彼女達は彼女達でご家族と過ごすらしい。

故に今回の旅行は我がバニングス家の面々のみとなった。

アメリカの地は何度も踏んでるし、父の母国としての愛着もあつた為、私のテンションはかなり上機嫌。ファーストクラスの座り心地のいいリクライニングシートに腰掛けた数時間の空の旅は沸き立つ私の心を更に高揚させた。

久しぶりに向こうのアレを食べたい。アソコに行こうか。お土産はなににしようか。

そんな事ばかり考えながら降り立ったアメリカの地。私達は飛行機から降りた人達の群集で埋め尽くされた空港内を歩き出し荷物を取りに行く。

「さてと、私の荷物はと……うわ……」

一番最初に目に入ったのは荷物受け取りの為に並んでいる人の山。

「流石に時期が時期だったか……」

パパが苦笑しながら私の肩を叩く。今は夏休み、日本から来る家族連れの旅行者も多い。分かつてはいたのだがやはりコレは慣れないモノである。

さてはてどうしたモノかと考えながら辺りを見回していると、ふと珍しいモノを見つけた。

いや、珍しいモノと言っては流石に失礼だ。珍しい光景と言い換えておこう。

それは日本人旅行者。コレだけなら全然不思議ではない。珍し

いと言ったのはその旅行者が私と年端の変わらない男の子だということだ。

普通なら未成年の子供、それもあからさまな日本人の男の子がこんな場所に一人でいるはずがない。初めはもしかしたら迷子かしらと思ったのだが全然そういつた雰囲気ではない。

なにせ、普通にケータイをいじっているのだから。そんな男の子を暇つぶしに観察していると彼がふと視線を上げた。

「……あ」

目が合ってしまった。ものすごく気まずい。慌てて視線を外そうとするが先に彼が視線を外した。その視線の先にあるのは人ごみで埋め尽くされている荷物受け取りのベルトコンベアがある場所。

少しだけその場所を眺めた後、再びこちらを見て、また荷物受け取り場を見る。一体何？ と首を傾げていると最終的にこちらを見てある場所をチョンチョンと指差した。

私は指差す先を見る。するとちょうどその場所はビジネスマン達がならんでいる場所。人数的にはだいたい12人ぐらいだろう。そこだけ家族連れがない。“なによ人が結構いるじゃない”と少しむくれ顔で睨みつける。けど、彼は嫌そうな顔もせずただ苦笑するだけでそのビジネスマン達の列の最後尾に並び“こっちこっち”と私だけに分かるよう手招きした。

「ハア、ねえパパ。あそこだけ人が他より少ないと思うんだけど」

「ん？ でかしたぞアリサ」

え？

パパに頭をポンポンと叩かれた後、腕を引かれて私を手招きした少年の後ろに並んだ。

ここだって他と大差ないんじゃない……。

そう思っていたがドンドン列は進み、ものの5分もしない内に次は少年の番となっていた。その彼も慣れた手つきで自分の荷物を手に取ると私達の前からどいた。

そして、私とすれ違い際にしてやったりのような表情を見せてきた。

な、殴りたい。

そう思ったけど親切にしてくれた彼を殴れない。仕方なしにむりやり笑顔を作って

『Thanks.』

と小さく礼を言う私だったら。

アレから税関や入国審査は至ってスムーズにクリアする事ができた。

パパ曰わく、空港での作業をスムーズに進めるにはビジネスマンの後ろに並ぶのが賢いそうだ。彼等は世界中を飛び回っていて必然的に空港内での作業に慣れているからとか。

なんでそんなことあの子が知ってるのよ。そんな事を思ったけど“まあいいわ”と自分で結論づけた私。

さて、今私は空港のロビーで荷物番がてら一人椅子に座っている。パパは会社からの電話。ママはお手洗いの為に席を外している。ここに鮫島がないのは先にアメリカへと渡ったから、あと1時間もすれば彼が迎えに来る事だろう。

「はあ、暇ねえ」

それにしても暇だ。視界に入るのは行き交う人達のみ。何も面白味もなければ観察する意欲も湧かない対象。ぼーっとしているのも限界があるし何をしようかしら？

『よう、アメリカには帰省か何かか？』

唐突に声を掛けられた。視線を横にずらすと先程の男の子が左手にキャスター付きのアタッシユケース、右肩にスポーツバックを引っさげて立っていた。この時私は驚いた、日本人だと思ってたけど流暢に英語を話すのだ。もしかして彼は日系アメリカ人なのかしら？

『さつきはありがと。けどそれをナンパの口実にするのは感心しないわね。』

『9才の子供がナンパってどんなマセガキだよ』

苦笑しながら隣に座った彼。私も別に嫌な感じがしなかったの
でそれを許す。

『アンタこそアメリカには帰省？』

『いや、俺の母国は日本なんだけどこっちにステイしてるんだ』

『それにしても英語上手いわね』

『俺の都合で学校はアメリカなんだよ』

へえ、そうなんだ。だったら日本語でもいいわね。

「じゃあ、今回はどんな用事で日本に行ったの？ …… って、なによその顔は」

「いや、アメリカ人だと思ってたんだけどえらく日本語が上手いな」

ここで私は今まで日本で育った事を教えた。そして今回アメリカに来たのは夏休みという事もあり、父の仕事の付き添いがてら家族での旅行だという事も話す。

「アンタはどうなのよ？」

「日本には母さんに挨拶しに寄ってただけで本命はドイツに行ってたんだよ」

「何しに？」

わたしが問うと彼は足元に置いていたスポーツバックの中から一つのボールを取り出した。

それは赤、緑、白の人工皮で作られたバレーボールだ。

「ジュニアユースの選考合宿に行ったんだ。見事4日目に落ちたけどな」

それは凄い、アメリカカジュニアユースの選考メンバーに選ばれたとなるとかなり上手いのだろう。

「ふーん、バレーボールするんだ。けど身長が低いわね。」

「レシーブ専門のリベロだからな。身長よりも機動力で売り込んだけどやっぱり世界は広いな。俺じゃまだまだだ。お前は何かしてるのか？」

「私は習い事でヴァイオリンをやってるわ」

彼は私がヴァイオリンをやってる事に“お嬢様だな”とちやちやを入れたので軽くゴツいたり。

彼は飛び級スキップしており今はハイスクール（高校）の高学年に在籍しているらしい。来年にはアメリカ名門大の試験を受けるといふことに驚いたりと気付けば彼とのお話しがそれなりの暇つぶしとなっていた。

彼には彼の予定があるはずなのにこうして話しに付き合ってくれてる。もしかして暇そうにしている私に気を使ったのだろうか？

「そついえば名前はなんて言うんだ？ お前って呼び方じゃ流石にアレだろ？」

「アラ、やっぱりナンパじゃない」

「勝手に言ってる」

私達は互いに苦笑する。まあ、今後会う事はないだろうけどこれも縁でしょう。

私は真っ直ぐに彼の目を見ながら応えた。

「ま、仕方ないわね。そこまで言うなら特別に教えてあげるわ。私
はアリサ。アリサ・バニングスよ」

才色兼備、容姿端麗、文武両道を貫く私。それに恥じぬよう堂

々と名乗った。

彼は目をパチパチさせた後小さく笑うと彼も名乗る。

「よろしくバニングス。俺は」

だがそれは鼓膜を破らんとするばかりの爆音と空気を揺るがす程の振動で遮られた。

【第四幕】 四話 『巫女娘襲来、そして私の罪・4よ』 (後書き)

感想お待ちしています

【第四幕】 五話 『巫女娘襲来、そして私の罪・5よ』 (前書き)

本日更新

【第四幕】 五話 『巫女娘襲来、そして私の罪・5よ』

そう全てはあの爆発から始まった

「い、今のなに!？」

突如響き渡った爆発音。その余波による振動で空港が揺れた。同時に喧騒に包まれていた空港内が“シン……”と静まり返る。耳に入ってくるのは万国共通語である英語によるアナウンス、そして私の小さな息遣いのみ。

誰も喋らない。皆が動きを止めて周囲を見渡している。一刻、また一刻と時間だけが歩みを進める中、どこのだれかもわからない男の人が声を上げた。

『飛行機が爆発したぞ!!』

周囲の旅行者、隣の彼、そして私は空港の映像が映されているスクリーンモニターを見た。

「……じ、事故？」

息を呑んだ。映し出されていたのは真っ二つに割れて火達磨になっている大型旅客機。それは私達が今まで乗っていたモノだった。エンジントラブルという単語が脳内に過ぎる。もし上空で爆発していたら一体どうなっていたらう。そう考えると思わず背筋に悪寒が走った。

周りいる私と同じ旅客機に乗っていた旅行者も同じ境遇だろう。顔が青ざめているもののその表情には安堵の色も伺っていた。

けど、隣の彼だけは違った。

ジッとスクリーンモニターを見ているその顔は何か、思考している様子でも真剣だった。

この時私は彼が何かを呟いている事に気付いた。シン……と静まり返ったこの空港内でも上手く聞き取れない。だから私は耳を澄ましてみた。

「航空機に乗って死亡事故に遭遇する確率は0.0009%。離陸前には必ずメンテナンスチェックを行うがもし仮にエンジントラブルが起きたとするなら上空の可能性が高い。今さっき降りた航空機はメンテナンスチェック前、エンジン系統はOFFののほ、第一国際便ならなおさらメンテナンスチェックに怠りを作る訳が

「ブツブツと呟く彼の横顔を見つめる。一体何を言っているの？そう思った矢先、彼の表情が変わった。目を見開き、額に汗が伝う。

「どつし

気になって声を掛けた瞬間、再び盛大な爆発音と振動が私達を襲った。スクリーンモニターでは別の旅客機が燃えている。そこから次々と旅客機が大爆発、連続して爆発音と衝撃がこの空港を襲った。コレってもしかして

テロリスト？

再び周囲の旅行者と私の思考が合致した。

『うわああああああっ！？』

一人が恐怖により叫び声を上げた。それにより緊張の糸が切られて空港内は大パニックに陥ってしまった。

逃げ惑う人々、我先にと空港の出口へと全力で走る。この時不利な女、子供、お年寄りや男性客に突き飛ばされたりしている。故に親と離れ離れになってしまったり、足を痛めたりしてうずくまってしまう人もいる。

空港内は混沌としていた。パニックのせいかわ私も方向が分からないでいる。

そして、再び鳴り響いた爆発音。それに伴い揺れる空港内。今の衝撃でスクリーンモニターが消え、証明も落ち、薄暗くなってしまった。

今度の爆発音場所は近い。もしかしたら今ので電力供給の起点がやられてしまったのかもしれない。

再び立て続けに起きる爆発。それが人々の恐怖心を煽る。

そんな中、視界の端にあるモノを見た。それは柱の根元でうずくまりながら泣いている私より小さな子供だった。どうやらこの騒動

で親御さんとはぐれてしまったらしい。隣の彼もその子の存在に気付いた。

けど周りの大人はそんな子供には目もくれずに人の流れに沿って走っている。“なんでみんなあの子に気づかないの!?” そう思ったがパニックの中、冷静な判断ができないのが人間だ。

悪いのは周りの大人ではない。悪いのはテロリストだ。

「ホント！ テロリストって最っ低!!」

「同感だ!!」

私達は同時に駆け出した。濁流と化した人の流れを決死にかいくぐる。彼はジュニアユース候補だった事もあり、ずば抜けた運動神経を見せた。私だって親友程とはいかないものの運動関係は得意であり、伊達に完璧を貫いていない。とっさに安全かつ最善のルートを見いだしてそこを駆け抜けた。

「大丈夫!？」

そして子供の場所に辿り着いた私達は泣くその子を守るようにあやす。その子は金髪持ちの女の子だった為、直ぐに外国人だということがわかった。故に英語で優しく話し掛ける。

「パパかママの場所、分かる？」

「……………」

その子は首を横に降り否定の意を示した。それを確認した私達は

互いに視線をあわせて頷く。

『外に出ましょ。きつとパパもママもそこで待ってるわ』

『ホント？』

『ああ、本当だ』

ゆっくり立ち上がった少女を私が抱き上げる。ほんの少し重いけど男の子を抱き上げるよりは断然軽い。それに子供は男性より女性の人肌の方が安心できるモノだ。

「バニングス。辛くなったら代われ」

「私は大丈夫よ。それよりもあの老夫婦をお願い!!」

私が顎で指した先には端っこで固まっている老夫婦。どうやらお婆さんの方が足を挫いてしまっているようでお爺さんは彼女を安心させる為に付き添っていた。

「任された。外で落ち合おう!」

再び走り出した彼の背中に“気を付けて”と小さく言葉を投げかけた私は少女に笑みを見せ

『それじゃ、パパとママの所に行くわよ!!--』

勢い良く出口に向かって走り出した。

結果で言うと少女のご両親は直ぐに見つかった。空港を出た直後に少女自身が親御さんの姿を見つけたのだ。親御さんは涙を流しながら必至に頭を下げてお礼を言ってきた。

私は別に気にしなくてもいい、困った時はお互い様だと述べてその親御さんと別れる。

そして見据えるのは今出てきた空港。屋根からは火の手が上がり未だに小さいながらも爆発が起きている。

「パパとママはいない……」

周囲を見渡すが姿はない。入り口は多数あるから別の場所から出たかもしれない。また、まだ中にいる可能性もあった。だが二人は私アリサ・バニングスの父と母である。二人とも既に脱出している筈だ。

次に気になるのはあの男子の安否だ。彼はもう脱出したかどうか。もしかしたらまだ残っているかもしれない。

「君！ここは危ないから離れて！！」

レスキューの人が離れるよう促すがこの耳には届いていない。小さく頷いた後、私は再び火の手が上がる空港内へと飛び込んだ。いった。

実はこの時、あの男の子は一つ隣の出入り口から入れ違いに脱出していた。それを知らぬ私は自ら死地へと飛び込んだのだ。

「ゴホッ！　ゴホッ！　……誰かいないの！？　いるなら返事しな

「さい!!」

必然的に私は煙に捲かれた状態で空港内をさ迷う事となった。至る所で火の手が上がり瓦礫が道を塞ぐ。

そんな最悪の環境の中、確認できる部屋は確認する。もしかしたらそういった場所に逃げ込んでいるかもしれないからだ。

けど空港内にはもう人影はなかった。皆、脱出したのだろう。侵入できる限り奥まで進んだ私はこれ以上は危険だと判断。私も脱出しようとして踵を返した時、

「ッ!?!」

10メートル程離れた場所にあったゴミ箱が突然爆発した。爆風の圧力で私は柱に向かって吹き飛ばされた。幸い柱で身体を強打する事はなかったが足を強く打ってしまった。あまりの痛みに表情を歪める。目の端から浮かび上がってくる涙をこらえてゆっくりと立ち上がる。

痛い、熱い、苦しい、怖い。そういった弱い感情が湧き上がってくるが私は無理やりに押し殺す。

「テロリストの奴覚えておきなさいよ……!!」

悪態をつく事で自身の状態を確認する。そして一歩、一歩、ゆっくりと歩く。

足が無事なら出口まではさほどの距離ではない。しかし今は負傷している為この距離がとても遠く感じた。

痛い痛い痛い痛い

今まで誰一人見かけなかったという事は人間はほとんど脱出して
いるという事。では何故ここに飛び込んだ？ こんな痛い思いをし
てまで何故飛び込んだ？

周囲の大人が不甲斐ないから？ いや、この状況下でパニック
にならない方がおかしい。

助けを求める人がいるかもしれないから？ それはレスキュー
の仕事だ。

あの男の子がまだ中にいると思ったから？ 可能性は無くはな
かったけどそれは極めて低い。

結論的に言えば私は墓穴を掘ったと言える。
正義感を傘に人命救助が本職の人間でもなく、大人でもなく、ま
だたった9才の子供がカツコつけて越えてはならない一線を越えて
しまった。本来ならあの少女と共に脱出した時点で私の仕事は終わ
りなのだ。なのに……。

「ホント、バカね……」

苦笑しか出てこない。おそらく脱出したらこつてりと両親に怒られるだろう。ついでにレスキューの人達にも怒られることだろう。けど、これも経験と受け止めればなんて事はない。早く出よう、怒られる為に

だけど

「…………え？」

そうはいかなかったみたい

再び近くで起きた爆発。その衝撃で天井の梁の一本が折れた。地上で重力の影響を受けない物はない。必然的にその梁は真下へと落下する。そう、今私のいるこの場所にだ。

呆然とその光景を見ている私。一瞬の出来事なのに私にはとてもゆっくりと落ちてくるように見えた。全く思考が動かない。死の直前には走馬灯が見えるというが私には見えなかった。

とりあえず私は死ぬということはなんとか理解できた。あと言葉を紡ぐとするなら

パパ、ママ……………つめ

バニングスー！！

……え？

突然胸に走った衝撃、私はその衝撃により後ろへと突き飛ばされた。その直後、私目掛けて落ちてきた梁は重鈍な音を立てて床で静止。

突き飛ばされた結果尻餅をついた私は呆然とそれを見ている。

私、生きてる？

それが最初の思考だった。思わず目を閉じ身体を抱きしめて生きている事を確かめた。

うん、ちゃんと生きてる。

次の思考は何故生きているかということ。梁が落ちてきた直後、確かに私は死を悟った。けど生きている。それは別の誰かが私を助けたからだ。

直ぐに今の記憶を辿る。私のファミリーネームを叫ぶ声があったを思い出した。それは今日、私の名前を教えた男の子の声だ。という事は彼が私を助けた事になる。

助かった原因が解った後、身体を抱きしめたまま目を開き前を見る。彼の姿はなく代わりに梁が鎮座していた。私は彼の姿を確認する為、梁をよじ登り反対側へと渡る。足はもう既に感覚がなく酷い痛みが警鈴のように鳴り響いている。その痛みが梁の上に来た時に最高潮となった。もしかしたらひびが入ってるかもしれない。あまりの激痛で体制をくずしてしまい、そのまま反対側へ“ベチャ”と音を立てて落ちた。

身体を打ちつけた痛みと足の激痛で表情が歪む、目を閉じ、奥歯を噛み締める事でなんとかその痛みに耐えた。

「……………」

ある程度痛み慣れたら再び目を開ける。視界に入ったのは思った通りあの男の子だった。意識を失っているらしく全く動かない。功労者賞を送りたい所だがそういう訳にもいかない。今周りには火の手が回りつつあるのだ。

このままこの場においては二人ともこんがりウエルダンとなり主の下へと召してしまう。そうなる前に彼を起こさなければならぬ。

「いつまで寝てるの。早く逃げるわよ」

いくら彼の身体を揺すっても起きる気配がない。

早く、早く、早く……！！

早く起きなさい

「なに、コレ……」

この時私はある異変に気付いた。

彼に触れている部位、私の手がある位置だけ彼の着ている白いシ

ヤツが赤かった。

頬に生暖かいモノを感じた。拭ってみると腕が赤かった。

床に座り込む私の足にも感じた。目を凝らして見ると白かった床が赤かった。

床を見た時に自分の服の異変にも気付いた。夏という事で着てきた白のワンピースが赤かった。

男の子を見ている見た。身体の周りが赤かった。赤い池ができていた。腕が梁の下に隠れていた。

その赤は血、血、血、血

これは何？ 生物の身体を駆け巡る生命の源

これは私の？ そんな訳がない。私はどこも裂傷していない。

だったらこれは誰の？ 判りきったこと、これは彼の血だ。

「いや……」

なんで彼が血を流している？ 梁に腕を潰されたから

その原因は？

私を助けたから

「イヤアアアアアアアア！」

燃えゆく空港内に悲痛の叫びが木霊する。旅行の為に着てきた白いワンピースは朱に染まって、腕も、足も、血まみれ。

「早く！！早く！！早く！！早く！！」

直ぐに彼を助けようと梁に手を掛けて力いっぱい押す。もちろんそれは人間の力、ましてや9才の女の子である私の力で動く筈がない。

「誰か助けて！誰か！」

感情が崩れてしまい涙が瞳から流れ落ちる。

「Please！ help me！ help！！！」

いくら叫んでも誰も来ない。このままでは彼が死んでしまう。

「なんで誰も来ないのよ……」

意識が朦朧としてきた。どうやら一酸化炭素を吸いすぎたようだ。身体からも力が抜けてくる。ゆっくりと私は彼に覆い被さるように倒れる。

お願い……誰でもいいから……

誰か助けて

私が暗い路地裏であの悪夢を夢見ている時、私を追いかけてきている鬼は全力で逃げた私とは対象に未だにのんびりと歩いていた。

けど、進路は真っ直ぐ私のいる場所へとむかっている。

時間帯が時間帯だけに街には学生の姿はない。こんな時間に学生があるいていれば誰も目に止まるだろうし、警察が見れば事情聴取を受ける事になるだろう。

けど、その鬼には誰も見向きしない。まるでそこにその鬼が存在

しないとしてもいうように誰も見ない、気づかない。なのに、人通りのあるこの道で鬼は誰ともぶつかったりはしない。人が無意識に避けている。

なんととも奇怪、異質、異常。それはとてもありえない光景だった。

「
」

鬼が裏路地に入っていく。一歩、また一歩と歩みを進めていき、とうとう。

見つけた

【第四幕】 五話 『巫女娘襲来、そして私の罪・5よ』 (後書き)

過去編はまだ続きます

感想お待ちしてます。

【第四幕】 6話 『巫女娘襲来、そして私の罪・6よ』（前書き）

ご指摘いただきました誤字を修正しました。

【第四幕】 6話 『巫女娘襲来、そして私の罪・6よ』

「……………」

目を開けると目の前に広がったのは真っ白な天井。
知らない天井だと社会現象にもなった某有名アニメの科白セリフを思い浮かべながらその天井をただ眺める。意識が混濁して何も考えられない。心に穴が開いたような虚無感のまま ただ無心に目の前に広がる白い天井を眺める。

「あ、アリサ!!」

「アリサ!!」

そんな静寂な時間が5分程続いた後、部屋の扉が開く音がした。直後に響き渡る私の名前を叫ぶ二つ声。

視界に入ってきたのは30代の男性と女性、パパとママだ。二人は目を覚ました私を確認すると抱きつき涙を流した。ママにいたっては声を上げて大泣きしている。

そうなってやっと私は現状を理解した。ここは病院、意識を失った私は救助されここに搬送されたのだ。

両親が泣き止んだ二人はもちろん頭越しに私を怒鳴りつけた。それはそうだその道の間人間ではなく一般人、それも9才の子供、まし

てや自分達の一人娘が自己満足で危険を省みず一線を越えた人命救助を行ったのだ、親としては怒らない筈がないし、結果がこの様ではなおさら。けどそんな二人も最後には笑顔で“良く帰ってきてくれた”と私に微笑む。そして私は一筋の涙を流して“ただいま”と告げるのだった。

「ねえ、ママ……」

しばらくしてリンゴの皮を不器用に剥いているママ。彼女の手に持っているのはリンゴ。生前に持っていたあの瑞々しくとても美味しそうな姿はなく、今はゴツゴツとした歪な形で健在している。

お料理は皆コックに作ってもらっている我がバニングス家、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれないけど流石にコレはリンゴにも将来的にもアレだと思うので料理ぐらいはできるようにしておくことと小さく決意しておく。とりあえずリンゴには黙祷を捧げよう……アーメン。

それはさておき、私はリンゴを醜く変身させているママに話しかけた。彼女はリンゴを果物ナイフで剥きながらこちらに視線を向ける。とりあえず危ないのでナイフを放させた後、改めて聞いた。

「私の他にもう一人いたでしょ？ 男の子なんだけど彼はどうなったの？」

これが私の心の穴。私を助けた彼はどうなったのだろうか？ 腕

を潰され、沢山の血を流したあの男の子。

私はまだ分かる。ただ運び出せばいいのだ。けど彼は腕があの大きな梁に潰された。救助しようにもあの梁を退けるにはかなりの時間がかかるだろう。それに私が意識を失った時点でかなりの出血もしていた。

「アリサ……」

「もしかして……」

ママの表情が暗くなる。それを見た直後、脳裏に“死”という単語が浮かび上がる。目の端に涙が浮かぶ。

「もしかして死んじゃっ」

「生きてるよ」

耳に入ったのは聞き慣れない男の人の声。その声の方に顔を向けると立っていたのは30代半初めぐらいの男性。180前後の長身と黒い髪、銀縁メガネをかけていて黒い皮のグローブを身に着けているのが印象的だった。

「誰ですか!？」

ママが私を庇うようにして前に出た。だってそうだろう。あの爆破テロがあって、何日寝たかは知らないけどいきなり目の前に現れた見知らぬ人間。こじつけかもしれないがテロリストと思っても仕方がない。なんせ我がバニングス家は日本有数の資産家でありアメリカにも社を持つのだから狙われてもおかしくないのだ。

敵意剥き出しの私の母は今にも飛びかかるとせんばかりの形相だった。けど彼女よりも早く彼に飛びかかった存在がいた。

「それ本当!？」

私だ。

ベッドを飛び出して見知らぬ男性の服を掴み叫ぶ。同時に足に走る激痛。忘れていた。そういえば私、足痛めてたんだっけ？

私は痛みに表情を歪め、崩れ落ちる。そんな私を男性は支える。慌ててママも駆け寄ってくるが私自身よりも私にはあの男の子の事が気になっているのだ。

「無理はだめだよ？」

「私なんかどうでもいい！ 私よりもアイツがどうなったのか教えて!！」

「……………」

彼はジッと私を見つめる。その間誰一人口を開けない。沈黙の間がしばし続いた後、ゆっくりとした口調で私に告げた。

「一命は取り留めた。あの爆破テロから3日目の今日、意識を取り戻してもいる。脳にも異常なし、」

ただ……

「両腕を潰した事により、粉碎骨折、神経損傷、出血の為に壊死。肘から先を切断した」

手から力が抜けた。服を掴んだ腕が力なく下に落ちる。視点が彼から外れた。完全な虚脱感が私を襲う。

そんな私を見た彼は私を抱き上げてベッドに寝かせた。

「お騒がせしてすみません。ところでアリサと共に運ばれたという男の子の連絡先は分かりますか？病院が違うみたいで先生に聞いても連絡先が分からないんです」

「申し訳ない。あの子の情報は極秘事項になっています。病院や連絡先をお教えできません。状態だけバニングスさん達にのみ公開を許可されたので」

「え？ それってどういう事ですか？」

ママ達が何かを話しているが私の耳には届かない。虚脱感の中を漂っている私の心にははつきりと穴が空いて入るのを感じる。謝りたい、会って謝りたい。

それだけを考えてた。いつしか涙が伝うのを肌を感じた。けど顔を歪める事も、泣き声を上げる事もない。ただ涙を流していた。

股につけているものを取り出した。

それは銃。日本ではまずほとんど手に入れられる事のできない物。猟銃ではなく護身用の小さな銃を右手に携えた。

「……………」

無言でセーフティーを外した後、ゆっくりとその銃口を女の頭に向ける。本当ならその両腕を撃ち抜いてから殺したいけど、これ以上コイツと同じ空気を吸うのも不愉快だ。

「サヨナラ」

一気に引き金を引き絞る。それでコイツとあの人の関係は終わる。

そのはずだった。

「なにしてるのかな？」

突然視界ね端から飛び出してきた影。その影は引き金を引き絞る直前に私の銃を蹴り上げ弾き飛ばした。その衝撃により手首に痛みが走る。手首を抑え二歩、三歩と後退した私はその影を睨み付けた。

「なんで邪魔するんですか……………すずかさん」

その影はあの人と縁者の契りを交わした人、月村すずかだった。

「久しぶり、今日は学校だよな？ どの学校もまだ授業中だけど体調不良でもないのに早退なんて感心しないなあ。なんで海鳴にいるのかな？ その制服もウチの学校の制服だし」

「見て分かりませんか？ 転校してきたんですよ。すずかさんこそ今日はサボりですか？」

「ううん。私は貧血で病欠」

「面白いジョークですね。貧血どころか鼻風邪にすら見えませんよ？」

静かな言葉の応酬。あの女を背にして彼女は私と対峙する。銃は離れた場所に落ちていて気軽に取りに行こうものなら多分私は彼女に抑えられるだろう。この状況でも私には対処できる。けど標的であるあの女はちょうど彼女の影、私の死角にいて姿が見えない。

「退いてください」

「退かないよ。退いたら私の親友が危ないからね」

「その女はあの人の腕を奪った張本人ですよ？」

「そうなんだ……、けどその事を彼は咎めたかな？」

「……ッ」

言葉に詰まった。確かにあの人は咎めていない。これは“結果”
だと言って受け入れていたし、私にも“気にするな”と言った。け
ど……

「だけど私は兄の人生を奪われて“ハイそうですか”と言えるほど
人ができてないんですよ!!」

そりゃそうよね……。。

見知らぬ男性が帰ったその日の晩。私は病室で一人パソコンをい
じっていた。コレはパパが私の為に用意してくれたモノで面会時間

を過ぎても暇にならないようにしてくれたのだ。

そして私が見ているのは後天的に腕を失った人達について。

事故にしろ事件にしろ病気にしろ、腕を失った人達の人生は大変なモノだった。

私達五体満足の間人間が気軽にやっている“なにかを持つ”、“なにかを掴む”、“着替える”などの動作ができない。故に誰かに介護してもらおうというのが一般的だ。

次に腕がないという事による精神的負担、社会的な目、といったモノ。

一例では腕をなくした小学生が腕がないというだけでイジメを受けた例もあるとか。

また、雇用にも問題が生じる。腕がないという事は就職活動に大きなハンディキャップを持つ事になる。会社によっては能力次第で雇用するところもあるが全員が全員能力に秀でている訳がなく、全ての会社がそういった障害を持つ人達を雇い入れるとは限らないのだ。

最後に腕や脚を無くした事により夢を、生きがいを無くした人達について。

例1、ヨーロッパの若き有名ピアニストが事故で右手を切断。生きがいであるピアノが弾けないという事に生きる希望を無くし自殺。

例2、プロ確定とされたサッカーユニアユースの少年が同じく事故で右足を切断。半狂乱状態となり社会復帰も怪しい。

例3、天才ヴァイオリニストの少女。同じく事故で左手を切断。明るかった性格が一変、死んだように暗くなり、シヨックにより会話不可能となった。

「……………」

私は震える指でスクロールを動かし記事を読んでいく。中には別の道を見出す人も確かにいた。けど、ほとんどが生きる事に挫折していた。
また、最後の記事にはこうあった。

四肢に障害を持つ人は人生の3分の1のハンディキャップを持っている。

そして、この人達は生きがい、人生を奪われたのだ。

「あ……あ……あ……」

病室に私の声にならない泣き声が小さく木霊する。私はなんて事をしてしまったのだろうか。彼はバレーボールが好きだ。あの年でジュニアユースの候補選手に選ばれるのだからやってきた練習は並大抵なはずがない。そしてそれに耐えてきたのだからもはや生きがいと言ってもいいだろう。

そして、その生きがいと云い、夢という、人生を私が奪ってしまった。

あの爆破テロはテロリストのせいだ。けど、彼の人生を奪う事になったのは私のせい。

心を突き刺す罪悪感。どうしたらいいのか私には分からない。例え謝る事で許されても、私が私を許せない。

それ以前に会う事もできない。

「うあ……あ……………」

絶望感だけが私を蝕んでいた。

『』

そんな時“トントン”とノックの音が部屋に響いた。こんな夜中に一体誰？

涙を他人に見られたくないから涙を拭き入室の許可をノックした相手に告げる。

「夜分にごめんね」

入ってきたのは昼にやってきた見知らぬ男性だった。

「面会時間はとっくに過ぎてますよ」

「そうだね。夜遅くにレディの部屋を訪れるのは失礼だ。僕が来たのは君に聞きたい事があつたからなんだ」

男性はベッドの傍らまで歩み寄ると真剣な眼差しで私を見つめた。

「彼に会いたいかい？」

「え？」

男性を見た。

「昼間僕がここに来たのは彼の現状を君に教える為、本当はそれすらもクライアントから止められたんだけどね。言うなればアレは僕の独断だ。本当の依頼は彼の身辺警護。」

男性は再び問いかけてくる。

「もう一度聞くよ。君は彼に会いたいかい？」

「私は……」

もし今会ったら彼に拒絶されるかもしれない。罵倒されるかもしれない。憎まれるかもしれない。

だけどそれでも構わない。会いたい、私は心からそう思った。

「彼に会いたい、お願いします。彼に会わせてください」

「受託した。その依頼、何でも屋『duplication ES P』 関 和彦が引き受けよう。必ず彼の下まで送り届ける事を約

束するよアリサ・バニングス」

【第四幕】 6話 『巫女娘襲来、そして私の罪・6よ』 (後書き)

感想お待ちします

【第四幕】 最終話 『巫女娘襲来、そして私の罪・7よ』 (前書き)

四幕コレにて終了。

【第四幕】 最終話 『巫女娘襲来、そして私の罪・7よ』

あの後私は“何でも屋”という知らない職業の男性に連れ出された。

テロがあつたのに知らない人に付いていくのは資産家の娘としてとても軽率な行動だろう。けどそんな事よりも私は彼に会いたかつた。

「……………」

移動中、私が乗る車の社内から光が未だに消えない街並みを眺めつつも私は彼に思いを馳せる。

拒絶されたっていい

か
私は何をすべきなのか。彼への恩返し、私の罪滅ぼしはなんなの

それをずっと考えていた。

A M : 2 : 0 0

連れてこられた場所とはある公園。

都会の真ん中にあるこの公園はデートスポットとしても有名で日本のテレビでも紹介されていた。

車から降りた私は“何でも屋”のエスコートに従い歩みを進める。辿り着いた場所はフェンスで囲まれた公園の正面入り口。夜間は人やホームレスが入れないように閉じられているところが今は片側だけだが開け放たれていた。

近づくにつれて見えてきた門の入り口。そこに持たれている人影。私達はその影に歩み寄る。

「葉月、彼は今何してる？」

「あの子なら噴水エリアにいますよ。園内に第三の影は無し、護衛は“blaze”がしてますし、周辺警備は先輩がやってるから大丈夫かと。まあ後で修羅場が待ってるでしょうけど」

「彼女の気持ちも分かるけど、当事者にわだかまりを残すのもどうかとおもうしね。さて、ここは替わるから彼女を頼むよ」

「了解」

話しを終えて私に向き直る影。その影は女の人で私の視線に合わせちゃがむと自己紹介をしてきた。

「はじめまして、何でも屋“nurse”の榎本 葉月です。」

「は、はじめまして、アリサ・バニングスです」

しどろもどろとした口調で自分も自己紹介をすると彼女は笑顔を作り再び“はじめまして”と返してきた。

そこからは笑顔ながらも仕事人という感じの口調で話しを進めてくる。

「それではミス・バニングスからご依頼いただきました彼との面会の詳細をご説明します。

まずは私が園内での貴女の護衛を務めさせていただきます。また面会においての注意事項が三つ。

一つ目“彼に名前や素性を聞かない”。これは情報漏洩を避ける為とお思ってください。万が一このコレを破る事がありましたら面会は中断させていただきますのでご了承をお願いします。

二つ目“面会時間は30分”。今回の依頼はクライアント、ここで言う彼の母親の意にそぐわないモノです。本来ならば彼は病院から出す事は許されないので。彼とバニングスさんがご希望でしたので“私達の独断”という形でご依頼を受けさせていただきました。時間が限られていますので大事にお使いください。

そして三つ目、まあコレは歩きながら話しましょうか？」

そう云って彼女は私の手を引きながら歩き出した。園内はとても静かで、不気味で、それが私の不安というか恐怖心を扇いでいた。

視線はずっと下を見たまま、口から言葉は何も出ない。

「注意事項の三つ目ですけど」

不意に彼女が口を開いた。

「コレは注意事項というより、アドバイスになるのかな？経験者が

「と言えるのは“前向きに考えて”」

前向きに考える？

一体何を前向きに考えろというのか私にはわからなかった。そしてその知ったような口が私には無性に腹立たしかった。

「何を前向きに考えろっていうんですか？」

棘のある口調で聞き返した。

けど彼女は気にする素振りもなく続ける。

「そこは自分で考えないとね。」

それから彼女は彼女も口を開かない。ただ黙々と園内を歩き続ける。それから5分程あるいたろうか、視界の奥に噴水が見えてきた。今は夜中の為水は吹き出てない、昼間のこの場所はきっと綺麗でそれがデートスポットとしての由来になっているのだと思った。

そして、その場所に存在する二つの影、一つは大人の女性だという事が分かった。

もう一つは車椅子に座っている少年の影

彼だ。

「フレア、この子がミス・バニングス。ちゃんとつれてきたよ」

「了解、時間もないから二人きりにさせましょうか」

何でも屋の二人が離れていく。残された私達二人は互いに見つめ合ったまま口を開かない。時間は30分だけ、たったそれだけしかないのに、何かを言わなければならぬのに、頭の中は真っ白だっ

た。

「ただ彼は

「3日ぶりだな。お互い無事でなによりだ」

なんて事を笑顔で言っただけだ。

「なんで……笑ってられるの？」

私の口から出たのはかすれるような小さな声だけ。それも夜風で簡単に掻き消されてしまいそうな程の……。

「ん？ 悪いな、寝起きで意識がハッキリしてないんだ。もう少し大きな声で頼む」

嘘だ。ホントは血が足りなくてまだ意識が朦朧としてるんだ。

「なんで笑ってられるのよって言ったのよ!!」

「そりゃあの中で生き残れたからだろ？」

違う……。

「そうじゃない！ アンタは私のせいで腕を無くしたのになんで笑ってられるの！ 普通は私を憎むでしょ!?!」

「なんでバニングスを憎む必要がある？」

「俺があの場にいたのはまだ誰かが取り残されていないか確認する為。バニングスを助けたのはたまたま。そしてこの腕を無くしたのは俺が自惚れた行動をしたという事に対しての代償、“結果”だ。」

嘘だ。頭のいいアンタなら私達の仕事は脱出した時点で終わっているという事をちゃんと理解している。

なのにあの場所にいたのは私が空港内に戻ったと知ったからだ。その腕も私を助けたからなのに。

けど彼はそんな事など表情にも出さない。

「第一、女を身を挺して守ったんだ。俺としては腕だけで済んでラッキーなんだよ。言わばコレは勲章だな」

「バレーボール……はどうするの?」

「ちよつと早い引退だな。どのみち将来プロにいけるとは思っていないしな」

違うでしょ?

プロになりたかったんでしょ?

その素敵な夢の為に頑張ってきたんじゃないの?

その夢を私が奪ったのよ?

なのになんで怒鳴らないの?罵らないの?

なんでそんなに優しくするの?

なんでそんなに優しいの?

「お、おい泣くなよ」

「ごめんなさい……」

私のせいで腕をなくしてごめんなさい。

「ありがとう……」

私を助けてくれてありがとう。

「ありがとう……」

生きててくれてありがとう。
だから

「だから泣くなって　　!?!」

「　　」

都会のど真ん中に存在するオアシス。月夜に照らされたこの公園で二つの影が重なる。唇から伝わるのは彼の暖かい温もり。私のフアーストキスは彼に捧げた。

この時から私の狂った恋愛は始まった。

あの時、私は決めたのだ。

彼の人生を奪った私はその人生の代わりに私の人生の全てを差し出すと。

「……そりゃそうよね」

この想いが狂ったモノだとは重々承知している。彼がこんなモノを欲しがっているわけがないのも知っている。

けど決めたのだ。

たとえば私の親が、友達が否定しようとも。

たとえば彼の親が、友達が否定しようとも。

たとえば彼が否定しようとも。

私はこの生き様を貫く。人生を差し出す。パパやママの跡継ぎなんて知った事が、私が継いだら会社事彼のグループに参入しよう。

昼間の裏路地で目を覚ました私はゆっくりと立ち上がる。目にもう怯えの色はない、手足もしっかりしている。

うん、ちゃんと動ける。

「……あら、すずか。珍しい格好してるわね。というか今日は貧血で欠席じゃなかったの？」

視線を前に向けると親友がいた。そして彼女の前には一年生の転校生。不覚にも私は彼女に追い詰められていた事を思い出す。

「あ、アリサちゃん？」

「ま、いつか。たまにはズル休みしないと気が参っちゃうのも。それよりも……」

私は親友の前に出ると転校生を見つめる。胸を張り、腰に手を当て堂々と……。

服が汚れてはいるがその風貌はいつもの私、アリサ・バニングスそのもの。うん、やっぱり私はこうよね。

「聞き間違いじゃなければついさっきアナタの口から“兄”という単語が聞こえた気がしたんだけど、“兄”って彼の事？」

「……………」

沈黙か……。

おそらく彼女は立花の妹で間違いない。さて、どう話したモノかしら？

そう思った時、ちょうど彼女の電話が鳴った。その着信音を聞いた瞬間ビクリと彼女の肩が跳ねる。その反応からして、おそらくこの電話は彼女の“母親”、もしくは“兄”。

直ぐに取らない所からすると後者だ。多分彼は母親から妹が転校してくるといふ事を教えられてない。あの人がそういったサプライズが好きだったりするからだ。

そして彼自身そう言ったあまり笑えないサプライズは好きではない。だってそうでしょ？ 転校なんて何か問題があったという考えを持つのが常識的。

職業上職場が変わるから転校なら分かるが彼女場合は除外していいだろう。

レベルの高い学校からこっちに来るならイジメやらなんやら、レベルの低い学校もしかり。

内容はどうあれ、遅かれ早かれ彼女に電話がかかって来るのも時間の問題なのだ。

現に彼女は怯えた様子で携帯を握っていた。

「出なくていいの？ 彼からでしょ？」

「わ、わかってます！ だまっててください！！！」

やっぱり彼からか……。けど、わかってても通話ボタンを押せない。よほど怒られるのが怖いからね。

「貸しなさい。私が代わりに話しを付けてあげる」

「じ、自分でできますので「貸しなさい！！」「ヒッ！！」

怒鳴りつけた私に彼女は反射的に携帯を差し出した。受け取った後、通話ボタンを押し耳に当てる。

『結花！ 今どこにいる！？』

一番最初に聞こえてきたのは立花の怒声。その声量は凄いモノで目の前にいる少女、結花は小さくなって怯えていた。

「もしもし立花？ 私も聞きたい事があるんだけど？」

『ば、バニングスか！？ なんてお前が結花の携帯に出てんだよ！』

「なんでって、その結花から電話を取って話してるんだけど？」

『だったら今すぐ替われ！ ソイツは俺にも母さんにも話しをせずつに転校したんだ！ ついさっき和白と縁から電話がきた！！』

驚いた。この子義母様にも言っただけだったのね。という事は身内の誰かに手続きをさせたと言った所、多分四木さん辺りだと思う。多分動機としてはアレね……。

「その前に私も聞きたい事があるんだけど？ 『いいから替われ！』 妹が兄に会いたいから来たのがアンタには分からないの！？」

『ッ！……お前には関係ないだろ』

彼が息を呑んだのが分かった。私は言葉を続ける。

「関係なくないわ。将来の妹が大好きな兄と一緒にの学校に通いたいと言って転校してきたのよ？ 確か立花は去年までアメリカにいたのよね？ という事は今まで離れ離れになってたってこと、そんな子が前の学校にいたお友達の下から離れてまで単身で来たのよ？ もしや、送り返すつもりじゃないわよね？」

『……今から帰る。場所を教える、迎えに行く』

彼がため息をつくのがスピーカー越しに聞こえた。

「出張はどうするの？」

『予定を変更すれば問題ない。悪いが結花を家にまで連れてつてくれ。道はソイツに聞けば分かるし、屋敷の人間には話しを通しておく』

「悪いわね。それじゃまた後で」

電話を切った後、私は彼女に携帯を返す。なにやら、彼女は睨んでいるがそんな事はお構いなしに私は親友に向き直る。

「私達は一度学校に戻るけどすずかはどうするの？」

「え？ あ、私はお家に帰ろうかな？ 流石に何も言わず抜け出したのは不味いからファリンを迎えに呼ぶ事にするね」

「そ、悪いけど今回は迎えが来るまで一緒にいられないから気をつけるのよ？」

「う、うん」

私は立花の妹の腕を引き、親友と一緒に表通りへと出る。近場にファーストフードの店があったのですずかはそこで待つ事にしたので私と結花は二人、学校へと歩きだした。

道中互いになにも喋らない。30分程してやっと遠くに学校が見えてきた頃になって彼女が口を開いた。

「なんで兄さんに話しを付けるなんて言ったんですか？私はアナタな事を憎んでるんですよ？ アナタの事を殺たいとも思ったのに」

「義妹が遠路はるばる来たってのに追い返す姉がいるわけないですよ？」

「誰が義妹ですか！誰が！！」

あ、この反応はやっぱり兄妹ね。

「妹が兄と一緒にいたいというのに鈍感なお兄様にちょっと文句言わないと気が済まないだけよ。コレは私が勝手にやってることだから勘違いしないように」

そして再び私達は無言のまま歩き出す。実は言つとこの子のおかげで見失い掛けた私の本当の根底を思い出す事ができたから。そのお礼というにはかなり線がズれているけども私は再び狂う。

人生を差し出して彼の為に……。

彼の妹が兄と一緒にいたいと望むならそれを叶えよう。

こうして今日もまた私は歪んでゆくのだ。

余談だけど立花が私に妹の存在を黙っていたことで一悶着あったのは別の話し。

ついでに和白と縁って女の子についても一悶着あったのも別の話し。

かなりぐだぐだでしたがいかがでしたでしょうか？

多分誰もが“アリサ過去を克服”という見解だったと思うのですが、彼女は過去を克服したというより彼女の“本当の根底”がその過去のトラウマよりも大きいので忘れかけてた狂ったモノを思い出したという事です。

うーん、判りづらい。

もっと表現力があつたらいいのに

今回はこの前アンケートをいただきました記念作品の投稿です。何がトップだったかは次回のお楽しみで

では、また次の開幕でお会いしましょう。

記念作品『ここは湯煙海鳴温泉！二人の乙女の温泉バトル！』前編（前書き）

更新が遅くなって申し訳ないです。

記念作品『ここは湯煙海鳴温泉！二人の乙女の温泉バトル！』前編

俺の（私の）りあるおにごっこ30万PV記念作品

『ここは湯煙海鳴温泉！二人の乙女の温泉バトル！』

「久しぶりに来たけどやっぱりいいところねえ」

「そうだね。前に来たのは小学校の時だからホントに久しぶりだよ
ね」

山々に囲まれたこの場所は私とすずかとここにはいないが親友の
高町なのはの思い出の地。

小学校三年の時に来たここ海鳴温泉。私達にとってとても懐かし
い場所だ。

「温泉かぁ……、私も何年ぐらい行ってないかしら？」

「しかし、結花お嬢様は良かったのでしょうか？ あれほど楽しみにしてましたのに」

義母様もとても楽しみなようで鼻歌なんか歌っている。今回の休みの為に多忙なスケジュールを必死に調整していたらしい。余程楽しみだということが窺える。

ちなみにメイドが気にかけている義母様の娘、六道結花は只今、神楽坂市の実家に赴きお祭りの準備に勤しんでいる。

六道家は古くからそのお祭りの運営、取締役をやっているのだが本家の人間が不在なのはマズいので経験も兼ねての参加の為、今回彼女は来ていない。

来れないと分かってからの彼女の落ち込み用はそれは凄いモノだった。海鳴の立花の屋敷にある彼女の自室に引きこもったのだ。呼んでも呼んでも出て来ないし、合い鍵で開けようとするが何故か開かない。そこで急遽義母様を呼んだ所5分だけ席を外して欲しいと言われリビングで待っていたら3分で義母様は結花を連れてきた。なにやら結花がぐったりしていたが触れてはいけないような気がしたので聞かないでおいた。

とりあえず彼女には後日にある神楽坂市のお祭り、“神降し”にみんなで行くという事で手を打ってもらった。

さて、そんな彼女のお兄さんであり私の旦那の立花はというと

「……………」

私とすずかの間で両腕両腕に抱きつかれた状態なのだけど異様にテンションが低い。

恐らく昨晚楽しみで寝れなはかったのだろう。全く子供なんだから

一応言っておきますがアリサの予想は外れています

あ、なんで温泉に来る事になったかみんなはまだ分からないわよね？話しは遡ること1週間ほど前になるんだけど、立花、説明お願い！

ハイハイ承りましたよ。

話しはバニングスの云ってた通り遡る事1週間程前になる。

「クッソオオオオオ！！」

「なんですかかも来るのよ！ 立花はわたしと帰るのよ！」

「アリサちゃんこそなんで来るのかな！ 立花君は私の縁者だよ！
結花ちゃん」

「先輩方こそ遠慮してくれませんか！？ 今日兄妹水入らずで過ごしたいんですけど！！！」

たまたまその日は放課後から出勤しなくても良かったのだが。バニングス達に知られてはゆっくりできるのもできない、趣味と偽って帰ろうと思ったのだけど生徒玄関でどこから聞きつけたのか結花が俺のスケジュールを大声で暴露しやがった。

いや、前の日に明日は会社に行かなくていいから勉強を見てやると言っただけで口止めしてなかった俺も悪いんだが、そういうハプニングがあつて一緒に歩いてたバニングスと月村さん、そして結花を相手としたリアル鬼ごっこが開催された訳である。場所は海鳴市の町内。

ちなみに今回のリアル鬼役はバニングス、月村さん、結花の三人という目も瞑りたくなるメンツだ。言わずと知れた女帝とパーフェクトガール、そして馬鹿みたいな身体能力の妹、ハッキリ言って開始数秒で捕まる自信があつた。けど、幸か不幸か三人は互いに妨害しあっている為になんとか今まで逃げ延びている。

「先輩方、ここは一時休戦としませんか？ これではいつまで経っても兄さんを捕まえられません！」

ゲッ

「そうだね！こういった場合は立花君本人に聞いてみるほうがいいよねー！」

「とつ訳でー！」

マジかよ！？

「うわあああああー！？」

町内に響く悲鳴の下、俺は三人に捕獲されるのだった
ア
ーメン。

喫茶『翠屋』

目が覚めたら見知らぬ空間にいた。甘い香りと香ばしい深い香り、俺はテーブルに突っ伏しているらしく、一番最初に目に入ったのは黒い壁、というかテーブルなのだけど、だるい身体を持ち上げて俺は小さくため息をついた。

「あ、兄さん。大丈夫？」

「気を使う位なら今日くらいゆっくりさせてくれ」

隣でショートケーキを頬張っている我が妹を睨みつつ、テーブルの上に視線を向ける。テーブルに並べられているのは色とりどりの洋菓子。ショートケーキ、ティラミス、フルーツ、いかにも女の子が好きなお菓子だ。

「……………ここは喫茶翠屋。私達も小学生の時からお世話になってるんだよ」

なにやら月村さんの機嫌が悪い。ティラミスが見るも無残な姿になっっている事は気にしない方がいいだろう。

「ここのパティシエのお菓子にはいくつも見覚えがあるよ。二年程前かな？ 母さんがまだ本社代表も兼任していた時んだけど、ウチの系列のホテルの支配人が人材獲得の資金交渉の為にサンプルを買って本社に来たんだ。たまたま俺も居合わせて食べさせて貰ったんだけどあのシュークリームは美味かった。まあ、結果として断られたんだけどな」

「立花の会社からスカウトが来て、社長から太鼓判をもらうなんて流石桃子さんね」

「バニングスが隣でニコニコしながらフルーツケーキを食べている。ああ、そういう事か、多分月村さんはポジション取りでじゃんけんでもして負けたのだろう。」

「桃子さん？」

「いらっしやい六道君」

首を傾げた時、店の奥から出てきた1人の男性と二人の女性。一人は月村さんのお姉さんの旦那さんで彼女の将来義理兄になる、高町恭也さん。もう一人はクラスメートの高町さん。あと一人は……お姉さん？

「あ、恭也さん!!」

「お邪魔してるわよなのは」

「「……………」」

俺と結花は立ち上がって礼をする。

そんな俺達にお姉さんっぽい人が丁寧に頭を下げた。

「高町桃子です。貴方が六道立花君ね。娘と息子がお世話になります」

娘？ 娘とは誰の事だ？現状で高町の性を持っているのは高町さんと恭也さんだけ って

「高町さん（先輩）のお母さんですか!？」

「にはは……。うん、コッチがお母さんでこっちがお兄ちゃん」

「久しぶりだな立花君」

マジかよ。恭也さんがお兄さんなのは分かるが桃子さんはお姉さんでも十分通用するぞ？

「お、恐るべし海鳴市」

「いや、立花君の母君も年齢不相応の容姿だろう」

「そうなんです！ 義母様も年齢よりずっと若いんですよ!!」

そんなこんなで始まった各々の親に対する若さの秘訣講習会。最初は迷惑だから静かにしろと注意したものの“今日はあまりお客がないので別に迷惑ではない”と返されてしまった。

俺と恭也さんと言うと、若さの秘訣講習会なんて受けても仕方がないのでカウンターで話しをしている。

「すまないな」

「いえ、気にしないでください」

カウンター越しで食器を洗っている恭也さんに苦笑しながら首を振る。正直言つてやっと落ち着いた感じだ。この人がいなくなったらきつとのんびりとできなかつただろう。中立万歳。

「そういえばすすかちゃんとは最近どうなんだ？ 友か伴侶としてはまだ未定だが縁者の話しはうけたのだろ」

違った。この人は月村さんサイドだった。

それが分かつて途端に俺はあからさまな挫折感を醸し出してテールに突っ伏す。

「裏斬りましたね……信じてたのに」

「すまない……すすかちゃんのめいれ じゃなくて、一応彼女の義兄だから気になってな」

今明らかに後方から飛来してきた殺気に彼はセリフを変えた。はあ、この人も苦労してんだな。

「俺から見ても彼女はいい娘だぞ？ 最近は立花君の為に料理の勉強もしてるらしい」

「ハハ……好意はありがたいのですが。俺は社長業でいっぱいっぱいなんですよ。すみません」

「いや、こちらこそすまない」

「おや、初めてのお客さんだね」

厨房から出てきた栗色の髪の男性。容姿からしてお兄さんとも取れない事はないけど

「父さん、こちら六道立花君。以前母さんをスカウトしに来たホテルのオーナーだよ」

「ああ、君がなのはのクラスメートだね。アリサちゃん達から話は聞いてるよ。僕は高町士郎、なのはの父だ」

「お初にお目にかかります。六道グループ本社代表、日本支部統括顧問を務めています六道立花です」

一応、身内が顔合わせをしているという事もあり社長として挨拶をしておく。いやいや、母が母なら父も父か……。

「しっかりしてるね。ところで男二人でどうしたんだい？」

士郎さんに今の現状を説明すると彼も同情してくれた。

「ハハハ、妻と娘が悪いね。お詫びと言っちゃなんだけどコーヒーとシュークリームでも奢ろうかな？ 恭也も休憩すればいい」

「いや、せっかくですが……」

「気にしなくていいよ。今は他のお客さんもないしね」

「と、父さん」

少し困ったような表情をした俺に恭也さんが気まずそうに自分の父親を見る。彼は首を傾げたので俺は自分の腕を見せた。

「あ……」

「すみません。今日はドタバタしてたので義手を持ち合わせてないんですよ」

実は今、サリさんはこの場にはいない。本社へお使いに行ってもらっている。少しだけ気まずい空気がこのカウンターを包む。二人がなんとか言葉をだそうとするがなにも出てこない。さて、どうしたものかと考えていたら

「立花もここのお菓子食べるわよね？」

いつの間にか隣に席に腰掛けていたバニングスが俺の顔を覗き込んできていた。

「食べたいのはやまやまんだけど義手がないんだよ」

「なんだったら私が食べさせてあげるわよ？」

「断る！」

彼女でもないのに食べさせてもらうなんて恥ずかしい事できるか！！

「冗談よ。ホラ、腕出して」

小さく笑うバニングスの手には俺の左腕義手、『隠れフォーク君』があった。どこから出した！？と全力でツッコミたいが、聞いてもはぐらかされしまうのでここは大人しく左腕を出しておこう。

「いやいや、立花君とアリサちゃんは馬が合うみたいだね」

「……気のせいです」

肉体に義手を取り付ける圧力を感じながら土郎さんを睨みつける。そしてカチツという接続完了の音を耳にしたあと造られた手の平を開いたり、握ったりして義手に異常がないか確かめた。

「よし、異常なし」

「土郎さん、彼のコーヒーはコレをお願いします」

「うん、分かった。種類はどうでしょうか？」

「キリマンをお願いします」

「オイ、勝手に決めるな」

「土郎さんのオリジナルもいいけど、今は飲み慣れたモノの方がいいでしょ？」

「あはは、畏まりました。それではシュークリームとキリマン、只今お持ちします」

なにやら楽しそうに笑う土郎さんは奥の厨房へと姿を消す。恭也さんはと言つと俺達を見てなにやら険しい表情をしている。

「なんですか？」

「いや、敵はかなり強敵だなと思ったただけだ」

「アリサちゃん何してるの!?!」

そこへ声を荒げながら走り寄ってきた月村さん。俺達の間に入るとバニングスを凄いい形相で睨みつけた。

「ホントにアリサちゃんは油断も隙もないよね。ちょっと目を離したら一人だけ抜け駆けだなんて」

「抜け駆けだなんて人聞きの悪い事言うわねえ。私は妻として当然の事をしたまですよ?」

いや、俺は結婚してないから。そう言いたかったが言ったら言っただで矛先が変わる可能性があったのでここは言わずに黙っておく事にする。

「兄さん兄さん!」

こんどは結花が高町さんと一緒にやってきた。とても楽しそうに笑う彼女ね手にはなにやら黄色い紙の束が握られている。

「今日、商店街で福引きがあるんだって。先輩のお母さんから福引き券貰ったから一緒にやる!」

「あはは、ホントはコレお客さんに配る物なんだけど。お母さんが良かったらって」

「悪いな、ありがたくいただくよ高町さん。後で行こうか結花」

「やった」

ぴよんぴよん嬉しそうに跳ね回る妹。高町さんはそんな彼女を楽しそうに眺めている。

「福引きかあ、私はあまり経験ないからちょっとたのしみかも」

「私をはじめてなのよね」

いつの間にかバニングス達も会話に加わってきて福引きをネタに賑やかになった。

「ところでバニングス」

「ん、なに？」

「福引きってなんだ？」

「……え？」

商店街

商店街に来た俺達は福引き会場へと足を運んでいた。周囲は人々の熱気で満ち、活気に溢れている。

「へえ、アレが福引きか」

視線の先にあるのは平たい八角柱を立てて取つてをつけたモノ。来る人来る人が回しては空いている穴から白く小さい玉を出していて、その都度ポケットティッシュを受け取ってる。

「うん。あのガラガラを回して出た玉に応じて景品がもらえるんだよ」

「けど、本命の景品の玉はあそこにある景品の分だけ、7等まであるから全部で7個しかないのよ」

「だから福引きってわけ」

月村さん達の説明を聞きつつ人がガラガラを回す光景を眺める。いまだに景品が無くなってない所からして誰も当たりを引いていないのだろう。今、回した人も白い玉を引いてポケットティッシュを受け取っている。正直言つて当たりが入ってるのか怪しいぐらいだ。

「当たり…ちゃんと入ってるのか？」

「大丈夫だと思うよ？」

そんな事を考えていたら結花が小さく耳打ちしてきた。

「あのガラガラから邪なモノは見えないし、ちゃんとそれっぽい気配が見えてるから不正行為はしてないよ」

ジツとガラガラを見ていた彼女はケラケラ笑いながら俺の右腕を取って列へと引つ張っていく。靈感等が異常に強い彼女が大丈夫と言うなら大丈夫なのだろうと、気を改めてそれに従い歩みを進めた。

「よう嬢ちゃん、坊ちゃん！福引き券はあるかい？」

5分程して俺達を出迎えたのは八百屋の格好をしたイカついオッサン。赤い半被を来たオッサンは白い歯とハゲた頭を輝かせる。

「こんにちは。福引き券、ちゃんとありますよ」

「あいよ！ 5人分だな っていうかモテモテだなオイ！女の子4人もはべらせてよお」

ズツゴくにやにやしてるオッサンのセリフを聞いた俺は苦虫を噛み潰した表情になる。

「なに仰っているのですかオジサマ。彼は旦那で私は妻、他は旦那の妹と他人、そして野良猫ですわ」

「いえいえ、彼の妻は私、他は夫の妹と他人、そして野良犬ですよ」

「お兄様は誰とも付き合つてませんよ。あ、私は妹です。こちらは
お兄様の御学友で私の先輩、この2匹は野良犬と野良猫」

順にバニングス、月村さん、結花、似通っているような三種三様の返事。互いにひでえ事を言っているし、バニングスはお嬢様口調、結花は学園内で被っている猫を持ち出してもいる。とりあえずいつものツツコミをしておこう。

「誰が旦那だ！ 誰が夫だ！ 結花も火に油を注ぐな！！」

「私達親友だよね！？ それが他人に格下げ！？」

高町さんの御意見もごもつとも、理不尽なレベルで人間関係をラックダウンさせられた彼女はまるでマンガのような表情になり、マンガのような涙を流す。

「ダッハッハッハッ！ どうだい坊ちゃん、1人オジサンに分けてくれねえか？」

「「どうぞどうぞ」」

「「こっちの雌犬（雌猫）でよければどうぞ」」

「私の事は無視！？」

俺達の声が被る。順に俺、結花、次いでバニングス、月村さん、最後に高町さん。こんな俺達にオッサンは再びダッハッハッハッと豪快な笑い声を上げた。俺達の後ろに並ぶ、ご婦人達も微笑ましい笑みを浮かべている。

だけど次の瞬間、その笑い声は唐突に掻き消された。

「くおおおら！ このダメ人間！ ベチャクチャだべってねえで
仕事しなー！」

スパコーン！と軽快な音を立てた後オッサンが豪快な音を立ててガラガラを置いている長机に顔面を強打。その後ろから現れたのはサラシを巻き、赤い半被を身に纏い、黄色いメガホンを持った20代半ばぐらいの女性だった。

「ハア、全くいい歳してこの男は……」

腰に手を当て大きく溜め息をついているこの方、視線の先には煙を上げながら長机に顔をうずめているオッサン。一瞬、オッサンの生死やらこの長机の材質について考えてしまったがここは流しておいた方が無難だろう。

「悪かったねえ、坊ちゃん達」

「い、いえ、私達の事はお構いなく」

流そうにも流せてないでいる結花がオッサンの事を気にしつつもお姉さんに対応している。ちなみに高町さんを除く俺達3人は既に気にしない路線でいる。

「アツハツハツハツ！ お嬢ちゃんいい子だね。そんなお嬢ちゃん達に福がありますように！ ホラ、さっそく回してくんなー！」

「あ、ハイ！ それじゃ誰から回そっか？」

高町さんが俺達を見る。ここは貰い物とはいえ、この福引き券を

くれた高町さんからだろう。

そう思っただけ俺は月村さんとバニングスに目をやる。俺の考えを察してか二人とも別に異論はないらしく軽く微笑んで答えてくれた。

「ここは高町さんでいいだろ」

「そうね。この福引き券なのはのお母さんに貰ったんだからここはなのはよね」

「別に気にしなくていいのに」

苦笑しつつも高町さんは一歩前に出る。彼女の後ろでは結花が“頑張ってください!!”とエールを送っている。小さく深呼吸をした彼女はガラガラの取っ手に手をかけて

「高町なのはいきます!!」

景気よく回し始めた。くじ引きにはこれだけ気合いを入れるのが普通なのか？ など一人考えている俺。

まあ、そんな事はどうでもいいとして某ロボットアニメの出撃のような掛け声を出した彼女の結果はというのだ

「ハイ、残念賞のティッシュ」

「」

「ご覧の通り、いくら景気よくやったとはいえ所詮は運次第。百個以上ある玉の中から7個しかない当たりを引かなければならない。残り百個として単純計算、百分の7。百回回せば出るだろうが生憎俺達は一回ずつしかガラガラを回せる数の福引き券を持ち合わせて

いないのでコレはコレで当たり前の結果だ。

「にははは、残念賞」

「だらしないわね。福引きくらいスパッと当たり引きなさいよ」

スパッと引かれたら福引きにならないだろが。

「次は私がやります！！」

「結花ちゃん。気合い入ってるね」

なにやら気合い十分な我が妹。ガラガラに向かい住まいを正し、精神を集中させている。なにか景品で欲しいモノでもあるのか？ そう思っただけの置かれている場所を何気なく見た後、その訳を理解した。

「なるほどな」

「どうしたの？」

一人納得している俺にバニングスは首を傾げながら顔を覗き込んでくる。

「結花が気合い入ってる訳が解ってな」

俺が顎で指す先にあるのは3等の景品として飾られている最新のウォークマン。以前、何度かねだられた記憶があったのでアレを見たら直ぐに理解した。その事を説明してやると

「それぐらい買ってやればいいじゃない……と言いたい所なんだけど」

「ああ、楽しんで手に入れてはアイツの為にならないからな。学業で結果を残せば買ってやるって言っているんだ」

もっと大ざっぱに言えば欲しければ実力で掴み取れと言った所か。楽しんで手に入れるなんて事を覚えて欲しくないからな。彼女も同意見のようで“ま、頑張りなさい”と小さく笑みを見せている。

まあ、そんな事はいいとして俺は再び妹に視線を向ける。精神統一が終わったのか彼女はゆっくりとガラガラに向けて頭を下げだした。

降りたまえ、下りたまえ、下りたまえ

下げる事三度の礼、により周りの人達が静かになった。そんな事には気も止めない我が妹は手を広げ続ける。

答えたまえ、応えたまえ、

天之御中主神、八百万神々、答えたまえ、応えたまえ

左手の平を右手の甲を正面に向けた状態で親指を使って枠を作る。それを覗きこんでガラガラを見据えた後、今一度頭を下げた。

「いきます」

頭を上げた彼女はゆっくりガラガラを回す。一回転、二回転、三回転目でガラガラから玉が吐き出された。

色は “黄”

「三等大当たり〜〜〜!!」

お姉さんの声が静かになっていった商店街に響き渡る。同時に周りから歓声が上がった。そんな中ぴよんぴよん嬉しそうに飛び回る妹“おめでとう”と笑顔を向ける高町さん。“良かったわね”と自分の事のような笑みを見せているバニングス。そして……

「……………」

引きつった表情の俺と月村さんがいた。確かに欲しいモノは実力で掴み取れと教えたつもりだったが……これはアレだ、帰ったら軽く説教する必要があるな。

「えっと……、次は私がやるね」

気を取り直して続いては月村さん。大事そうに三等のウォークマシンを抱きしめる妹の脇を抜けた彼女はおもむろにガラガラを一回転、二回転、三回転。

そしてガラガラより吐き出された玉は“赤”

「凄いいじゃないかお嬢ちゃん！ 5等大当たりだよ!!」

コレは凄いい、二者連続で当たりを引くとは月村さんってなかなかの運の持ち主のようだ。

おっと、そういえば景品はなんだったかな？

「はいよお嬢ちゃん！ 景品の日本各地のトマトで作ったトマトジューズ詰め合わせ3ケース！！」

ブフウ！！

結花が思わず吹いた。高町さんとバニングスは首を傾げている。俺も予想外の事で思わず吹き出しそうになったがなんとか耐えた。けど、腹が痛い……。ダメだ！表情に出すな！ポーカーフェイスを貫け！！

「結花ちゃんちよつといいかな？」

「は、はい？」

必死に笑いを耐えているであろう結花は震える声で返事をした後、月村さんに連れられて裏路地へと姿を消した。この時、月村さんの口がぱつくりと不気味に裂けていたのは気のせいにしておきたい。とりあえずは後がつかえているのでさっさと済ませてしまおう。

「あー、次は俺がやるのかな？ そういえばバニングスは景品で欲しかったりするモノがあったりするのかな？」

「え？ そうねえ……」

軽く現実から逃げ出した俺。

景品棚をマジマジと観察する彼女。一瞬、6等の景品に目が止まったが直ぐに目を離してしまう。

「……特にないわね」

「そうか」

そっけない返事を聞いた後、左腕義手【隠れフォーク君】で不器用ながらもガラガラの取っ手を掴んだ俺はゆっくりと一回転させる。吐き出された玉の色は“緑”

「ろ、6等。大当たり……」

お姉さんが引きつった表情で景品を渡してきた。6等の景品はちよつと大きめなサイズの子犬のぬいぐるみ。

「はじめてだったがついてるな……ホラ」

“当たればいいな”とは思ったが当たるとはツいている。受け取ったぬいぐるみをバニングスに渡す。別に俺が持っていないも仕方がないし、結花は犬より猫だからな。

「いいの？」

「俺が持つても仕方ないだろ？」

「……ありがとう」

ぬいぐるみを抱きしめた彼女は少しだけ、頬を赤くして礼を言うてきた。こうしていればコイツもかわいいのだから。まあ、そんな事は期待しても無駄だろう。そんな事よりもさっさと終わらせないと。

「最後はバニングスだぞ」

「ぼ、坊ちゃん達、恐ろしい強運だねえ」

お姉さんの言いたい事も分かる。こんな子供が連続で当たりを引いているのだからな。まあ、まさか俺まで当たりを引くとは思わなかったけど。

『流石にバニングスまで当たりを引くことはないだろ……』

そんな事を考えながらぼんやりとガラガラを回す彼女を眺める。けどそれは大きな間違いで、アリサ・バニングスという女に付与されているブーストは運さえも味方につけるのという事をこの後知る事となった。

記念作品『ここは湯煙海鳴温泉！二人の乙女の温泉バトル！』前編（後書き）

記念作品の続きはもうしばらくお待ちください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2249k/>

俺の（私の）りあるおにごっこ

2011年3月3日09時31分発行